

# 山形県立博物館動物資料データベースと S-Net/GBIF への登録

羽角 正人\*・本間 正明\*\*

Database of animal specimens and materials deposited in the Yamagata Prefectural Museum  
and their registration to the S-Net/GBIF

Masato Hasumi & Masaaki Homma

## 1 初めに

山形県立博物館(以後、県博と略す)への 2018 年 4 月 1 日の初出勤日に、本稿の第 1 著者が 2018 年度の主な仕事として業務命令を下されたのが、2019 年 2 月末日までに動物部門の資料 15,000 点を国立科学博物館が主催する S-Net/GBIF に登録することであった(その後、登録を希望する地方博物館の増加で、2018 年度の登録資料数は 12,000 点に減らされていたが、国立科学博物館と「既に県博の予算に組み込まれている」という理由で交渉し、当初の 15,000 点に戻してもらった)。調べてみて分かったのは「県博の収蔵資料データベース(以後、DB と略す)に登録されている 40,000 点余りの動物資料の学名の多くで、命名者名の後に書くべき年号(命名年)が欠けている」という現状であった。それらの総てで、信頼できる複数の DB を基に、ひとつひとつの種の学名[属名・種小名(亜種小名)・命名者名・命名年]をチェックしたところ「収蔵資料 DB 登録以降、学名・和名が変更されている種や亜種に細分化されている種、綱・目・科レベルで変更されている種が少なくない。亜種から種へと変更されているものも少なくない。学名が存在するのに和名がなくなっている種がある」といった不具合が多かった。それら以外にも「学名の一部が全角入力されているので、正しい学名で検索をかけてもヒットしない種が多い。学名の取り違えや誤入力が少なくない。学名が同じで、和名が異なる種

が少なからず入力されている。学名と和名が種間で入れ替わったり、ズレて入力されたりしているケースが少なくない。同じ種なのに目名や科名が異なるケースが少なくない。目名と属名が同じなのに、科名が異なっている。種小名と亜種小名が連続して入力されているため、ひとつの種小名として取り扱われている」といった、明らかな誤入力と思われる箇所が数多く見られた。そのため、こういった細かな間違いに気付く能力や、何が正しいのかを見極める能力が試される状況がほとんどで、間違いを容易に比較できる調査手法の確立が急務であった。

収蔵資料 DB に登録されている動物資料 40,000 点余りは、エクセルで作成されている。作成に当たっては、入力専門の職員を数年にわたって半年間ずつ雇い、入力されたデータを当時の担当者がチェックするという方法論が採られている。これらのオリジナルデータの中から、2014 年度には昆虫綱チョウ目 17,313 点中の 14,923 点と爬虫綱 83 点中の 77 点を合わせた 15,000 点が、S-Net/GBIF に登録されている(登録後は国立科学博物館から 1 点あたり 40 円の報酬が支払われ、消費税を含めた 648,000 円が山形県に支払われている。チョウ目で未登録の 2,000 点余りを調べたところ、和名や学名、採集地の入力がなかった)。本稿の著者 2 名は、この登録の後に着任しているので、エクセルで作成された動物資料のオリジナルデータを検討するのは今回が初めてであった。

\*山形県立博物館 嘱託 \*\*山形県立博物館 学芸員

オリジナルデータは、新旧の通し番号は入っているものの、門・綱・目・科・属・種の並びはバラバラで、あちこちに入力されていた。第1著者は、これらのデータから分類群ごとに門や綱を抜粋し、門・綱・目・科・属・種の順にシートを作成してから、ソートをおこなった(学名で1種ごとにグループ化した)。次に、それぞれの分類群で信頼できるDBを探し出し、門・綱・目・科・属・種の学名・和名が間違っていないか、あるいは最新のものかどうかをチェックした。その過程で、間違いと思われる数多くの箇所の中から看過できない間違いを第2著者に報告し、第2著者が動物所蔵庫の標本に当たって調べるという方法論を採った。採集地情報の多くは、第2著者がチェックした。訂正した記述は履歴を記録し、一目で分かるように色付けした。

著者らが学名・和名のチェックをおこなった順番は、両生綱、哺乳綱、鳥綱、棘皮動物門、甲殻亜門(節足動物門からの分離)、少数派(ホヤ綱、腕足動物門、苔虫動物門、ムカデ綱・ヤスデ綱、環形動物門、星口動物門、刺胞動物門、海綿動物門、その他)、昆虫綱(チョウ目を除く)、旧魚綱、軟体動物門である。動物資料1点の中には、たった1個体のオスやメス、または幼体や卵だけが含まれるケースもあれば、100個体以上のオスやメス、または幼体や卵が含まれるケースもある。鳥綱では、卵が入った巣そのものも資料として扱われている(1点とは、ある場所である時期に採集され、動物所蔵庫や他の保管庫の1ヶ所に保管されている資料の総数を示す)。学術用語の *original combination* は、本来「原結合」という意味だが、ここでは「原記載」という用語を使用した。

## 2 両生綱

県博が所有する両生類の資料数は244点と少なく、日本に生息する両生類の種数自体も多くない(2018年7月の時点で有尾目35種、無尾目48種)。第1著者が両生類の専門家ということもあって、特定のDB

を利用するというよりは、日本爬虫両棲類学会が発行する日本産爬虫両生類標準和名2017年12月9日改訂版、及び2018年7月19日改訂版を参考にした。

学名は、命名年が入っていないものが244点中5点と少なく、一見すると問題はなさそうに思われたが、種小名の誤入力(e.g., クロサンショウウオの *nigrescens* が *nigresens* に)、命名者名の間違い(e.g., モリアオガエルの Okada & Kawano が Okuda & Kawano に; カスミサンショウウオの Temminck & Schlegel が Schlegel に)、命名年の間違い (e.g., トウホクサンショウウオの 1883 が 1887 に; ニホンアマガエルの 1859 が 1858 に)が見られた。不完全な和名も少なかつた(e.g., アカハライモリがイモリに; アズマヒキガエルがヒキガエルに)。収蔵資料DB登録前後に、分類体系の見直しや新種記載で、学名が変遷している種が少なからず見られた。山形県内で、かつてハコネサンショウウオ *Onychodactylus japonicus* (Houttuyn, 1782)とされていた種は、最上川流域と蔵王山を境に北側個体群がキタオウシュウサンショウウオ *Onychodactylus nipponoborealis* Kuro-o, Poyarkov & Vieites, 2012 に、南側個体群がバンダイハコネサンショウウオ *Onychodactylus intermedius* Yoshikawa & Matsui, 2014 に分けられた(Yoshikawa & Matsui, 2014)。著者らは、ハコネサンショウウオとされていた種の採集地情報を基に、県博所有の資料13点をキタオウシュウサンショウウオ7点、バンダイハコネサンショウウオ6点に分けた[羽角(2018)で、7点とされていた資料数は途中経過]。

収蔵資料DBの登録から大きく変わったところでは、ヌマガエル *Fejervarya limnocharis* (Grabenhorst, 1829)がある(Grabenhorstは誤入力)。この種の属名は *Rana limnocharis* (Gravenhorst, 1829)からの変更で、現在は *Fejervarya kawamurae* Djong, Matsui, Kuramoto, Nishioka & Sumida, 2011 が適用されていた。カジカガエル *Polypedales buergeri* (Temminck & Schlegel, 1838) は、かなり以前に属名が変更されていて、*Buergeria*

*buergeri* (Temminck & Schlegel, 1838)が使われている。ヘリグロヒキガエル *Bufo melanoseictus* Schneider は、属名と種小名が異なる *Duttaphrynus melanostictus* (Schneider, 1799)が有効学名であった。

*Rana* 属は、軒並み属名が変更されていた。トノサマガエル *Rana nigromaculata* Hallowell, 1861 は、属名変更と種小名の語尾変化で *Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell, 1861)になっていた。プランシーガエル *Rana plancyi* Lataste には、*Pelophylax plancyi* (Lataste, 1880)が適用されていた。ツチガエル *Rana rugosa* Temminck & Schlegel, 1838 も属名が変更されて、*Glandirana rugosa* (Temminck & Schlegel, 1838)になっていた。クールガエル *Rana kuhlii* Tschudi, 1838 も属名の変更で *Limnonectes kuhlii* (Tschudi, 1838)になっていた。トラフガエル *Rana tigrina rugulosa* Weigmann は属名が変更され、亜種から種へと昇格した結果、種小名が語尾変化した *Hoplobatrachus rugulosus* (Wiegmann, 1834)が適用されていた。

### 3 哺乳綱

哺乳類の DB は調査時に適切なものがなく、Wikipedia を参考にしたが、2018 年 6 月に世界哺乳類標準和名目録(川田ら, 2018)が出版されたので、これを使用して一部の和名・学名を追認した。

哺乳類の資料数 408 点に目名や科名の変更はなかったが、不完全な和名が少なくなかった[e.g., イタチ(ニホンイタチ); ノウサギ(ニホンノウサギ); オットセイ(キタオットセイ); カモシカ(ニホンカモシカ)]。キツネ *Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758)は和名が変更され、種から亜種へと降格したホンドギツネ *Vulpes vulpes japonica* J. E. Gray, 1868 が有効な和名・学名であった(キタキツネ *Vulpes vulpes schrencki* Kishida, 1924 と亜種の関係)。イノシシ *Sus scrofa* Linnaeus, 1758 も和名が変更され、種から亜種へと降格したニホンイノシシ *Sus scrofa leucomystax* Temminck, 1842 が適用されていた(リュウキュウイノシシ *Sus scrofa*

*riukiuanus* Kuroda, 1924 と亜種の関係)。

学名は、入力されている種の多くで訂正すべき箇所が見当たらなかったが、種小名の誤入力が見られた[e.g., ヤチネズミ *Eothenomys andersoni* (Thomas, 1905)が *andersori* に]。アズマモグラ *Mogera wogura* (Temminck, 1842)は種小名が異なる *Mogera imaizumii* (Kuroda, 1957)が有効学名であった。イヌ *Canis familiaris* (Linnaeus, 1758)には、種から亜種へと格下げされた *Canis lupus familiaris* (Linnaeus, 1758)が適用されていた。アナグマ *Meles meles* (Linnaeus, 1758)と入力されている種の学名はヨーロッパアナグマの学名に適用されていて、ニホンアナグマ *Meles anakuma* (Temminck, 1844)を最新の和名・学名と判断した。

### 4 鳥綱

鳥類の DB は、現時点で最も信頼できる World Bird Database (Avibase)を使用した(Avibase では、和名も表示されるという利点がある)。

県博が所有する鳥類の資料数は 3,261 点で、ヒタキ科 Muscicapidae と入力されている種の大部分をツグミ科 Turdidae に変更した。属名の誤入力が多く、サメビタキ *Muscicapa sibirica sibirica* Gmelin, 1789 や エゾビタキ *Muscicapa griseisticta* (Swinhoe, 1861)は *Muscicapa* が正確な綴りであった。ミヤマホオジロ *Emberiz elegans elegans* Temminck, 1836 の属名は *Emberiza* が正しかったが、現在は *Schoeniclus* が適用されている。ズアオアトリ *Fringillia coelebs coelebs* Linnaeus, 1758 の属名は *Fringilla* が正しかった。

命名年が入力されている種が多かったが、間違いも少なくなかった。ルリビタキ *Tarsiger cyanurus cyanurus* (Pallas, 1773)の 6 点以外に、命名年が 1774, 1775, 1776 と入力されている亜種が 1 点ずつ存在した。ムギマギ *Ficedula mugimaki* (Temminck, 1835)の 7 点以外に、1836, 1837, 1838, 1839, 1840 が 1 点ずつ入力されていた。コサメビタキ *Muscicapa dauurica dauurica* Pallas, 1811 の 23 点以外に、1812, 1813, 1814,

1815 が 1 点ずつ入力されていた(Wikipedia では 1881 と誤記載)。コベニヒワ *Carduelis hornemanni exilipes* (Coues, 1862)は *Acanthis hornemanni exilipes* (Coues, 1861)が、クロジ *Emberiza variabilis* Temminck, 1835 は *Schoeniclus variabilis variabilis* Temminck, 1836 が、ハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris* (Temminck, 1835)は *Ardenna tenuirostris* (Temminck, 1836)が有効学名で、属名と命名年が異なっていた。ダイシャクシギ *Numenius arquata orientalis* Brehm, 831 は、明確な命名年の誤入力であった(1831)。

命名者名の誤入力が少なくなかった。クロガモ *Melanitta americana* (Swainson, 1832)は Swainson が、エゾライチョウ *Tetrastes bonasia vicinitas* Riley, 1915 は Riley が、イイジマムシクイ *Phylloscopus ijimae* (Stejneger, 1892)は Stejneger が、オーストンヤマガラ *Poecile varius owstoni* (Iijima, 1893)は Iijima が正確な命名者名であった。和名の間違ひも見られ、コノハクズ *Otus scops japonicus* Temminck & Schlegel, 1844 は *Otus sunia japonicus* Temminck & Schlegel, 1844 が有効学名で、和名はコノハズクとすべきであった。オオコノハクズ *Otus lempiji semitorques* Temminck & Schlegel, 1844 もオオコノハズクが正しく、リュウキュウコノハクズ *Otus elegans elegans* (Cassin, 1852)もリュウキュウコノハズクとすべきであった。

メジロチメドリ *Alcippe abyssinica* (Rüppel, 1840)には、種小名が異なる *Alcippe morrisonia* Swinhoe, 1863 が適用されていた。ヒシクイ *Anser fabalis serrirostris* Swinhoe, 1871 にも、種小名が異なる *Anser serrirostris serrirostris* Gould, 1852 が適用されていた。ツグミ *Turdus naumanni eunomus* Temminck, 1831 には、亜種から種へと昇格した *Turdus eunomus* Temminck, 1831 が適用されていた。カイツブリ *Tachybaptus ruficollis poggei* (Reichenow, 1902)は *Tachybaptus ruficollis japonicus* Hartert, 1920 が有効学名であった。ムネアカヒワ *Carduelis cannabina* (Linnaeus, 1758)は *Linaria cannabina* (Linnaeus, 1758)へ、マヒワ *Carduelis spinus*

(Linnaeus, 1758)は *Spinus spinus* (Linnaeus, 1758)へ移行していた。キジ *Phasianus colchicus robustipes* Kuroda, 1919や *Phasianus colchicus tohkaidi* Momiyama, 1922 と入力されている亜種は種へと昇格し、種小名が異なる *Phasianus versicolor* Vieillot, 1825 が有効学名であった。ダチョウ *Struthio camelus* Linnaeus, 1758 には、種から亜種へと格下げされた *Struthio camelus australis* Gurney, 1868 が適用されていた。イヌワシ *Aquila chrysaetos* (Linnaeus, 1758)も、*Aquila chrysaetos daphanea* Severtzov, 1888 と亜種になっていた。ヒメメジロ *Oculocincta squamifrons* (Sharpe, 1892)は属名と種小名が異なり、種から亜種へと格下げされた *Zosterops japonicus simplex* Swinhoe, 1861 が有効学名であった。ノジコ *Emberiza sulphurata* Temminck & Schlegel, 1848 には、属名が異なり、種小名が語尾変化した *Schoeniclus sulphuratus* Temminck & Schlegel, 1848 が適用されていた。ダルマエナガ *Paradoxornis webbiana* (Gould, 1852)には、*Sinosuthora webbiana bulomacha* (Swinhoe, 1866)が適用されていた。

アカハラ *Turdus chrysolaus chrysolaus* Temminck, 1831 の 40 点中、採集地が北海道南千島エトロフ島、及びロシア中部千島と入力されている 3 点をオオアカハラ *Turdus chrysolaus orii* Yamashina, 1929 に変更した。カササギ *Pica pica serica* Gould, 1845 の 5 点中、韓国で採集された 1 点と北朝鮮で採集された 3 点は同じ学名だが、イギリスで採集された 1 点を *Pica pica pica* (Linnaeus, 1758)に変更した。学名の正誤とは無関係だが、有名な話なので専門外の方にも分かるように記述すると、コマドリの学名は *Luscinia akahige akahige* (Temminck, 1835)で、アカヒゲの学名は *Luscinia komadori komadori* (Temminck, 1835)である。

## 5 棘皮動物門

棘皮動物門(資料数 110 点)の DB は、国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)が運営する、和名検索が可能な Biological Information System for Marine

Life (BISMaL)を使用した。ヒットしないケースや学名が有効かどうか不確かなケースは、World Register of Marine Species (WoRMS)で学名検索をおこない、World Echinoidea Database でも検索をおこなった。

クモヒトデ綱 Ophiuroidea をヒトデ綱 Asteroidea とした誤入力があった。目名変更は多く、顕帯目 Phanerozonia から一部がモミジガイ目 Paxillosida やアカヒトデ目 Valvatida へ変更されていた。又棘目 Forcipulata からマヒトデ目 Forcipulatida へ、唇蛇尾目 Chilophiurida からクモヒトデ目 Ophiurida へ、革蛇尾目 Phrynophiurida からツルクモヒトデ目 Euryalida へ変更されていた。フトザオウニ目 Cidaroida は、和名がオウサマウニ目になっていた。科名は、和名だけ変更されているものが多かった(e.g., ハスノハカシパン科 Scutellidae はヨウミヤクカシパン科へ; マナマコ科 Stichopodidae はシカクナマコ科へ)。ラッパウニ科 Taxopneustidae はオオバフンウニ科 Strongylocentrotidae へ、ツガルウニ科 Glyptocidaridae はホンウニモドキ科 Phymosomatidae へ移行していた。

110 点中、どの種にも命名年の入力がなかった。モミジガイ *Astropecten scoparius* (Valeciennes)には、命名者名が異なる *Astropecten scoparius* Müller & Troschel, 1842 が適用されていた。和名変更されている種も多く、ホソザオウニ *Stereociliaris japonica* (Döderlein)にはボウズウニ *Stereociliaris japonica* (Döderlein, 1885)が適用されていた(*Stereociliaris* の *ol* は *d* の誤入力)。ホシヒトデ *Stellaster equestris* (Retzius)には、和名・属名・種小名が異なる、ヤマトホシヒトデ *Hippasteria imperialis* Goto, 1914 が適用されていた。マナマコ *Stichopus japonicus* (Selenka)は和名と属名が異なり、アカナマコ *Apostichopus japonicus* (Selenka, 1867)になっていた。

属名だけの変更も見られた[e.g., ヌノメイトマキヒトデ *Asterina batheri* Goto は *Aquilonastra batheri* (Goto, 1914)へ; メナシクモヒトデ *Pectimura anchista* Clark は *Ophiopsammus anchista* (H. L. Clark, 1911)へ;

オキナマコ *Parastichopus nigripunctatus* (Augustin)は *Apostichopus nigripunctatus* (Augustin, 1908)へ]。ニッポンヒトデ *Distolasterias nippon* (Döderlein)は種小名の誤入力で、*Distolasterias nippon* (Döderlein, 1902)が適用されていた(*nippon* ではなく *nipon* が正しい)。トゲクモヒトデ *Ophiothrix koreana* Duncan は *Ophiothrix panchyendyta* H. L. Clark, 1911 へ、ナガトゲクモヒトデ *Ophiothrix marenzelleri* Koehler は *Ophiothrix exigua* Lyman, 1874 へ、種小名が変更されていた。シロナマコ *Paracaudina chilensis ransonneti* (Von Marenzeller)は亜種から種に吸収され[*Paracaudina chilensis* (Müller, 1850)]、ジュズクモヒトデ *Ophiopholis aculeata* var. *japonica* (Lyman)は変種から種に格上げされていた(*Ophiopholis japonica* Lyman, 1879)。

## 6 甲殻亜門

節足動物門から分離した甲殻亜門(資料数 248 点)の DB も BISMaL を使用した。BISMaL 検索でヒットしないケースや、学名が有効かどうか不確かな場合は WoRMS で学名を検索し直し、陸水の種は主に Wikipedia を参考にした。

目名変更は少なかったが、完胸目 Thoracica は和名が無柄目へ変更され、一部が Scalpelliformes 目や Lepadiformes 目へ移行していた。科名変更が多かった(e.g., ウチワエビ科 Scyllaridae は和名がセミエビ科へ; ヒゲガニ科 Cancridae は和名がイチョウガニ科へ; カクレガニ科 Pinnotheridae は Macrophthalmidae 科へ; クリガニ科 Atelecyclidae は Cheiragonidae 科へ; エビジャコ科 Crangonidae は一部がクルマエビ科 Penaeidae へ)。

248 点中 245 点で命名年の入力がなかった。イバラエビ *Lebbeus gloenlandica* (Fabricius)は種小名の誤入力で、イバラモエビ *Lebbeus groenlandicus* (Fabricius, 1775)になっていた。ホソツノモエビ *Heptacarpus propugnatrix* (De Man)は属名の先頭文字が全角入力され、和名と種小名が異なるツノモエビ *Heptacarpus*

*pandaloides* (Stimpson, 1860)になっていた。ゴトウホンヤドカリ *Pagurus cavimanus* (Miers)は和名と属名が異なり、ゴトウヤドカリ *Elassochirus cavimanus* (Miers, 1879)が有効な和名・学名であった。コウダカキタフジツボ *Octomeris sulcata* Nilsson-Cantell は和名の誤入力で、コウダカキクフジツボ *Pseudooctomeris sulcata* (Nilsson-Cantell, 1932)が適用されていた。属名だけ異なる種が多かった[e.g., ヘイケガニ *Dorippe japonica* Von Siebold は *Heikeopsis japonica* (von Siebold, 1824)へ; ヒシガニ *Lambrus validus* (De Haan) は *Enoplolambrus validus* (De Haan, 1837)へ; スナモグリ *Callianassa petalura* (Stimpson)は *Nihonotrypaea petalura* (Stimpson, 1860)へ]。タカアシガニ *Macrocheira kaempferi* De Haan には、*Macrocheira kaempferi* (Temminck, 1836)が適用されていた。

クルマエビ *Penaeus japonicus* (Bate)は属名の変更と命名者名の明確化がおこなわれ、*Marsupenaeus japonicus* (Spence Bate, 1888)になっていた。クロエビ *Sclerocrangon communis* Rathbun は、属名と種小名が異なる *Metapenaepsis coniger* (Wood-Mason in Wood-Mason & Alcock, 1891)が有効学名であった。シワガザミ *Macropipus corrugatus* (Pennant)は、属名と種小名が異なる *Liocarcinus strigilis* (Stimpson, 1858)が有効学名であった。ケブカエンコウガニ *Carcinoplax vestitus* (De Haan)は属名が異なり、種小名が語尾変化した *Entricoplax vestita* (De Haan, 1833)が有効学名であった。ケブカアワツブガニ *Actaea rüppellii orientalis* (Odhner)は、本来ならラテン語であるはずの種小名 *rüppellii* に違和感を覚えた。WoRMS で *Actaea rüppellii* を検索すると、*Actaea rueppellii* (Krauss, 1843)がシノニム(同物異名)として出て来た。BISMaL では *Actaea ruepelli orientalis* Odhner, 1925 がシノニムで、属名が異なり、亜種から種へと昇格した *Gaillardielus orientalis* (Odhner, 1925)が適用されていた。ミツカドヒシガニ *Tutankahamen pteramerus* (Ortmann)には、属名種小名が異なる *Garthambrus pteromerus* (Ortmann,

1893)が適用されていた。アカフジツボ *Balanus tintinnabulum rosa* Pilsbry には、属名が異なり、亜種から種へと昇格した *Megabalanus rosa* (Pilsbry, 1916)が適用されていた。

種小名が変更されている種も見られた[e.g., キメングニ *Dorippe dorsipes* (Linnaeus)は *Dorippe sinica* Chen, 1980 へ; ツノナガコブシ *Leucosia longifrons* (De Haan)は *Leucosia anatum* (Herbst, 1783)へ; ゴカクイボオウギガニ *Halimede ochtodes* (Herbst)は *Halimede fragifer* (De Haan, 1835)へ]。クロフジツボ *Tetraclita squamosa japonica* Pilsbry には、亜種から種へと昇格した *Tetraclita japonica* Pilsbry, 1916 が適用されていた。種小名の語尾変化間違いや[e.g., モクズガニ *Eriocheir japonicus* (De Haan)は *Eriocheir japonica* (De Haan, 1835)へ]、誤入力も見られた[e.g., ジャノメガザミ *Portunus sansuinentus* (Herbst)は *Portunus sanguinolentus* (Herbst, 1783)へ]。

## 7 少数派(ホヤ綱、腕足動物門、苔虫動物門、ムカデ綱・ヤスデ綱、環形動物門、星口動物門、刺胞動物門、海綿動物門、その他)

日本近海に生息する種の多くは BISMaL で検索し、足りない情報を WoRMS で補った。陸に生息する種は、主に Wikipedia を参考にした。

少数派 141 点(ホヤ綱 7 点、腕足動物門 23 点、苔虫動物門 1 点、ムカデ綱・ヤスデ綱 1 点、環形動物門 2 点、星口動物門 1 点、刺胞動物門 20 点、海綿動物門 1 点、その他 85 点)では、綱・目・科の大分類レベルで変更されている種が大多数であった(e.g., 無関節綱 *Inarticulata* が舌殻綱 *Lingulata* に; 有関節綱 *Articulata* が嘴殻綱 *Rhynchonellata* に; 普通海綿綱 *Demospongiae* の和名が尋常海綿綱に; マンジュウボヤ目 *Aplousobranchia* がマメボヤ目 *Enterogona* に; 遊在目 *Errantia* がイソメ目 *Eunicida* に; リングラ科 *Lingulidae* の和名がシャミセンガイ科に; ウルマリス科 *Ulmaridae* の和名がミズクラゲ科に; ハネガヤ

科 Plumulariidae がアカガヤ科 Aglaopheniidae に; リンコネラ科 Rhynchonellidae がテレブラツラ科 Terebratulidae に)。オオマリコケムシ *Pectinatella magnifica* (Leidy, 1851) は、BISMaL や WoRMS では綱・目・科の変更はないが、門名が外肛動物門 Ectoprocta から苔虫動物門 Bryozoa に移行していた。

ほとんどの種で命名年の入力があった。和名が同じなのに学名が異なる種や、学名が同じなのに和名が異なる種が随所で見られた。カメホウズキチョウチン *Laqueus rubellus* (Sowerby) は和名の誤入力で、ホウズキチョウチン *Laqueus rubellus* (Sowerby, 1846) が有効な和名・学名であった。イガボヤ *Halocynthia higidorfi* f. *igaboja* Oka と入力されている品種 forma (または型 form) は、種へと昇格し、種小名が異なる *Halocynthia hispida* (Herdman, 1881) が有効学名であった。オオシャミセンガイ *Lingula shantungensis* K. Hatai には、種小名が異なる *Lingula adamsi* Dall, 1873 が適用されていた。ミドリシャミセンガイ *Lingula unguis* (Linnaeus) にも、種小名が異なる *Lingula anatina* Lamarck, 1801 が適用されていた。イバライソメ *Onuphis willenmoesi* (McIntosh) は、*Paradiopatra willenmoesii* (McIntosh, 1885) が有効学名であった (*willenmoesi* と McIntosh は誤入力)。ウミエラ *Leiopterus fimbriatus* (Herklots) は和名と属名が異なり、種小名が語尾変化したフトウミエラ *Pennatula fimbriata* Herklots, 1858 が有効学名であった。シロガヤ *Plumularia setacea* (Ellis) には、属名と種小名が異なる *Aglaophenia whiteleggei* Bale, 1888 が適用されていた。ミズクラゲ *Aurelia aurita* Lamarck は命名者名が異なっていた [*Aurelia aurita* (Linnaeus, 1758)]。

## 8 昆虫綱

昆虫類の DB は、九州大学大学院農学研究院昆虫学教室の昆虫学データベース (KONCHU) を使用した。この DB を使用した感想としては「9 割 5 分以上の正確性がある (クサカゲロウ科に関しては使用しない

ほうが良い)」という印象であった。

チョウ目を除く、昆虫類の資料数 8,447 点の中のほとんどの種で命名年が欠けていた。コガタスズメバチ *Vespa analis* Fabricius は、コガタスズメバチ本土亜種 *Vespa analis insularis* Dalla Torre, 1894 に変更された。学名の一部に全角が使われている種が少なくなかった。和名が変更されている種や科も幾つか見られた (e.g., ムナクボカミキリからムネツヤサビカミキリへ; ジガバチ科からアナバチ科へ)。和名の誤入力も少なくなかった (e.g., ゴマダラオトシブミがゴマダラオトシブミに; ジガバチがジガバチに)。命名者名の誤入力も見られた (e.g., Westwood が Westeood に; MacLachlan が McLachlan に)。大きな科名変更として、コオロギ科に分類されていたものがクサヒバリ科・スズムシ科・マツムシ科へ、ヨコバイ科に分類されていたものがヨコバイ科・オオヨコバイ科・ミミズク科へ移行している。

学名が同じなのに、和名が異なる種が随所で見られた。セマダラコガネの学名 *Blitopertha orientalis* でヒメアシナガコガネとアカビロウドコガネの和名が入っているケースでは、いずれも和名が正しいことを確認した。ウンモンヒロバカゲロウの学名 *Osmylus tessellatus* でスカシシリアゲモドキの和名が入っているケースでは、ウンモンヒロバカゲロウの和名が正しいことを確認した。ミドリカミキリの学名 *Chloridolum viride* でスギカミキリの和名が入っているケースでは、ミドリカミキリの和名が正しいことを確認した。キイロモモトハバチの旧学名 *Cimbex connatus taikushi* でツマグロアカハバチの和名が入っているケースでは、キイロモモトハバチ *Cimbex taikushi* Marlatt, 1898 が正しいことを確認した。ヒガシカワトンボの学名 *Mnais pruinosa costalis* でニシカワトンボの和名が入っているケースでは、採集地情報からヒガシカワトンボの和名が正しいことを確認した (最新の学名には、ヒガシカワトンボとオオカワトンボを含めて、ニホンカワトンボ *Mnais costalis*

Selys, 1869 という別種が適用されている)。

## 9 旧魚綱

旧魚綱(資料数 1,292 点)の DB も基本的に BISMAL を使用し、淡水産の種やシノニムの変遷(現在、使われていない学名)などの足りない部分を Catalog of Fishes で補った(California Academy of Sciences, USA が運営する DB。古今東西の文献を網羅していて、他どの DB よりも信頼性が高いと判断された)。また、第 2 著者が魚類の専門家ということもあって、種小名が sp. 1 や sp. 2 などで記載されている種の最新の学名は常に押さえてある。

旧魚綱 Pisces は廃止され、条鰭綱 Actinopterygii / 軟骨魚綱 Chondrichthyes / 頭甲綱 Cephalaspidomorpha に分けられている。ほとんどの種で命名年が入力されていなかった。命名者名の誤入力が多く(e.g., Schlegel が Sclegel に; Valenciennes が Valennciennes に; McClelland が McClelland に)、目名や科名の誤入力も多かった(e.g., アシロ目 Ophidiiformes が Ophidiformes に; ニギス科 Argentinidae が Argentinoidei に; ドチザメ科 Triakidae が Triakidedae に)。トクビレ科 Agonidae の学名 Agonidae はテンジクダイ科に、マナガツオ科 Stromateidae の学名はイボダイ科に適用されるべきものであった(これは誤入力で Stromateidae が正しい)。アカエイ *Dasyatis akajeri* (Müller & Henle) は、属名と種小名の語尾が異なる *Hemistrygon akajei* (Müller & Henle, 1841) が有効学名であった。科名変更が多く、アユ科 Plecoglossidae がキュウリウオ科 Osmeridae へ、フサカサゴ科 Scorpaenidae がメバル科 Sebastidae へ、ドジョウ科 Cobitidae がタニノボリ科 Bolitoridae へ移行している。サケ目 Salmoniformes はニギス目 Argentiniformes やキュウリウオ目 Osmeriformes へ、エイ目と入力されているガンギエイ目 Rajiformes はトビエイ目 Myliobatiformes へ移行している。

属名や種小名が異なる種が多く、ゴテンアナゴと

ハナアナゴのように和名が交替してしまっている種もある。ゴテンアナゴ *Anago anago* (Temminck & Schlegel) には命名年の 1846 を入れ、次に属名変更をおこなって *Ariosoma anago* (Temminck & Schlegel, 1846) とした。もし *anago* という種小名が生きていれば、この学名はハナアナゴに適用されるべきものである。しかし、ハナアナゴの分布域は神奈川県以南とされていて、問題の種の採集地が山形県鶴岡市加茂沖となっていることから、この種は和名優先と考え、ゴテンアナゴの和名を適用した。それから、ゴテンアナゴの学名を最新の *Ariosoma meeki* (Jordan & Snyder, 1900) に変更した。ゴンズイ *Plotosus lineatus* (Thunberg) には、BISMAL では命名年の 1787 が入ったミナミゴンズイの学名が適用され、ゴンズイの学名には *Plotosus japonicus* Yoshino & Kishimoto, 2008 が適用されていた。

カワヤツメ *Lethenteron japonicum* (Martens) は、命名年の 1868 を入れた学名が BISMAL では有効とされている。Catalog of Fishes では、この学名はシノニムになっていて、*Lethenteron camtschaticum* (Tilesius, 1811) が適用されていた。このような学名の混乱は、これらの学名が与えられているタイプ標本に、正基準標本(holotype)が見つからないのが理由である。カワヤツメとされている種は、未だ分類学的地位の決着が付かず、再検討を必要とする性質のものであった。ギンブナには、*Carassius auratus langsdorfi* Temminck & Schlegel の学名を持つ亜種 32 点と *Carassius auratus* subsp. 1 の学名を持つ亜種 1 点が入力されていた。前者は命名年を欠き、亜種小名 *langsdorfi* の誤入力をしていた。Catalog of Fishes では、亜種から種へと昇格した *Carassius langsdorfi* Temminck & Schlegel, 1846 が適用されている。

*Oncorhynchus masou masou* (Brevoort) には、サクラマスとヤマメの 2 つの和名が入力されていた。この学名には 1856 の命名年を入れ、採集地情報を考慮した上で、それぞれサクラマス降海型、ヤマメ河川残



留型(陸封型)に変更した。*Salvelinus leucomaenis leucomaenis* (Pallas)には、アメマスとエゾイワナの2つの和名が入力されていた。この学名から亜種小名を取り、1814の命名年を入れて、アメマス降海型、エゾイワナ河川残留型(陸封型)に変更した。山形県鶴岡市加茂沖で採集した種にエゾイワナの和名が入力されていたケースに関しては、明らかな降海型のため和名間違いと判断し、アメマス降海型に変更した。

イトヨ *Gasterosteus aculeatus* Linnaeus、またはイトヨ(降海型) *Gasterosteus aculeatus* Linnaeus の和名・学名は、現在は使用されていない(命名年は1758)。この種は、日本海に流入する河川に生息するイトヨとして新種記載され、ニホンイトヨ *Gasterosteus nipponicus* Higuchi, Sakai & Goto, 2014 の和名・学名が与えられている。イバラトミヨ(トミヨ・淡水型) *Pungitius pungitius* (Linnaeus)には旧トミヨの学名が適用され、トミヨ属淡水型 *Pungitius sinensis* (Guichenot, 1869)に変更されている。日本海側は新潟県以北に、太平洋側は青森県以北に生息する。イバラトミヨ(特殊型) *Pungitius pungitius* (Linnaeus)には、絶滅種であるミナミトミヨの学名が適用され、トミヨ属雄物型 *Pungitius kaibarae* (Tanaka, 1915)に変更されている(山形県では最上川水系に生息する)。イバラトミヨ(トミヨ・淡水型)やイバラトミヨ(特殊型)として入力されていた種の学名 *Pungitius pungitius* (Linnaeus, 1758)は、トミヨ属汽水型に適用されている(北海道東部太平洋側に生息する)。以上3種にエゾトミヨ *Pungitius tymensis* (Nikolskii, 1889)とムサントミヨ *Pungitius* sp.を含めた5種が、現在のトミヨ属に分類されている。ハリヨ *Gasterosteus microcephalus* (Girard)は、*Gasterosteus microcephalus* Girard, 1854 がシノニムで、イトヨの亜種 *Gasterosteus aculeatus* subsp. 2 が適用されている。

ヒメ *Aulopus japonicus* Günther に関しては、採集地情報(山形県鶴岡市加茂沖・鼠ヶ関、酒田沖)、及び *Aulopus* 属の分布域(大西洋)から、太平洋に生息する

*Hime* 属への属名変更を適用した [*Hime japonica* (Günther, 1877): この変更に伴い、種小名の語尾も変化している]。マエソ *Saurida* sp. 2 は、BISMaL によると、*Saurida macrolepis* Tanaka, 1917 が有効学名であった。シノニムの変遷を Catalog of Fishes で調べたところ、種小名 *macrolepis* は、sp. より前の *undosquamis* からの変更であった(sp. 2 は間違い)。シロヒレタビラ *Acheilognathus tabira* sp. は、分布域が東海・近畿・山陽・四国であることと採集地が福島県耶麻郡北塩原村裏磐梯五色沼柳沼であることから、アカヒレタビラ *Acheilognathus tabira erythropterus* Arai, Fujikawa & Nagata, 2007 と判断した。一方で、アカヒレタビラ *Acheilognathus tabira* (Jordan & Thompson) は、亜種キタノアカヒレタビラ *Acheilognathus tabira tohokuensis* Arai, Fujikawa & Nagata, 2007 として記載されている。カズナギの学名 (*Zoarchias veneficus* Jordan & Snyder) でコモンイトギンボの和名が入力されているケースでは、和名のほうが正しいことを確認した。これは明らかな学名の誤入力で、県博が出している動物目録には、命名年の1902を除いた和名・学名が正確に記載されていた。

## 10 軟体動物門

軟体動物門(資料数9,761点)の多くはBISMaLで検索し、和名が出て来ないケースでは、学名でも検索をおこなった。日本近海産の種以外の海産貝類や、シノニムなどの足りない情報は、WoRMSで補った。両方で学名に相違点があるケースでは、より信頼性の高いWoRMSに従った(WoRMSの場合、Editor Reviewで学名の最終チェックをしている点と、学名の原記載を明示している点大きい)。陸・淡水産貝類では、主にWorldwide Mollusc Species Data Base (WMSDB)を参考にしたが、基本的に海産種を取り扱うWoRMSで検索可能な種もあった[e.g., *Planorbis planorbis* (Linnaeus, 1758)]。淡水産二枚貝には、専門的DBのMUSSELp (MUSSEL Project Database)を使用

した。和名に異論があるケースや移入種の可能性があるケースでは、陸・淡水産腹足類日本固有種目録(亀田, 2018)を参考にした。入力されている命名年が BISMAL で検索された学名の命名年と異なるケースでは、原記載が明示される WoRMS で再確認をおこなった。収蔵資料 DB に入力されている種や亜種の学名に誤入力があるケースでは、WMSDB で検索可能なことが多かった[曖昧(fuzzy)検索のアルゴリズムが他の DB より優れている]。貝類の場合、収集が世界中の多岐にわたっているため、他の門・綱とは異なって 1 種 1 点のケースが多く、また和名のない種も多く、ひとつひとつの種の学名を確定するのに困難を極めた(グループ化するだけで 1 ヶ月以上を要した)。軟体動物門に関しては、他の分類群とは異なり、当時の担当者による学名への再チェックが入っている。BISMAL は 2018 年 12 月 27 日を境に新バージョンへと移行したので、それ以前に著者らがアクセスしたものとは異なる可能性がある。

大きく変更されたところでは、古腹足目の目名変更がある。古腹足目 Vetigastropoda と入力されている 742 点の目名を WoRMS に従って Trochida へ変更した(Vetigastropoda は、WoRMS では亜綱で使用され、BISMAL では上目で使用されている)。一部の目名は Trochida ではなく Seguenziida に変更した。イトカケガイ科 Epitoniidae が属する翼舌目 Ptenoglossa は、WoRMS では下目 Infraorder になっていて、目名は Caenogastropoda が採用されていた(BISMAL では吸腔目 Sorbeoconcha)。タニシ科 Vivipariidae の目名を中腹足目 Mesogastropoda から原始紐舌目 Architaenioglossa へ変更した。科名変更されている種も少なくなかった[e.g., ミミガイ科 Haliotidae がクチキレエビスガイ科 Scissurellidae に; カノコキセワタガイ科 Aglajidae が Philinorbidae 科に(Philinorbidae Oskars, Bouchet & Malaquias, 2015); ミドリガイ科 Smaragdinellidae がブドウガイ科 Haminoeidae・ヘコミツララガイ科 Retusidae・Rhizoridae 科に; クダマキガイ科 Turridae

が 12 の科に(クダマキガイ/クダボラ科 Turridae・コシボソクチキレツブ科 Clathurellidae・マンジ科 Mangeliidae・フデシャジク科 Raphitomidae・Borsoniidae 科・Clavatulidae 科・Cochlespiridae 科・Drilliidae 科・Fusiturridae 科(Fusiturridae Abdelkrim, Aznar-Cormano, Fedosov, Kantor, Lozouet, Phuong, Zaharias & Puillandre, 2018)・Horaiclavidae 科・Mitromorphidae 科・Pseudomelatomidae 科)]。

アオイガイ *Argonauta argo* Linnaeus, 1758 には、アオイガイ科 Argonautidae の 1 点とカイダコ科 Argonautidae の 3 点の 2 つの科名が入力されていた。BISMAL ではアオイガイ科は消えて、カイダコ科が有効科名であった。Octopoda はタコ目になっていて、八腕形目は八腕形上目 Octopodiformes になっていた。Aporrhais という属名を持つ種には、中腹足目 Mesogastropoda モミジボラ科 Aporrhaidae の 2 点と、新腹足目 Neogastropoda クダマキガイ科 Turridae の 2 点の 2 つの目名と科名が入力されていた。WoRMS では、Littorinimorpha と Aporrhaidae が正しい目名と科名とされていた。BISMAL では Littorinimorpha を下目としていて、吸腔目 Sorbeoconcha を目名としていたが、モミジボラ科 Aporrhaidae は存在しなかった。佐々木(2002)によると、Aporrhaidae に相当する和名は、モミジボラ科でもクダマキガイ科でもなく、モミジソデガイ科である。モミジボラの仲間がモミジボラ科には属さず、クダマキガイ科に属することから、モミジソデガイ科への科名変更がおこなわれたと推測される。

アシヤガイ *Granata lyrata* (Pilsbry, 1890) は、WoRMS ではニシキウズガイ科 Trochidae から Chilodontidae に変更されていた。この科は BISMAL では Chilodontidae 科と記載されていて、a という文字の有無が気になったので調べたところ、WoRMS に「Chilodontidae Wenz, 1938 (invalid: homonym of the fish family Chilodontidae Eigenmann, 1912; emended to Chilodontidae by ICZN)」という記述を見つけた。

Chilodontidae は既に魚類の科名として使われているので無効(同物異名)という判断であった。*Tibatrochus incertus* (Schepman, 1907)は、BISMaL でも WoRMS でも命名年が 1908 になっていて、WoRMS ではニシキウズガイ科 Trochidae から Eucyclidae に変更されていた。この科は BISMaL では Chilodontidae 科と記載されている(Chilodontidae が正しい)が、WoRMS では Eucyclidae Koken, 1896 という科名のシノニムに Chilodontidae は記載されていない。*Semisulcospira* 属を含むカワニナ科 Pleuroceridae は、WMSDB では Semisulcospiridae へ移行している(Pleuroceridae という科は別に存在する)。

Bullinidae という科 5 点には、ベニシボリガイ科 3 点とインドヒラマキガイ科 2 点の 2 つの和名が入力されていて、この 2 つは目名も異なって入力されていた(頭楯目 Cephalaspidea と基眼目 Basommatophora)。BISMaL では、ベニシボリガイ科は Bullinidae Gray, 1850 と記載されていたが、インドヒラマキガイ科には和名がなかった(ヒラマキガイは淡水産貝類で、WMSDB では Hygrophila 目/Planorbidae 科)。ベニシボリガイ科の目名は「(unranked): 低位異鰓目 Lower Heterobranchia」で、目名として取り扱って良いのかどうか、判断が難しかった(上科名は、オオシノミガイ上科 Acteonoidea d'Orbigny, 1843)。WoRMS で Bullinidae を検索するとシノニムになっていて、有効科名は Aplustridae Gray, 1847、有効目名はなかった(上科名は BISMaL と同じ)。WMSDB では Bullinidae も Aplustridae も存在したが、どちらの科にも有効目名はなく、上科名は BISMaL と同じであった。どの DB でも上科名が同じであることから、現在の有効目名を低位異鰓目 Lower Heterobranchia、有効科名を Aplustridae 科と結論付けた。

*Leucozonia* 属の 2 種にはアッキガイ科 Muricidae (シマツノグチ *Leucozonia peseudodon* と入力されていて、採集地はパナマ共和国パシフィックコースト)とイトマキボラ科 Fasciolaridae [マルニシ *Leucozonia*

*smaragdula* (Linnaeus, 1758)と入力]の別々の科名が使用されていた。どちらの和名も学名も BISMaL になかったが、種の記載がない *Leucozonia* Gray, 1847 という属名があり、イトマキボラ科 Fasciolaridae になっていた。WoRMS では *Leucozonia smaragdula* [sic] と出て来て(sic はラテン語で「原文のまま」を意味し、綴りの間違いをそのまま引用した場合などに用いられる)、属名と種小名の語尾が異なる *Latirolagena smaragdulus* (Linnaeus, 1758)が現在の有効学名であった。目名は、BISMaL では吸腔目 Sorbeoconcha だが、WoRMS では Neogastropoda になっていて、後者を採用した(収蔵資料 DB では新腹足目 Neogastropoda)。WoRMS や WMSDB では *Leucozonia* 属に *peseudodon* という種小名に似た種はなく、Google で *Leucozonia peseudodon* を引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。*peseudodon* の綴りに違和感を覚え(偽物を意味する *pseudo* か?)、*Leucozonia peseudodon* で再検索すると、*Opeatostoma peseudodon* (E. J. Burrow, 1815)という別属の種が WMSDB に見つかった(この学名は WoRMS でも有効)。収蔵資料 DB は、属名の間違いと種小名の誤入力で、どの検索にも引っ掛かって来なかったことになる。この種のシノニムに *Leucozonia* 属は含まれていなかったが、分布域は中米で、パナマ共和国が最大の産地であった。シマツノグチ *Opeatostoma peseudodon* (Burrow, 1815)を有効な和名・学名と判断し、アッキガイ科 Muricidae をイトマキボラ科 Fasciolaridae に変更した。

*Mitropifex* 属 4 種 5 点中の 1 種 1 点(ベニオトメフデガイ *Mitropifex subguabrafus*)と、*Vexillum* 属 13 種 25 点中の 1 種 2 点(カノコミノムシガイ *Vexillum sanguisugum*)にはフデガイ科 Mitridae と入力されていて、カノコシボリミノムシ *Vexillum sanguisuga* (Linnaeus, 1758)という種 1 点は、ツクシガイ科 Costellariidae になっていた。BISMaL に *Mitropifex* 属はなかったが、フデガイ科 Mitridae Swainson, 1829 は存在し、*Vexillum* 属はツクシガイ/ミノムシガイ科

Costellariidae MacDonald, 1860 になっていた(どちらの科名も WoRMS では有効)。Mitropifex Iredale, 1929 は WoRMS でシノニムとされ、有効属名は *Vexillum* Röding, 1798 であった(Mitridae 科のシノニムに *Mitropifex* 属はない)。以上の結果から、*Mitropifex* 属を *Vexillum* 属に変更し、この属の有効科名をツクシガイ/ミノムシガイ科 Costellariidae と結論付けた。

シロガネシタダミ *Machaeroplax nyssonus* (Dall, 1919)は、BISMaL では *Solariella nyssonus* Dall, 1919 に戻っていたが(未成員と成員の違いと推測される)、WoRMS では属名が異なる *Minolia nyssonus* (Dall, 1919)が適用されていた。マキアゲエビス *Turcica coreensis* Pease, 1860 は BISMaL と一致したが、WoRMS ではシノニムになっていて、現在は *Turcica monilifera* A. Adams, 1854 が有効学名であった(この種でニシキウズガイ科 Trochidae と入力されている科は、BISMaL では Calliotropidae 科に変更されていたが、WoRMS では Eucyclidae が有効科名とされている)。エゾシタダミ *Margarites helicinus pilsbryi* (Kuroda & Habe, 1952)は肥後・後藤(1993)や奥谷(2000)と一致したが、BISMaL や WoRMS では亜種から種へと昇格し、有効学名は *Margarites helicinus* (Phipps, 1774)であった。命名者名と命名年に関しては疑義が出ていたが[肥後・後藤(1993)では *Margarites helicinus* (Philippi, 1846)と記述されているが、WoRMS の原記載は *Turbo helicinus* Phipps, 1774]、現在の有効学名に関しては問題なしと考えて良いと思う。問題は、ニシキウズガイ科 Trochidae と入力されている科が、BISMaL ではサザエ/リュウテン科 Turbinidae になっていて、WoRMS では Margaritidae になっていることであった。著者協議の結果、Margaritidae 科を適用することにした。

*Pecten* という属名を持つ種には 2 つの科名が入力されていて、イタヤガイ科 Pectinidae として 4 種が、ウミギク科 Spondylidae として 1 種(トゲナガシヨウジョウカズラ *Pecten gibbus* Linnaeus, 1758)が入力さ

れていた。*Pecten* という属名からすれば、イタヤガイ科が正しい科名と考えられ、トゲナガシヨウジョウカズラの和名が間違っていると考えるのが妥当である。しかし、この和名が正しければ、学名のほうが間違っているとも考えられた。WoRMS でトゲナガシヨウジョウカズラという和名に相当する有効学名は、*Spondylus victoriae* G. B. Sowerby II, 1860 と考えられた(分布域はオーストラリアで、*Spondylus wrightianus* Crosse, 1872 はシノニム)。WMSDB では *Pecten gibbus* Linnaeus, 1758 はシノニムで、有効学名は *Argopecten gibbus* (Linnaeus, 1758)であった(分布域は北アメリカ~ブラジル)。この学名を持つ種の採集地は米国フロリダ州なので「トゲナガシヨウジョウカズラという和名が間違っている」と結論付けた。この学名を持つ種は収蔵資料 DB にもあり、和名はフロリダイタヤになっていた。標本でトゲナガシヨウジョウカズラとフロリダイタヤを調べたところ、どちらも同じフロリダイタヤであった。収蔵資料 DB には、トゲナガシヨウジョウカズラ *Spondylus wrightianus* が別に存在した(この学名はシノニム)。ヒゲナガシヨウジョウカズラ(学名入力なし)を Google で引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。標本に当たって調べたところ、オリジナルのラベルを(トをヒと)読み違えた転記ミスで、トゲナガシヨウジョウカズラが正しかった。

ヨメガカサ *Cellana toreuma* (Reeve, 1854)と入力されている種 15 点(2 点はヨメガカサガイと入力)中 7 点は古腹足目 Vestigastropoda、ニシキウズガイ科 Trochidae と入力され(明らかな誤入力)、8 点はカサガイ目 Patellogastropoda、ツタノハガイ科 Patellidae と入力されていた。ヨメガカサの学名は BISMaL でも WoRMS でも同じだが、カサガイ目 Patellogastropoda、ヨメガカサガイ科 Nacellidae になっていた(WoRMS に目名はなく、Patellogastropoda は亜綱になっている)。同じ属名でトラフザラ *Cellana testudinaria* (Linnaeus, 1758)と入力されている種 6 点の学名は BISMaL でも

WoRMS でも同じだったが、トラフザラの和名はなく、オオベッコウガサになっていた。この種の6点中5点はツタノハガイ科 Patellidae と、1点はヨメガカサガイ科 Nacellidae と入力されていた。

和名の誤入力が少なくなく(e.g., マダマブドウガイがマタマブドウガイとマダマブトウガイに; チャイロタマキビがチャイロタマタビに)、科名の誤入力や[e.g., ヒザラガイ科 Chitonidae が Chitonidida に (BISMaL では、Chitonidae の和名をクサズリガイ科に変更しているの、これに従った)], 命名者名の誤入力も見られた(e.g., Müller が Miiller に)。シロツブリ *Murex turunculus* は、和名の誤入力と属名変更、種小名の誤入力重なっていて、WoRMS では *Hexaplex trunculus* (Linnaeus, 1758) が有効学名であった(昔から染色に使われているという理由から、ツロツブリの和名は残すことにした)。収蔵資料 DB には、他にツロツブリボラ *Hexaplex (Trunculariopsis) turunculus* (Linnaeus, 1758) と入力されている種が見つかった(*turunculus* は誤入力)。ミスズイ *Latiaxis mawae* (Griffith & Pidgeon, 1834) は和名の誤入力、BISMaL で *Latiaxis mawae* を検索するとミスズイの和名が出て来た。WoRMS では命名者名が明確化され、命名年が異なる *Latiaxis mawae* (Gray in Griffith & Pidgeon, 1833) が適用されていた。

クシチクモドキと和名だけ入力されているケースは、この資料の寄贈者である鈴木稔さんのメモ紙に書かれた独特の筆致を誤入力したものと考えられ、実際には「7 シチクモドキ」と記入されているようであった(7 は数字の通し番号)。これとは別に、シチクモドキと入力されている種には *Hastula strigilata* (Linnaeus, 1758) という学名が入力されていて、これは BISMaL と一致した。シャジクガイ *Micantapex (Parabathytoma) luehdorfi* (Lischke, 1872) は和名の誤入力であったが、シャジクガイの和名に相当する分類群が BISMaL には存在しなかった。WoRMS では *Micantapex luehdorfi* (Lischke, 1872) というシノニムが

存在し、現在の有効学名は *Bathytoma luehdorfi* (Lischke, 1872) であった。この学名の属名と種小名を基に Google の引用符検索で調べたところ、シャジクガイという和名が生きていた(奥谷, 2017)。

学名は命名年が入っているものが多く、一見すると問題はなさそうに思えた。しかし、軟体動物門に特異的な(他の分類群では余り使わない)事例として、本来、動物の分類では使用することのない品種(forma)や変種(variety)が、学名として記載されていることであった。これら forma の付いた属名と種小名を Google で引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。アジロダカラ *Palmadusta ziczac* forma *undata* (Lamarck, 1810) は WoRMS ではシノニムとされ、*Palmadusta ziczac* (Linnaeus, 1758) が有効学名であった。ホンメダカラ *Palmadusta ziczac* (Linnaeus, 1758) は、BISMaL では和名がアジロダカラになっていた。ホソスウェイソソモオリガイという和名が入力されている品種には *Alcihoë swainsoni* forma *calva* Powell, 1928 という forma の付いた学名が与えられていて、Google の引用符検索(forma の付いた属名と種小名のみの検索)では、収蔵資料 DB がヒットするだけであった。BISMaL と WoRMS では、この学名に相当する *Alcihoë swainsoni* Marwick, 1926 というシノニムが見つかり、種小名が異なる有効学名は *Alcihoë arabica* (Gmelin, 1791) であった。

オキノシマギセル *Paganizaptyx stimpsoni* var. *perignobilis* (Pilsbry, 1901) の変種や、ニシムラギセル *Paganizaptyx stimpsoni* forma *nishimurai* (Kuroda, Ms. 1949) の品種の学名に関しても、Google の引用符検索でヒットするのは収蔵資料 DB だけで、これらの学名の引用元が肥後・後藤(1993)であることを確認した。WMSDB では属名が変更され、亜種(または型)の扱いになっている[*Hemizaptyx stimpsoni perignobilis* (H. A. Pilsbry, 1901); *Hemizaptyx stimpsoni nishimurai* J. T. Kuroda, 1949]。エゾマイマイ *Ezohelix gainsi* (Pilsbry, 1900) (*gainsi* は *gainesi* の誤入力) とブドウマイマイ

*Ezohelix gainesi forma flexibilis* (Fulton, 1905)は、WMSDBでは属名が変更され、後者は亜種の扱いになっている[*Bradybaena gainesi* (H. A. Pilsbry, 1900); *Bradybaena gainesi flexibilis* (H. C. Fulton, 1905)]。一般的に、ブドウマイマイはエゾマイマイの黒化型と言われて来たが、亜種レベルでの分化が進んでいるという判断のようである。

リュウキュウカタベ *Angaria delphinus* (Linnaeus, 1758)の品種として入力されているコブシカタベガイ *Angaria delphinus forma tyria* (Reeve, 1842)は、加藤繁富さんがフィリピンのセブマーケットで購入したもので、WoRMSでは *Angaria tyria* (Reeve, 1842)が有効学名であった。シリプトチグサ *Cantharidus callichroa forma bisbalteatus* (Pilsbry, 1901)は、奥谷(2000)、及び BISMAL では *Cantharidus bisbalteatus* (Pilsbry, 1901)になっていたが(属名の *Cantharidus* は誤入力)、WoRMSに原記載の *Cantharidus bisbalteatus* Pilsbry, 1901 が出来たので、これを採用した。

クロタマキビ(1 品種) *Neritrema stithana forma atkana* Dall, 1868 やクロタマキビ(1 品種) *Neritrema stilhana forma kurila* Middendorff, 1848 では、種小名の誤入力が酷く、属名を変更した *Littorina stithana* や *Littorina stilhana* で検索可能な DB はなかった。WMSDBで *Littorina atkana* を検索すると、命名年の異なる *Littorina sitkana atkana* W. H. Dall, 1902 が出来た(WoRMSでは検索不能)。BISMALでは、命名年の異なる *Littorina sitkana atkana* Dall, 1886 が、クロタマキビのシノニムとして出来た(命名者名が Dall の命名年が 1868 から 1902 を経て 1886 へ変更されている)。WoRMS や WMSDB では、*Littorina kurila* Middendorff, 1848 がシノニムとされ(Middendorff は誤入力)、*Littorina sitkana* Philippi, 1846 が現在の有効学名であった(クロタマキビの品種が消えた?)。

肥後・後藤(1993)で亜種として扱われていたものが、奥谷(2000)では型小名の前に form を置き、種の型(たとえば、夏型、秋型)として記述しているケースが多

い。収蔵資料 DB では、品種小名の前に forma の付いた品種は数多く見られるが、form の付いたものはなかった。しかし、イシダタミ *Monodonta Labio from confusa* Tapparone-Canefri, 1874 と入力されている型 16 点は、form とすべきところを from と入力したものと推察され、この間違いがそのまま収蔵資料 DB を検索すると出て来る(*Labio* は誤入力)。BISMAL では、*Monodonta labio confusa* Tapparone-Canefri, 1874 という亜種がシノニムになっていて、亜種小名を種小名に変更したイシダタミ *Monodonta confusa* Tapparone-Canefri, 1874 が有効な和名・学名であった(WoRMSでは命名者名のハイフンがなく、原記載であることから、こちらを採用した)。

ツマグロメダカラ *Purpuradusta (Purpuradusta) gracilis* (Gaskoin, 1848)の亜種としてメダカラガイ *Purpuradusta (Cupinota) gracilis japonica* (Schilder, 1931)が入力されていた。ツマグロメダカラは採集地が台湾の高雄で、和名は BISMAL になく、収蔵資料 DB を除いて、Google の引用符検索でもヒットしなかった。この和名を動物部門が所有する図鑑類と照合したところ、肥後・後藤(1993)と一致した。現在は、どちらも属名が変更され、ツマグロメダカラの和名が消えて、メダカラ *Cypraea gracilis* (Gaskoin, 1848) が有効な和名・学名とされている。菱田(2000)では、この学名にホンメダカラの和名が与えられている。収蔵資料 DB にタカラガイ類で入力されている外国産種の多くは、属名と種小名しか入力されていない点で、菱田(2000)と一致する。

トゲエビス *Calliostoma aculeatus aculeatus* Sowerby, 1912 と入力されている亜種は、BISMALでは種へと昇格し、命名者名が明確化されて、*Calliostoma aculeatum* Sowerby III, 1912 になっていた(*aculeatus* は *aculeatum* の語尾変化間違い)。WoRMSでは属名が異なり、種小名の語尾変化と命名者名の明確化がなされて、*Tristichotrochus aculeatus* (G. B. Sowerby III, 1912)が適用されていた。トゲエビスの亜種として入

力されていたヘソアキトゲエビス *Calliostoma aculeatus soyoae* Ikebe, 1942 は BISMAL でも WoRMS でも属名が同じで、*Calliostoma soyoae* Ikebe, 1942 と、トゲエビスとは別属の種になっていた。キイエビス *Calliostoma consors kiiense* Ikebe, 1942 は、BISMAL に和名も学名もなかった。学名は WoRMS にもなかったが、*Tristichotrochus consors* (Lischke, 1872) という有効学名のシノニムとして、*Calliostoma kiiense* Ikebe, 1942 が存在した。収蔵資料 DB や BISMAL でコシタカエビス *Calliostoma consors* (Lischke, 1872) と記載されている種は、WoRMS では *Tristichotrochus consors* (Lischke, 1872) のシノニムであった。キイエビスは、和名も学名もコシタカエビスに統一されたことになる。ヘソアキエビス *Coralastele pulcherrima* (Sowerby, 1914) は、BISMAL では命名年が異なり、*Coralastele pulcherrima* (Sowerby III, 1944) が適用されていた。しかし、この命名者名で 1944 という命名年は余りにも懸け離れている[奥谷(2000)では 1914]。WoRMS では、*Coralastele pulcherrima* (G. B. Sowerby III, 1914) が有効学名であった(BISMAL では、このような間違いが少なくない)。ニシキエビス *Calliostoma multiliratum* (Sowerby, 1875) には、BISMAL では命名者名が異なる *Calliostoma multiliratum* (Sowerby II, 1875) が適用されていた。WoRMS によると、この命名者名は間違いで、*Calliostoma multiliratum* (G. B. Sowerby III, 1875) が有効学名のシノニムとされている(二世と三世の違い)。このシノニムには種小名が異なる *Calliostoma crossleyae* E. A. Smith, 1910 が適用されていて、属名が変更された *Tristichotrochus crossleyae* (E. A. Smith, 1910) が現在の有効学名であった。

フトスジエビス *Machaeroplax rudis* (Dall, 1919) は、BISMAL や WoRMS に和名や学名がなく、WMSDB に *Solariella rudis* W. H. Dall, 1919 が出て来た。Google でフトスジエビスを検索すると、*Solariella baxteri* McLean, 1995 という別の学名を掲載している複数のサイトが見つかった。Google で *Solariella baxteri* を引

用符検索すると、Wikipedia に *species inquirenda* として同じ学名が存在した[*species inquirenda*: ラテン語で、未確定種(a species of doubtful identity requiring further investigation)]。この学名のオリジナルは OBIS Indo-Pacific Molluscan Database (2018b) で、*Solariella baxteri* McLean, 1995 のシノニムとして、種小名・命名者名・命名年が同じ *Margarites (Pupillaria) rudis* Dall, 1919 が存在した。この学名の senior name として *Solariella baxteri* McLean, 1995 が掲載されていること、収蔵資料 DB の *Machaeroplax* 属は消えていても種小名・命名者名・命名年が同じであること(WoRMS では *Solariella* 属のシノニムとして掲載)、common name として Futo-suji-ebisu が掲載されていることから、フトスジエビス *Solariella baxteri* McLean, 1995 (未確定種) が有効な和名・学名と判断した。

収蔵資料 DB にシロオビコダマウサギ *Prinovolva (Prinovolva) wilsoniana* Cate, 1973、及びムラクモダマウサギ *Prinovolva brevis* (Sowerby, 1828) という種が入力されている。シロオビコダマウサギに、BISMAL や WoRMS では種小名が異なる *Prinovolva brevis* (G. B. Sowerby I, 1828) が適用されていた(*Prinovolva* は誤入力)。これはムラクモダマウサギの学名と同じであったが、BISMAL に和名がなく、著者らは当初、和名がシロオビコダマウサギへ変更されたと考えた。ムラクモダマウサギという和名に違和感を覚え、BISMAL でムラクモコダマウサギを検索すると、*Prinovolva bulla* (Adams & Reeve, 1848) が有効学名であった(この学名は WMSDB にはあるが、WoRMS にはない)。ヒナウミウサギ *Pseudosimnia (Inflatovula) sinensis* (Sowerby, 1874) は、BISMAL や WoRMS では和名と命名者名が明確化されたヒナウミウサギガイ *Pseudosimnia (Inflatovula) sinensis* (G. B. Sowerby III, 1874) がシノニムとされ、和名・属名・種小名が異なるコダマウサギ *Margovula marginata* (G. B. Sowerby I, 1828) が適用されていた。この学名はヘリトリコダマウサギ *Pseudosimnia (Inflatovula) marginata* (Sowerby,

1828)にも適用されていた(ヒナウミウサギとヘリトリコダマウサギをコダマウサギに変更した)。

ヘソアキクボガイ *Chlorostoma turbinata* (A. Adams, 1853)は肥後・後藤(1993)と一致したが、奥谷(2000)や BISMAL では、学名が *Chlorostoma turbinatum* A. Adams, 1853 になっていた。両者は、種小名の語尾変化と原記載であること以外、特段の問題はないものと思われたが、WoRMS の *Chlorostoma* 属に該当種はなかった。WMSDB で *Chlorostoma turbinatum* を入力して検索されたのは、*Tegula lividomaculata* (C. B. Adams, 1845)という属名も種小名も異なる学名で、*Tegula turbinata* J. E. Tenison-Woods, 1877 がシノニムになっていたが、*Chlorostoma* 属から *Tegula* 属への変遷が不明で、別種の可能性が高かった(写真も異なる)。微小貝データベース(2018e)では、ヘソアキクボガイ *Chlorostoma turbinatum* A. Adams, 1853 の説明に「= *Tegula argyrostoma turbinatum* A. Adams, 1853」という記述が見られ、WoRMS 検索を掛けても記録がなかったが、WMSDB に *Tegula argyrostoma turbinata* (A. Adams, 1853)が見つかった。WoRMS に、この亜種名はないが、*Tegula argyrostoma* (Gmelin, 1791)がシノニムとされ、有効学名は *Chlorostoma argyrostomum* (Gmelin, 1791)であった。この学名は BISMAL になく、これも別種の可能性が高かった。著者協議の結果、ヘソアキクボガイ *Chlorostoma turbinatum* A. Adams, 1853 を現時点での有効な和名・学名と結論付けた。

バテイラ *Omphalius pfeifferi pfeifferi* (Philippi, 1846)は奥谷(2000)や BISMAL と一致したが、WoRMS の *Omphalius* 属に該当する亜種はなく、WMSDB で *Omphalius pfeifferi* を検索すると属名が異なる *Tegula pfeifferi* (R. A. Philippi, 1846)が出て来た。WoRMS 検索で同じ学名が見つかったので、バテイラ *Tegula pfeifferi* (Philippi, 1846)を有効な和名・学名と判断した。オオコシダカガンガラ *Omphalius pfeifferi carpenteri* (Dunker, 1882)も奥谷(2000)や BISMAL と一致したが、WoRMS の *Omphalius* 属に該当する亜種はなかった。

WMSDB では属名と命名年が異なる *Tegula pfeifferi carpenteri* R. W. Dunker, 1859 が存在したが、この亜種名も学名の変遷も WoRMS になく、バテイラと同じ学名の *Tegula pfeifferi* (Philippi, 1846)という種だけが記載されていた。これらの結果から、オオコシダカガンガラ *Tegula pfeifferi carpenteri* Dunker, 1859 を有効な和名・学名と判断した。

エゾチグサ *Cantharidus jessoensis* (Schrenck, 1863)は肥後・後藤(1993)と一致したが、奥谷(2000)と BISMAL では命名者名が Schrenck になっていた。WoRMS では *Cantharidus* 属に該当する種はなく、WMSDB では *Cantharidus callichrous jessoensis* (L. von Schrenck, 1863)という亜種名が出て来て、命名者名は収蔵資料 DB や肥後・後藤(1993)と同じであった。Google Scholar で L. von Schrenck と L. von Schrenck を引用符検索すると、前者は 139 件ヒットし、後者に相当する文献がなかった。以上の結果から、エゾチグサ *Cantharidus callichrous jessoensis* (Schrenck, 1863)を適用した。ハナチグサ *Cantharidus callichroa* (Philippi, 1850)は奥谷(2000)や BISMAL では命名年が 1849 になっていたが、WMSDB には *Cantharidus callichrous* R. A. Philippi, 1850 という学名があり、種小名が女性形 *callichroa* から男性形 *callichrous* に語尾変化して、命名年が 1849 から 1850 になっていた。著者協議の結果、ハナチグサ *Cantharidus callichrous* Philippi, 1850 を有効な和名・学名と判断した。

シモフリチグサ *Iwakawatrochus vittatus* (Pilsbry, 1903)は肥後・後藤(1993)と一致したが、和名も学名も奥谷(2000)や BISMAL になく、WoRMS では *Iwakawatrochus* の属名だけ出て来て、種を含まなかった。WMSDB では、属名が異なる *Cantharidus vittatus* (H. A. Pilsbry, 1903)が適用されていた。イワカワチグサ *Iwakawatrochus urbanus* (Gould, 1861)は、肥後・後藤(1993)、奥谷(2000)、BISMAL と一致したが、WMSDB では属名が異なり、*Cantharidus urbanus* (A. A. Gould, 1861)になっていた(WoRMS でも有効。こ



れらを総合的に判断し、和名なし *Cantharidus vittatus* (Pilsbry, 1903)と、イワカワチグサ *Cantharidus urbanus* (Gould, 1861)を有効な和名・学名と結論付けた。リュウキュウチグサ *Kanekotrochus gilberti* (Montrouzier in Fischer, 1878)は BISMAL に和名も学名もなく、WoRMS でも *Kanekotrochus* 属に該当する種小名はなかった。WMSDB で *Kanekotrochus gilberti* を検索すると、収蔵資料 DB の学名とは属名だけ異なる *Jujubinus gilberti* (R. P. Montrouzier in P. Fischer, 1878)が出て来た。オニノハ *Tosatrochus attenuatus* (Jonas, 1845)に、BISMAL では属名と命名年が異なる *Thalotia attenuatus* (Jonas, 1844)が適用されていた。WoRMS では種小名が男性形から女性形へ変化した *Thalotia attenuata* (Jonas, 1844)がシノニムとされ、収蔵資料 DB と命名年が異なるだけの *Tosatrochus attenuatus* (Jonas, 1844)が適用されていた。

収蔵資料 DB のアナアキウズ *Trochus (Trochus) maculatus verrucosus* Gmelin, 1790 は肥後・後藤(1993)と一致したが、奥谷(2000)では和名、及び亜種から型への変更がなされ、ニシキウズ(アナアキウズ型) *Trochus maculatus form verrucosus* Gmelin, 1791 になっていた(BISMAL の記載も基本的に同じだが、form が抜けているのは単純な記入ミスか?)。WoRMS では亜種から種へと昇格した *Trochus verrucosus* Gmelin, 1791 がシノニムとされ、種小名が異なる *Trochus maculatus* Linnaeus, 1758 が有効学名であった。この学名は BISMAL に存在し、和名はニシキウズになっていた。WoRMS では、アナアキウズはニシキウズの亜種にも型にも分化していないと判断されたことになる。ハクシャウズ *Trochus (Trochus) calcaratus* Souverbie, 1971 は肥後・後藤(1993)と一致したが、奥谷(2000)と BISMAL では種小名が異なり、*Trochus histrio* Reeve, 1848 になっていた。WoRMS では、命名年が異なる *Trochus histrio* Reeve, 1842 が適用されていた。WoRMS で *Trochus* 属を見て行くと、収蔵資料 DB に入力されている学名とは命名年が異なる

*Trochus calcaratus* Souverbie, 1875 が見つかった。WoRMS では、ハクシャウズと考えられる学名が 2 つ出て来たことになる。WMSDB では *Trochus calcaratus* S. M. Souverbie, 1875 がシノニムとされ、*Trochus histrio* L. A. Reeve, 1842 が適用されていた。これらの結果から、ハクシャウズ *Trochus histrio* Reeve, 1842 を有効な和名・学名と判断した。

ヒメタカジリ *Trochus (Trochus) cumingii* (A. Adams, 1853)は肥後・後藤(1993)と一致したが、奥谷(2000)と BISMAL では原記載の *Trochus cumingii* A. Adams, 1853 になっていた(この学名は、大英自然史博物館のリストに載っている)。WoRMS 検索で原記載の *Trochus cumingii* Philippi, 1846 がヒットしたが、命名者名と命名年が異なっていた。WoRMS と WMSDB では、これもシノニムとされていて、属名が異なる *Tectarius cumingii* (Philippi, 1846)が有効学名であった。サラサバテイ *Tectus (Rochia) maximus* (Philippi, 1844)には、奥谷(2000)と BISMAL では種小名が異なる *Tectus niloticus* (Linnaeus, 1767)が適用されていた。この学名は WoRMS ではシノニムになっていて、属名と種小名の語尾が異なる *Rochia nilotica* (Linnaeus, 1767)が現在の有効学名であった。ナツモモ *Clanculus margaritarius* (Philippi, 1846)も肥後・後藤(1993)と一致したが、奥谷(2000)と BISMAL では命名年が 1849 になっていた。WoRMS では *Monodonta margaritaria* Philippi, 1846 が原記載なので、収蔵資料 DB と肥後・後藤(1993)の命名年(1846)は正しく、奥谷(2000)と BISMAL の 1849 は間違いである。フアセコナツモモ *Clanculus (Eucheli-clanculus) bronni fraterculus* Pilsbry, 1904 は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMAL に和名も学名もなく、WoRMS や WMSDB で *Clanculus* 属を調べても該当する亜種や *fraterculus* に似た綴りが見つからなかった[*Eucheli-clanculus* に該当する属はなかったが、肥後・後藤(1993)にはコマキアゲエビス亜属と記載されている]。Google でフアセコナツモモを引用符検索すると、*Clanculus fraterculus* Pilsbry,

1904 という独立種が出て来た(微小貝データベース, 2018f)。肥後・後藤(1993)と WoRMS では *Clanculus hizenensis* Pilsbry, 1901 が、WMSDB では *Clanculus hizenensis fraterculus* H. A. Pilsbry, 1904 が、それぞれ *Clanculus bronni* Dunker, 1860 のシノニムとされていた(BISMaL では、コマキアゲエビスの学名になっている)。学名の変遷は不明瞭だったが、これらを総合的に判断すると、フアセコナツモモという亜種はコマキアゲエビスという種に吸収されたと考えられ、フアセコナツモモ *Clanculus (Eucheliclanculus) bronni fraterculus* Pilsbry, 1904 をコマキアゲエビス *Clanculus bronni* Dunker, 1860 に変更した。

*Pentacta australis* (LuowG)と学名だけ入力されている種(軟体動物門 Mollusca/腹足綱 Gastropoda/古腹足目 Vestigastropoda/ニシキウズガイ科 Trochidae: 採集地はアラフラ海の西沖)は、BISMaL に和名がなく、*Pentacta australis* (Ludwig, 1875)という学名だけが記載されていた。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、属名が異なる *Plesiocolochirus australis* (Ludwig, 1875)が有効学名であった(棘皮動物門 Echinodermata/ナマコ綱 Holothuroidea/樹手目 Dendrochirotida/キンコ科 Cucumariidae)。この種は鈴木稔コレクションの1点で、標本状態が貝殻なので、ナマコの仲間を示す学名には違和感を覚えた。標本に当たって調べたところ、まったく別物のニシキウズガイ科の貝殻であった。元々のラベルの学名の転記ミスで、オオサンショウガイモドキ *Herpetopoma aspersa* (Philippi, 1846)が最も近かった(微小貝データベース, 2018g)。WoRMS では *Herpetopoma aspersa* [sic]と出て来て、*Herpetopoma aspersum* (Philippi, 1846)が有効学名であった(軟体動物門 Mollusca/腹足綱/Gastropoda/Seguenziida 目/Chilodontidae 科)。

クラギシロガサ *Lepeta kuragiensis* (Yokoyama, 1920)は、BISMaL では属名が異なる *Cryptobranchia kuragiensis* (Yokoyama, 1920)が有効学名であった。WoRMS では学名が混乱しているようで、2018年12

月8日の時点で *Cryptobranchia* Middendorff, 1851 は junior objective synonym (客観新参異名)とされ、*Lepeta* Gray, 1847 を有効属名と記述しているにもかかわらず、*Cryptobranchia kuragiensis* (Yokoyama, 1920)も有効学名と記述していた。著者協議の結果、クラギシロガサ *Lepeta kuragiensis* (Yokoyama, 1920) を有効な和名・学名と結論付けた。シロガサ *Lepeta caeca pacifica* Moskarev, 1978 は、BISMaL では和名と命名者名が異なるシロガサガイ *Lepeta caeca pacifica* Moskalev, 1978 が有効とされていた。WoRMS では、命名年が異なる *Lepeta caeca pacifica* Moskalev, 1977 がシノニムとされていて、*Lepeta caeca* (O. F. Müller, 1776)が有効学名であった。クルマガサ *Cellana radiata* (Pilsbry, 1891)は BISMaL では命名者名が異なり、*Cellana radiata* (Born, 1891)になっていた。WoRMS では、この学名の命名者名の綴りと命名年が間違いとされ、*Cellana radiata* (Born, 1778)が適用されていた(原記載は *Patella radiata* Born, 1778)。タイワンガサ *Cellana profunds mauritiana* (Pilsbry, 1891)は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL に和名はなく、WoRMS や WMSDB の *Cellana* 属に似たような種小名も亜種小名もなかった。Google でタイワンガサを検索すると、*Eoacmaea* sp.の学名が見つかった(佐々木, 2018)。WoRMS の *Eoacmaea* 属には、亜種から種に格上げされた *Eoacmaea mauritiana* (Pilsbry, 1892)が出て来た。この種の前記載が *Helcioniscus profundus mauritiana* Pilsbry, 1892 なので、収蔵資料 DB と肥後・後藤(1993)にある *profunds* という種小名は、*profundus* の記述ミスと推察される。以上の結果から、タイワンガサ *Eoacmaea mauritiana* (Pilsbry, 1892)を有効な和名・学名と判断した。

ツボミ *Patelloida (Asteracmea) pygmaea lampanicola* (Habe, 1944)は、BISMaL や WoRMS では種小名が異なり、ツボミガイ *Patelloida conulus* (Dunker, 1861)が適用されていた。シボリガイ *Patelloida (Asteracmea) pygmaea signata* (Pilsbry, 1901)は BISMaL に見当たら

なかったが、シボリガイモドキ *Patelloida signatoides* (Kuroda & Habe, 1971) という種が存在した。WoRMS で *Patelloida* 属を見て行くと、亜種から種へと昇格した *Patelloida signata* (Pilsbry, 1901) が出来て来て、*Patelloida signatoides* (Kuroda & Habe, 1971) がシノニムとされていた。以上の結果から、BISMaL に記載されているシボリガイモドキは消え、シボリガイ *Patelloida signata* (Pilsbry, 1901) を有効な和名・学名と判断した。ヒメコザラ *Patelloida (Asteracmea) pygmaea pygmaea* (Dunker, 1860) は BISMaL と WoRMS では種小名と命名年が異なり、*Patelloida heroldi* (Dunker, 1861) が適用されていた。

採集地が北海道稚内と岩手県広田湾のベッコウシロガイ *Testudinalia scutus* (Eschscholtz, 1833) と入力されている種は、BISMaL や WoRMS では属名と種小名が異なる *Lottia emydia* (Dall, 1914) が有効学名とされている。WoRMS で *Testudinalia scutus* を検索すると、種小名の語尾と命名者名が異なる *Testudinalia scutum* (Rathke, 1833) が、*Lottia scutum* (Rathke, 1833) のシノニムとして出て来た。これは入力の問題で、和名優先なら *Lottia emydia* (Dall, 1914) が正しく、学名優先なら *Lottia scutum* (Rathke, 1833) が正しい。WMSDB で分布域を調べると、前者は北海道で、後者はアラスカを初めとする環太平洋地域であった。以上の結果から、ベッコウシロガイ *Lottia emydia* (Dall, 1914) を有効な和名・学名と判断した。

ヒメイシダミアマオブネ *Nerita (Ritena) tristis* Pilsbry, 1901 は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL では和名も学名も見当たらず、WoRMS では *Nerita tristis* d'Orbigny, 1842 と *Nerita tristis* Pilsbry, 1901 という属名と種小名が同じで命名者名と命名年が異なる 2 つの学名が出て来た。*Nerita tristis* d'Orbigny, 1842 は *Puperita pupa* (Linnaeus, 1767) のシノニムとされ[*Nerita (Nerita) helicinoides tristis* Pilsbry, 1901 は奥谷(2000)と一致したが、現在のステータスは新参異物同名(invalid: junior homonym of *Nerita*

*tristis* d'Orbigny, 1842)], *Nerita tristis* Pilsbry, 1901 は *Nerita eichhorsti* Krijnen, Gras & Vink, 2018 の学名を持つ新種として記載されていた(Pilsbry の命名は総て否定された)。

スミツキシヤジクガイ *Inquister* sp. は、フィリピン・セブの Mactan 島で採集され、BISMaL に和名はなかった。Google でスミツキシヤジクガイの引用符検索を掛けると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。県博が所有する図鑑類で調べたところ、菱田(2000)にスミツキシヤジクガイ *Inquister vaicosa* と書かれている写真が存在した。*Inquister* 属は間違いなので、WoRMS で *Inquisitor* 属に出て来る種を見て行くと、*Inquisitor varicosus* (Reeve, 1843) という、種小名が似ている種が見つかった(WoRMS では、原記載として *Pleurotoma varicosus* Reeve, 1843 が記載されている)。菱田(2000)の種小名 *vaicosa* は、*r* が抜けた誤入力と不正確な語尾変化によるものと考え、類推した属名と種小名 *Inquisitor varicosus* で Google の引用符検索を掛けると、Wikipedia に菱田(2000)と似た貝殻の写真が出て来た。微小貝データベース(2018d)に、ウネクチキレボラ *Inquisitor varicosus* (Reeve, 1843) という種が見つかった。このサイトに別名スミツキシヤジク、台湾名: 台湾玉米捲管螺 *Inquisitor taivaricosus* と書かれていて、この学名で WoRMS 検索を掛けると、*Inquisitor taivaricosus* Chang & Wu, 2000 という新しい種が出て来た。この種の WoRMS image を見ると、菱田(2000)に掲載されているのとまったく同じ貝殻で、フィリピン・セブの Mactan 島で採集されたものであった。以上を総合的に判断し、収蔵資料 DB のスミツキシヤジクガイ *Inquister* sp. を、スミツキシヤジク *Inquisitor taivaricosus* Chang & Wu, 2000 に変更した。

ヒメカノコ *Clithon (Pictoneritina) oualaniensis* (Lesson, 1831) は、WoRMS では *Clithon oualaniensis* [sic] (incorrect gender ending) となっていて、*Clithon oualaniense* (Lesson, 1831) が有効学名であった。オオ

マルアマオブネ *Neritina (Theliostyla) chamaelom* Linnaeus, 1758 は、BISMaL でも WoRMS でも属名が異なる *Nerita chamaeleon* Linnaeus, 1758 が適用されていた(*chamaelom* は誤入力)。ヒロクチカノコ *Neritina (Dostia) violacea* (Gmelin, 1791) は、肥後・後藤(1993)と一致した。BISMaL では、和名優先なら種小名が異なる *Neritina cornucopia* (Benson, 1836) が有効であったが、学名優先なら和名なし *Neritina violacea* (Gmelin, 1791) が別に存在した[奥谷(2000)では別種とされている]。WoRMS では、*Neritina cornucopia* Benson, 1836 がシノニムとされ、属名が変更された *Neripteron cornucopia* (Benson, 1836) が有効学名であった[学名優先の場合、*Neripteron violaceum* (Gmelin, 1791) も種として存在するが、明らかにヒロクチカノコとは別種]。

スジマキカワニナ *Semisulcospira massaeformis* Kuroda & Kanamaru, 1929 は、WMSDB の expanding search でも Double Metaphone algorithm でも記録がなかった。Google で *Semisulcospira massaeformis* を引用符検索すると、収蔵資料 DB だけがヒットした。肥後・後藤(1993)には種小名の異なる *Semisulcospira nassaeformis* Kuroda & Kanamaru, 1929 が記載されている(*massaeformis* という種小名は明らかな誤入力で、*n* と *m* の違いだけで検索に引っ掛かって来なかったことになる)。WMSDB で *Semisulcospira nassaeformis* を検索すると、*Semisulcospira libertina nassaeformis* J. T. Kuroda & T. Kanamaru, 1929 が出来た。アオミオカタニシ *Leptomopa (Leptomopa) nitidum* Sowerby, 1843 は WMSDB で *Leptomopa nitidum* を検索してもヒットせず、Google でアオミオカタニシを検索すると *Leptopoma nitidum* が出来た(*Leptomopa* は誤入力で、*p* と *m* の置き換わりで検索に引っ掛かって来なかったことになる)。

イブキゴマガイ *Diplommatina (Sinica) labiosa labiosa* Martens, 1877 は肥後・後藤(1993)と一致したが、WMSDB 検索で命名者名と命名年が異なる

*Diplommatina labiosa* Blanford, 1868 が出来た。陸・淡水産腹足類日本固有種目録(亀田, 2018)ではイブキゴマガイの和名に *Diplommatina collarifera* Schmacker & Böttger, 1890 が掲載され、肥後・後藤(1993)では *Diplommatina collarifera* Schmacker & Boettger, 1890 が *Diplommatina (Sinica) labiosa labiosa* Martens, 1877 のシノニムとして掲載されている(Boettger と Böttger は同じ綴り)。WMSDB 検索で、*Diplommatina collarifera* P. B. Schmacker & O. Böttger, 1890 という種が出来た。WMSDB では、*Diplommatina* 属に *labiosa* と *collarifera* の種小名を持つ2つの種が存在し、そのどちらかにイブキゴマガイという和名が与えられていることになる(掲載されている画像を見る限り、*collarifera* のほうに軍配が上がりそうである)。その一方で、イブキゴマガイと同じ種小名を持つオオウエゴマガイ *Diplommatina (Sinica) labiosa tenuiplica* Pilsbry, 1900 は、WMSDB では亜属が取れた学名が適用されていたが、種小名だけ異なる *Diplommatina collarifera tenuiplica* H. A. Pilsbry, 1900 も存在し、かなり混乱しているようであった。WoRMS にも陸産貝類として *Diplommatina* 属は掲載されているが、*labiosa* と *collarifera* の種小名はない。以上を総合的に判断し、イブキゴマガイ *Diplommatina collarifera* Schmacker & Böttger, 1890 とオオウエゴマガイ *Diplommatina collarifera tenuiplica* Pilsbry, 1900 を有効な和名・学名と結論付けた。

クボタシタダミ *Kubotanella* sp. は、BISMaL では命名年のない *Kubotanella vitrea* Kuroda がシノニムとされ、属名が異なる *Dilwynella vitrea* Hasegawa, 1997 が適用されていた(WoRMS や WMSDB にも同じ学名が存在する)。サミダレタマキビ *Littorina (Neritrema)* sp. の和名が Google の引用符検索でヒットするのは、収蔵資料 DB と「山形県立博物館収蔵資料目録 動物資料目録 8. 加藤繁富貝類コレクション(以後、加藤目録と略す)」の2件だけで、和名も学名も特定は不能であった(この2つは同じもの)。 *Littorina peanapis*

(Philippi)と学名だけ入力されている種を Google で引用検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけで、*Littorina* 属で種小名の特定は不能であった。*Littorina (Austrelittorina) unifasciata antipodum* Philippi と学名だけ入力されている亜種を WMSDB で検索すると、*Austrolittorina unifasciata antipodum* R. A. Philippi, 1847 という原記載がシノニムになっていて、*Austrolittorina antipodum* (R. A. Philippi, 1847)が出て来た(*Austrelittorina* は *Austrolittorina* の誤入力で、*o* が *e* になっただけで検索が困難になっている)。BISMaL にも、*Austrolittorina antipodum* (Philippi, 1847)という和名なし学名が見つかった。

コビトウラウズ *Peasiella roepstorffiana* (Nevill, 1884)は、BISMaL や WoRMS では学名が消え、新種記載されたコビトウラウズガイ *Peasiella habeii* Reid & Mak, 1998 が有効な和名・学名になっていた。ホソスジチョウジガイ *Peripetella materinsulae* Pilsbry, 1904 には、WMSDB では属名が異なる *Rissoina materinsulae* H. A. Pilsbry, 1904 が適用されていたが、BISMaL と WoRMS ではシノニムとされ、入力されている学名とは属名も種小名も異なる *Rissoina ambigua* (Gould, 1849)が適用されていた。キンスジチョウジガイ *Apataxia cerithiformis* (Dunker, 1887)には、BISMaL では属名・命名者名・命名年が異なる *Rissoina cerithiformis* Tryon, 1887 が適用されていた (*cerithiformis* は誤入力)。WoRMS では *Rissoina cerithiformis* Tryon, 1887 がシノニムとされ、属名が変更された *Apataxia cerithiformis* (Tryon, 1887)が有効学名であった。ヌノメチョウジガイ *Phosinella fusca* (Gould, 1861)には、BISMaL では属名と種小名が異なる *Rissoina pura* (Gould, 1861)が適用されていたが、WoRMS や WMSDB では *Phosinella pura* (Gould, 1861)が適用されていた。レイシツボ *Pyramidelloides miranada* (A. Adams, 1861)は、属名と種小名の誤入力で、どの DB でもヒットしなかったが、属名を類推して WMSDB 検索すると、*Pyramidelloides mirandus*

(A. Adams, 1861)が出て来た(学名は WoRMS でも有効)。この種はリソツボ科 *Rissoidea* に分類されていたが、現在は寄生種で構成されるハナゴウナ科 *Eulimidae* に移行している。

コゲレイシダマシ *Cronia (Muricodrupa) aspera* (Lamarck, 1799)は肥後・後藤(1993)と一致したが、どの組み合わせでも、BISMaL や WoRMS だけでなく、WMSDB でも検索不能で、佐々木(2018)の和名・学名対応表に *Neothais marginatra* があった。BISMaL 検索で *Neothais marginatra* (Blainville, 1832)が出て来て、この学名は WoRMS や WMSDB でも有効であった[肥後・後藤(1993)に「= *marginata*」とあったので (*marginatra* ではない)、試しに *Cronia (Muricodrupa) marginata* で検索すると、WoRMS に *Cronia marginatra* (Blainville, 1832)というシノニムが見つかった]。レイシダマシモドキ *Cronia (Muricodrupa) fusca* (Kiister, 1862)は、BISMaL や WoRMS では、属名変更された *Semiricinula fusca* (Küster, 1862)が有効学名であった(Kiister は Küster の誤入力)。

コイボテツレイシ *Mancinella intermedia* (Kiener, 1936)には、BISMaL では 1836 の命名年が適用されていたが、WoRMS の曖昧検索で出て来たのは、属名が異なる *Marginella intermedia* G. B. Sowerby II, 1846 と *Marginella herminea* Jousseaume, 1875 であった。これらの学名に違和感を覚えたので、WMSDB で *Mancinella intermedia* を検索すると、属名が異なる *Menathais intermedia* (L. C. Kiener, 1836)がヒットした(この学名は WoRMS で有効)。トゲツノテツレイシ *Mancinella aculeata* Deshayes, 1844 は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS や WMSDB では *Mancinella aculeata* Link, 1807 がシノニムになっていて(命名者名と命名年が異なっている)、種小名が変更された *Mancinella alouina* (Röding, 1798)が適用されていた。ツノテツレイシ *Mancinella hippocastanum* (Linnaeus, 1758)には、BISMaL では種小名が語尾変化した *hippocastana* が適用されていたが、WoRMS では収蔵

資料 DB と同じ学名がシノニムで出て来て[BISMaL の *hippocastana* は語尾変化間違い。奥谷(2000)では *hippocastanus* になっている]、属名と種小名が異なる *Volema myristica* Röding, 1798 が有効学名であった。

シロハリゴウナ *Eulima maria* (A. Adams, 1861)は、WoRMS の曖昧検索で *Eulima paria* (Bartsch, 1926)が出て来たが、*maria* が *paria* に変わっただけで命名者名と命名年が異なることに違和感を覚えた。WMSDB では、原記載の *Eulima maria* A. Adams, 1861 がシノニムとして出て来て、属名と種小名が変更された *Hypermastus casta* (A. Adams, 1861)が現在の有効学名であった。この学名は WoRMS でも有効であったが、*maria* の種小名は *Leiostraca maria* A. Adams, 1861 が原記載であった。オオクリムシガイ *Balcis cumingi* (A. Adams, 1854)は、BISMaL では和名が変更され、属名・種小名の語尾・命名年が異なるオオクリムシ *Melanella cumingii* (A. Adams in H. & A. Adams, 1853)が適用されていたが、WoRMS では命名年が異なる *Melanella cumingii* (A. Adams, 1851)が適用されていた(原記載は *Eulima cumingii* A. Adams, 1851)。ユキクリムシガイ *Balcis musta* (Yokoyama, 1928)は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL や WoRMS では検索不能であった。WMSDB では、この学名と同じものが出て来たが、化石種に付けられていて、現生種の学名は不明であった。

ユキノキリニナ *Turritellopsis acicula stimpsoni* Dall, 1919 に、BISMaL では *Tachyrhynchus septemcostatus* Golikov, 1986 という新種記載が適用されていたが、WoRMS では BISMaL の学名が doubtful synonym とされ、属名と種小名が異なる *Acirsa morsei* (Yokoyama, 1926)が適用されていた(この学名は WMSDB でも有効。原記載は *Turbonilla morsei* Yokoyama, 1926)。ヤマビトボラ *Tibia powisi* (Petit, 1842)は BISMaL と一致したが、WoRMS では *Tibia powisii* (Petit de la Saussaye, 1840)がシノニムで、*Rimellopsis powisii* (Petit de la Saussaye, 1840)が有効学名であった。ワタナベボラ

*Tibia martinii* (Marrat, 1877)に、BISMaL では種小名の語尾が異なる *martini* が適用されていたが、WoRMS では語尾間違いとされ、元の学名に戻っていた[この学名もシノニムで、属名が異なる *Rostellariella martinii* (Marrat, 1877)が有効とされている]。

アツキクスズメ *Sabia acuta* (Quoy & Gaimard, 1835)は肥後・後藤(1993)や BISMaL と一致したが、*Sabia acuta* で検索すると WoRMS では記録がなく、WMSDB では *Hipponix acutus* J. R. C. Quoy & J. P. Gaimard, 1835 がシノニムとして出て来て、種小名が異なる *Hipponix conicus* (H. C. F. Schumacher, 1817)が適用されていた。WoRMS では、この学名はシノニムとされ、*Sabia conica* (Schumacher, 1817)が適用されていた。BISMaL で *Sabia conica* を検索すると、キクスズメ *Sabia conica* (Schumacher, 1817)の和名・学名が別に存在した。WMSDB でシノニムとされた *Hipponix acutus* Quoy & Gaimard, 1835 は、BISMaL ではアツキクスズメ *Sabia acuta* (Quoy & Gaimard, 1835)のシノニムだが、WoRMS では *Sabia conica* (Schumacher, 1817)のシノニムであった。WoRMS の見解に従えば、アツキクスズメはキクスズメに吸収されたことになる。ヒメゴボウラ *Tricornis sinuatus* (Lightfoot, 1786)は、BISMaL では *Sinuostrombus sinuatus* (Humphrey, 1786)が有効学名であったが、WoRMS では命名者名が([Lightfoot], 1786)になっていた(原記載は *Strombus sinuatus* [Lightfoot], 1786)。スイジガイ *Harpago chiraga* (Linnaeus, 1758)は、BISMaL では *Lambis chiragra* (Linnaeus, 1758)になっていた。この学名は WoRMS と WMSDB ではシノニムとされ、*Harpago chiragra* (Linnaeus, 1758)が適用されていた(収蔵資料 DB の間違いは種小名の誤入力だけ)。

ヤイバボラ *Laminilabrum breviaxe* Kuroda & Habe in Habe, 1961 は、BISMaL では属名が異なる *Pisanianura breviaxe* Kuroda & Habe in Habe, 1961 が有効とされていたが、原記載が適用されていることに違和感を覚えた。WoRMS 検索で、原記載でない *Pisanianura*

*breviaxis* (Kuroda & Habe, 1961)がシノニムとして出て来て(*breviaxe* は *breviaxis* の誤入力)、*Laminilabrum breviaxe* Kuroda & Habe, 1961 が現在の有効学名であった。カゴメナワボラ *Ariadnaria insignis* (Middendorff, 1849)は、BISMaL では属名が異なる *Trichotropis insignis* Middendorff, 1849 が有効学名であった。WoRMS では、この学名がシノニムで(命名年は1848)、属名が元に戻った *Ariadnaria insignis* (Middendorff, 1848)が有効学名であった(収蔵資料 DB は命名年が間違っているだけ)。タマゴナワボラ *Iphinopsis kroyeri* (Philippi, 1849)は、BISMaL では *Neophinoe kroyeri* (Philippi, 1749)が有効とされていたが、この命名者名で1700年代の命名年に違和感を覚えた。WoRMS では、*Neophinoe kroeyeri* (Philippi, 1849)が有効学名であった(収蔵資料 DB は属名が異なるだけ)。

カワチドリの和名にスズメガイの学名 *Pilosabia trigona* (Gmelin, 1791)が入力されている種1点は、和名を優先すべきか、学名を優先すべきか、判断が難しかった。標本に当たって調べたところ、幼貝で、毛羽毛羽がない殻の特徴からして、カワチドリ *Antisabia foliacea* (Quoy & Gaimard, 1835)を有効な和名・学名と判断した。カセンチドリ *Capulus badius* Dunker, 1882 は、BISMaL に和名がなく、*Capulus badius* に該当する種もなかった。*Capulus* で検索すると、*Capulus badius* Dunker, 1882 がシノニムとして出て来て(*badius* は *badius* の誤入力)、属名も種小名も異なる *Amathina violacea* (Angas, 1867)が有効とされていた。WoRMS で *Amathina violacea* を検索するとシノニムになっていて、属名が元に戻り、種小名の語尾が変化した *Capulus violaceus* Angas, 1867 が適用されていた。ヒラフネガイ *Ergaea walshi* (Reeve, 1859)は BISMaL ではシノニムになっていて、属名が異なる *Syphopatella walshi* (Reeve, 1859)が有効学名であった[*Crepidula walshi* (Reeve, 1859)と *Siphopatella walshi* (Reeve, 1859)もシノニムとして挙げられている]。WoRMS で属名の変遷をたどると、*Siphopatella*

(incorrect subsequent spelling)から *Syphopatella* Lesson, 1831 を経て、*Crepidula* Lamarck, 1799 まで変わっていた。原記載の *Crepidula walshi* Reeve, 1859 がシノニムで、属名が異なる *Ergaea walshi* (Reeve, 1859)が現在の有効学名であった(収蔵資料 DB の学名は正しく、BISMaL が間違っていた)。

ホンクマサカ *Xenophora japonica* Kuroda & Habe, 1971 は BISMaL や WoRMS と一致したが、BISMaL では和名がホンクマサカガイになっていた(ホンクマサカガイは誤入力で、収蔵資料 DB の和名をホンクマサカガイに変更した)。コゲクマサカ *Xenophora torrida* Kuroda & Ito, 1961 と入力されている種2点は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS で *Xenophora torrida* を検索するとシノニムになっていて、*Xenophora cerea* (Reeve, 1845)が現在の有効学名であった。この学名を BISMaL で検索すると、シワクマサカガイ *Xenophora cerea* (Reeve, 1845)が出て来た。収蔵資料 DB にも、シワクマサカ *Xenophora cerea* (Reeve, 1845)と入力されている種2点が存在した。

ヒメハラダカラ *Cypraea (Erronea) hungerfordi* *hungerfordi* Sowerby, 1888 には、BISMaL では属名が変更され、命名者名が明確化された *Notadusta hungerfordi hungerfordi* (G. B. Sowerby III, 1888)が適用されていた。WoRMS では、属名が異なる *Paradusta hungerfordi* (G. B. Sowerby III, 1888)が適用されていた。アミメダカラ *Mauritia (Arabica) scurra* (Gmelin, 1791)には、BISMaL では *Mauritia scurra indica* (Gmelin, 1791)が適用されていたが、この学名は WoRMS ではシノニムになっていて、亜種小名が異なる *Mauritia scurra scurra* (Gmelin, 1791)が現在の有効学名であった(この学名が亜種になっているのは、*Mauritia scurra occidua* C. P. Meyer & Lorenz, 2017 が新種記載されたから)。チドリダカラ *Pustularia cicercula lienardi* (Jousseume, 1874)に、BISMaL では *Pustularia cicercula* (Linnaeus, 1758)が適用されていたが、WoRMS では入力されている学名とは亜種小名

が異なる *Pustularia cicercula tricornis* (Jousseaume, 1874)が適用されていた。クロシオダカラ *Cypraea* (*Palmadusta*) *contaminata* Sowerby, 1832 に、BISMaL では *Palmadusta contaminata* (G. B. Sowerby I, 1832)が適用されていたが、WoRMS では命名者名が異なる *Palmadusta contaminata* (Gray, 1832)が有効学名であった(原記載は *Cypraea contaminata* Gray, 1832)。

ハンフレータカラガイ *Cypraea humphreysi* は、WoRMS では命名者名と命名年が入った *Cypraea humphreysii* Gray, 1825 がシノニムとされていた(*humphreysi* は誤入力)。この学名から属名が変更された *Palmadusta humphreysii* (Gray, 1825)は incorrect original spelling で、種小名から *s* が取れた *Palmadusta humphreyii* (Gray, 1825)が適用されていた。ゴウシユウルリグチダカラ *Adusta walhesi continens* は BISMaL や WoRMS では検索できず、WMSDB では *Adusta* が *Erronea* に属名変更されていることが分かった。WoRMS で *Erronea walhesi* を検索すると、種小名が誤って入力されていて、*Erronea walkeri* (G. B. Sowerby I, 1832)というシノニムが出て来た。属名が異なる *Contradusta walkeri* (G. B. Sowerby I, 1832)が有効学名で、*Contradusta walkeri continens* (Iredale, 1935)という direct children の亜種が存在した。ゴマフダカラ *Palmadusta punctata* (Linnaeus, 1771)には、BISMaL では属名が異なる *Notadusta punctata punctata* (Linnaeus, 1771)が適用されていたが、WoRMS では更に属名が異なる *Ransoniella punctata punctata* (Linnaeus, 1771)が適用されていた。ジュズダマダカラ *Paulonaria beckii* (Gaskoin, 1836)は、BISMaL では属名が *Erosaria* になっていたが、この学名は WoRMS ではシノニムとされ、属名が異なる *Naria beckii* (Gaskoin, 1836)が有効学名であった。フスベダカラ *Ponda* (*Ponda*) *ventriculus* (Lamarck, 1810)は、WMSDB で *Ponda ventriculus* を検索すると、modified Genus *Ponda* to *Lyncina* と出て来て、属名が異なる *Lyncina ventriculus* (J. B. P. A. Lamarck, 1810)が適用されてい

た。この学名は WoRMS でも有効で、BISMaL ではキンカンダカラという和名が与えられていた。ナンヨウダカラ *Callistocypraea aurantium* (Gmelin, 1791)に BISMaL では *Lyncina aurantium* (Gmelin, 1791)が適用されていたが、この学名は WoRMS ではシノニムとされ、属名が *Callistocypraea* に戻っていた。

リュウズタカラガイ *Paritrqna coputdraconis* は(採集地はイースター島)、どの DB にもなく、Google で和名や学名を引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。リュウズタカラガイの引用符を外して検索すると、鳥羽水族館のニセハナムルユキ(リュウズダカラ) *Cypraea caputdraconis* がヒットした。WoRMS 検索では *Cypraea caputdraconis* Melvill, 1888 がシノニムで出て来て、属名変更された *Monetaria caputdraconis* (Melvill, 1888)が有効学名であった(*coputdraconis* は誤入力。*a* が *o* になっただけでヒットしない)。*Paritrqna* の属名自体が読めないのので、鈴木稔コレクションのラベルを確かめると、癖のある字体で *Ravitrona* と書いてあり、WMSDB で modified Genus *Ravitrona* to *Monetaria* と出て来た(*Ravitrona* を *Paritrqna* と読み違えた誤入力)。アカベリヘリトリ *Marginella cincta* は、WoRMS では *Marginella cincta* Kiener, 1834 がシノニムとされ、属名が変更され、種小名が語尾変化した *Prunum cinctum* (Kiener, 1834)が有効学名であった(収蔵資料 DB の盤足目 Discopoda/ウミウサギガイ科 Ovulidae とは、目名も科名も異なる新腹足目 Neogastropoda/ヘリトリガイ科 Marginellidae に所属していた)。BISMaL ではザクロガイ *Sulcerato callosa* (A. Adams & Reeve, 1850)に、属名が異なる *Proterato callosa* (Adams & Reeve, 1850)が適用されていたが、WoRMS では属名も種小名も異なる *Hespererato scabriuscula* (Gray, 1832)が適用されていた。

ウカレコボレバケボリ *Dentiovula saturnalia* Cate & Azuma, 1973 には、BISMaL や WoRMS では、和名と種小名が変更されたコボレバケボリ *Dentiovula*



*colobica* (Azuma & C. N. Cate, 1971)が適用されていた。収蔵資料 DB には、コボレバケボリの和名に似たコボレバケボリダカラ *Dentiovula dorsuosa* (Hinds, 1844)が入力されている。この和名は BISMAL になく、学名で検索すると、和名が異なるキンスジケボリ *Dentiovula dorsuosa* (Hinds, 1844)が出て来た。テンロクケボリ *Pseudosimnia (Diminovula) punctata* (Duclos, 1831)は BISMAL ではシノニムになっていて、亜属から属へと昇格した *Diminovula punctata* (Duclos, 1831)が有効とされていたが、WoRMS では命名年が異なる *Diminovula punctata* (Duclos, 1828)が適用されていた(原記載は *Ovula punctata* Duclos, 1828)。

チシオコボレバケボリ *Dentiovula takeoi* Cate & Azuma, 1973 は BISMAL や WoRMS ではシノニムになっていて、属名と種小名が異なるハナアヤメケボリ *Crenovolva striatula* (G. B. Sowerby I, 1828)が有効な和名・学名であった。収蔵資料 DB には、トガリアヤメケボリ *Crenovolva (Cuspivolva) cuspis* Cate, 1973 が存在し、BISMAL に従ってハナアヤメケボリ *Crenovolva striatula* (G. B. Sowerby I, 1828)へ変更した。ハガタスジマキケボリ *Crenovolva (Crenovolva) striatula traillii* (A. Adams, 1855)の和名は BISMAL になく、属名と亜種小名の誤入力で検索が困難だったが、アヤメケボリ *Crenovolva traillii* (A. Adams, 1855)の和名・学名を見つけた。WoRMS では、更に命名年が異なる *Crenovolva traillii* (A. Adams, 1856)が適用されていた。収蔵資料 DB にはアヤメケボリ *Delonovolva formosa* (A. Adams & Reeve, 1848)が存在し、学名を *Crenovolva traillii* (A. Adams, 1856)へ変更した。ツマニケボリ *Crenovolva (Crenovolva) frumentum* (Sowerby, 1828)には、BISMAL では属名と種小名が異なる *Primovula beckeri* (Sowerby III, 1874)が適用されていたが、WoRMS では更に命名年が異なる *Primovula beckeri* (Sowerby III, 1900)が適用されていた(原記載は *Amphiperas beckeri* G. B. Sowerby III, 1900)。チヂワケボリ *Prosimnia semperi boshuensis* Cate, 1973 という

亜種は、BISMAL では種に吸収され、*Prosimnia semperi* (Weinkauff, 1881)になっていた。WoRMS でシノニムの変遷をたどり、亜種から種へと昇格した *Prosimnia boshuensis* C. N. Cate, 1973 が、学名としては有効と判断した。

加藤繁富コレクションでナガレボリシラタマ *Trivirostra (Trivirostra) pellucidula* (Gaskoin, 1846)と記載されている種は、肥後・後藤(1993)と一致した。BISMAL では *Trivirostra pellucidula* (Gaskoin, 1846)が適用されていたが、WoRMS では命名者名が異なる *Trivirostra pellucidula* (Reeve, 1846)が適用されていた(原記載は *Cypraea pellucidula* Reeve, 1846)。加藤繁富コレクションと鈴木稔コレクションでナガレボリシラタマ *Tanea areolata* (Récluz, 1844)と記載されている種も肥後・後藤(1993)と一致したが、ナガレボリシラタマの和名でナガレシボリダマの学名 *Tanea areolata* (Récluz, 1844)が入力されていた。タマガイ科 Naticidae に分類されているため学名優先と判断したが、標本に当たって調べたところ、加藤繁富コレクションは学名が正しく、鈴木稔コレクションは和名が正しかった。肥後・後藤(1993)の目録にナガレシボリダマの和名はなく、学名が異なるナガレボリシラタマが2ヶ所に入っている。

クチュムラサキタマガイ *Natica violacea* Sowerby, 1825 は BISMAL と同じだったが、WoRMS では属名が異なり、命名者名が明確化された *Tectonatica violacea* (G. B. Sowerby I, 1825)が有効学名であった。スミレダマガイ *Natica labrotincta* Sowerby, 1914 には、BISMAL では和名と種小名が異なるスミレダマ *Natica suffusa* Reeve, 1855 が適用されていたが、WoRMS では属名も異なる *Tectonatica suffusa* (Reeve, 1855)が有効学名であった(収蔵資料 DB で入力されている種とは別物)。ヘブライタマガイ *Natica maculata* は BISMAL に和名も学名もなかったが、WoRMS では *Natica maculata* von Salis, 1793 がシノニムとされ、属名も種小名も異なる *Naticarius hebraeus*

(Martyn, 1786)が適用されていた。*Natica millepunctata* Lamarck と学名だけ入力されている種は、WoRMS では種小名の綴りが 1 文字だけ異なる *Natica millepunctata* Lamarck, 1822 がシノニムで、*Naticarius stercusmuscarum* (Gmelin, 1791)が有効学名であった。

ホウシュノタマ *Notocochlis lurida* (Philippi, 1870)には、BISMaL では種小名が異なる *Notocochlis gualteriana* (Récluz, 1844)が適用されていたが、WoRMS では種小名の綴りが 1 文字だけ異なる *Notocochlis gualtieriana* (Récluz, 1844)が適用されていた[*Natica gualteriana* Récluz, 1844 は original spelling のシノニムで、原記載は *Natica gualtieriana* Récluz, 1844]。モクメダマ *Tanea zebra* Camarck, 1822 は命名者名の誤入力で、*Tanea zebra* Lamarck, 1822 というシノニムが肥後・後藤(1993)にある。BISMaL や WoRMS では、種小名が異なる *Tanea undulata* (Röding, 1798)が有効学名であった。*Tanea zebra* で検索すると、BISMaL や WoRMS に一致する分類群はなく、WMSDB の曖昧検索で *Natica zebra* J. B. P. A. Lamarck, 1822 というシノニムが見つかった。エゾタマガイ *Cryptonatica andoi* (Nomura, 1935)は、BISMaL では *Cryptonatica janthostomoides* (Kuroda & Habe, 1949)が有効とされていたが(原記載は *Tectonatica janthostomoides* Kuroda & Habe, 1949)、この学名は WoRMS ではシノニムとして消滅し、元の学名が適用されていた(原記載は *Natica andoi* Nomura, 1935)。

ハギノツユ *Tanea sagittata* (Menke, 1843)は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL や WoRMS では属名と種小名が異なり、*Notocochlis cernica* (Jousseume, 1874)が適用されていた。問題は、*Tanea sagittata* (Menke, 1843)が WoRMS に有効学名として存在していることで、学名の変遷をたどると、*Notocochlis sagittata* (Menke, 1843)がシノニムで出て来た。*Notocochlis cernica* (Jousseume, 1874)のシノニムとして、*Notocochlis sagittata hancockae* Powell, 1971 が出て来た。元々、ハギノツユとされていた種から、日本

近海産のものが亜種に分けられ、現在は別々の種として異なる学名を持つに至ったと考えられる。

ゴマフダマ *Tectonatica tigrina* (Röding, 1798)は、BISMaL では属名が異なる *Paratectonatica tigrina* (Röding, 1798)が有効とされていた。WoRMS では、*Paratectonatica* Azuma, 1961 に *tigrina* の種小名を持つ種は存在せず、WMSDB で *Notocochlis tigrina* (P. F. Röding, 1798)が出て来た。掲載されている画像を見ると、明らかなゴマフダマであった。タマネコガイ *Eunaticina papilla lamarckiana* (Récluz, 1845)は、BISMaL では亜種から種へと昇格した *Eunaticina lamarckiana* (Récluz, 1843)が有効とされていたが、この学名(命名者名は Récluz)は WoRMS ではシノニムとされ、元の学名から命名年だけ異なる *Eunaticina papilla lamarckiana* (Récluz, 1843)が適用されていた。ホソスジタマガイ *Jectinatica filosa* は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS や WMSDB でも検索できなかった(採集地はスペインのマラガ)。Google でホソスジタマガイを検索すると、*Natica filosa* Philippi, 1845 という学名が出て来た(微小貝データベース, 2019a)。BISMaL で *Natica filosa* を検索すると、和名がなく、命名者名と命名年が異なる *Natica filosa* Reeve, 1855 がシノニムとして出て来て、*Mammilla fibrosa* (Gray, 1850)が適用されていた。WoRMS、及び WMSDB では *Natica filosa* Philippi, 1845 をシノニムとするのが *Tectonatica sagraiana* (d'Orbigny, 1842)で、*Natica filosa* Reeve, 1855 をシノニムとするのが *Mammilla fibrosa* (Gray, 1850)であることが判明した。微小貝データベース(2019a)と WMSDB の採集地情報や画像の比較、標本調査から、*Tectonatica sagraiana* (d'Orbigny, 1842)を有効学名と判断した[BISMaL に掲載されている和名なし *Mammilla fibrosa* (Gray, 1850)は、ホソスジタマガイとは別種]。オリジナルラベルには *Tectinatica filosa* と記入されていて(*Jectinatica* は誤入力)、WoRMS で改めて *Tectinatica filosa* を検索すると、*Tectonatica filosa* (Philippi, 1845)

をシノニムとする *Tectonatica sagraiana* (d'Orbigny, 1842)が出て来た(*Tectinatica* は誤入力)。ピワガイ *Ficus subintermedia* (d'Orbigny, 1852)は奥谷(2000)や BISMAL と一致したが、WoRMS では、この種の学名は「化石種のみ(fossil only)」と記述されていた。WMSDB で *Ficus subintermedia* を検索すると、*Ficus ficus subintermedia* (A. V. M. D. D'Orbigny, 1852)という亜種が出て来た。両者を同じ物と考え、WoRMS で現生種の *Ficus ficus* (Linnaeus, 1758)をピワガイに適用するのが妥当と判断した。

トウカムリ *Cassis cornutus* (Linnaeus, 1758)の4点は、BISMAL や WoRMS では種小名の語尾が異なる *Cassis cornuta* (Linnaeus, 1758)が有効学名であった。問題は *Cassis cornuta* (Linnaeus, 1758)の1点にフグリウラシマガイの和名が入力されていることで、加藤目録で確かめると、トウカムリ *Cassis cornuta* (Linnaeus, 1758)とフグリウラシマガイ *Cypraecassis testiculus* (Linnaeus, 1758)は、和名・学名が正確に記載されていた。目録は正しかったのに、収蔵資料 DB では間違った学名が入力されていることになる。*Cassis cornuta* (Linnaeus, 1758)という学名が誤入力でフグリウラシマガイの和名に残っていることと、奥谷(2000)にトウカムリ *Cassis cornutus* (Linnaeus, 1758)と記載されていることから、当時の担当者がトウカムリの種小名を *cornuta* から *cornutus* へ変更したものと推察される。

*Phalium (Bezoardicella) decussatum* (Linnaeus, 1758)と入力されている種4点は、WoRMS では亜属が取れた *Phalium decussatum* (Linnaeus, 1758)が有効学名であったが、2点にヌノメカズラの和名が、2点にスベリウラシマガイの和名が入力されていた。加藤目録で確かめると、スベリウラシマガイには *Phalium bisulcatum* (variety)と記載されていた。収蔵資料 DB で *Phalium bisulcatum* を検索すると、イナズマタイコガイと入力されていて、加藤目録のイナズマタイコガイには *Phalium (Casmaria) ponderosa forma*

*turgidum* Reeve と記載されていた[WMSDB で *Casmaria ponderosa turgidum* を検索すると、*Casmaria ponderosa turgida* L. A. Reeve, 1848 というシノニムと(*ponderosa* は誤入力)、*Casmaria turgida* (L. A. Reeve, 1848)が出て来た]。収蔵資料 DB ではイナズマタイコガイの学名にナシガタウラシマガイと入力されていて、加藤目録のナシガタウラシマガイには *Phalium (Xenophalium) pyrum pyrum* (Lamarck, 1822)と記載されていた[WoRMS で *Phalium (Xenophalium) pyrum* を検索すると、*Phalium pyrum* (Lamarck, 1822)というシノニムが出て来て、属名が異なる *Semicassis pyrum* (Lamarck, 1822)が有効学名であった]。収蔵資料 DB ではナシガタウラシマガイの学名にアツウラシマガイと入力されていて、加藤目録のアツウラシマガイには *Phalium (Tylocassis) granulatum granulatum* (Born, 1778)と記載されていた。この学名は、収蔵資料 DB に存在しない。WoRMS で *Phalium (Tylocassis) granulatum* を検索すると、*Semicassis granulata* (Born, 1778)が有効学名として出て来た。収蔵資料 DB では、スベリウラシマガイにヌノメカズラの学名が誤入力されてから順に1個ずつ学名がズレて行き、アツウラシマガイの学名が押し出される形で消えてしまったことになる。

前述の加藤目録でスベリウラシマガイ *Phalium bisulcatum* (variety)と記載されている種は、収蔵資料 DB では *Phalium (Bezoardicella) decussatum* (Linnaeus, 1758)が誤入力されていて(ヌノメカズラの旧学名)、WoRMS では属名と種小名の語尾が異なり、命名者名と命名年が入った *Semicassis bisulcata* (Schubert & J. A. Wagner, 1829)が有効学名であった。問題は、収蔵資料 DB に学名が同じワダチウラシマ *Semicassis bisulata bisulata* (Schubert & Wagner, 1829)と入力されている亜種3点と(*bisulata* は *bisulcata* の誤入力)、カズウネウラシマ *Semicassis bisulcata bisulcata* (Schubert & Wagner, 1829)と入力されている亜種1点が存在することであった。加藤目録で調べると、ワ

ダチウラシマの記載はあったが、カズウネウラシマはなかった(Google でカズウネウラシマを引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった)。他に入力されている、ウネウラシマ *Semicassis bisulcata japonica* (Reeve, 1848)の4点、リュウグウウネウラシマ *Semicassis bisulata japonica* (Reeve, 1848)の2点(*bisulata* は *bisulcata* の誤入力)、タマウラシマ *Semicassis bisulcata pila* (Reeve, 1848)の3点、ウラシマガイ *Semicassis bisulcata persimilis* Kira, 1959の6点、アツウラシマガイ *Semicassis bisulata persimilis* Kira, 1959の1点(*bisulata* は *bisulcata* の誤入力)、マメシボリウラシマ *Semicassis bisulata minor* (Kiister, 1857)の2点は(頭楯目 Cephalaspidea / マメウラシマガイ科 Ringiculidae で入力されている。*bisulata* は *bisulcata* の誤入力)、BISMaL では和名なし *Semicassis bisulcata* (Schubert & J. A. Wagner, 1829)のシノニムとされている(WoRMS の学名を適用した。*Semicassis* 属に、これらの亜種小名が種小名に昇格した種が存在しないことを確認した)。オオシノミガイ *Acteon sieboldii* (Reeve, 1842)には、BISMaL では種小名の語尾が異なる *Acteon sieboldii* (Reeve, 1842)が適用されていたが、この学名は WoRMS ではシノニムとされ、属名が異なる *Japonactaeon sieboldii* (Reeve, 1842)が有効学名であった。アカフキジビキガイ *Punctacteon flammeus* (Gmelin, 1791)は BISMaL と一致したが、WoRMS では記録がなく、WMSDB では *Maxacteon flammeus* (J. G. Bruguière, 1789)が出て来た。Google 検索で、属名が異なり、種小名が語尾変化した *Acteon flammea* が見つかった(奥谷, 2017)。WoRMS では *Acteon flammea* [sic] (incorrect gender ending)と表示され、*Maxacteon flammeus* (Bruguière, 1789)が有効学名であった。

レンジャクガイ *Casmaria ponderosa nipponensis* Abbott, 1968 は BISMaL と一致したが、WoRMS ではシノニムとされ、亜種から種へと昇格し、種小名が異なる *Casmaria cernica* (G. B. Sowerby III, 1888)が適用されていた。クビレマツカワ *Biplex aculeata*

(Schepman, 1909)には、BISMaL では和名と種小名が異なるクビレマツカワガイ *Biplex pulchra* (G. B. Sowerby II, 1836 in G. B. Sowerby I & G. B. Sowerby II, 1832–1841)が適用されていたが、WoRMS では属名が異なり、種小名が語尾変化した *Gyrineum aculeatum* (Schepman, 1909)が適用されていた。コトリノカシラ *Biplex jacundum* (A. Adams, 1853)は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS でも記録がなかった。WMSDB では命名者名と命名年が異なる *Biplex jacundum* E. Forbes, 1852 がシノニムとされ、種小名が異なる *Biplex pulchellum* Sowerby, 1825 が適用されていた。WoRMS では *Biplex pulchella* (G. B. Sowerby I, 1825)がシノニムになっていて、属名が変更され、種小名が語尾変化した *Gyrineum pulchellum* (G. B. Sowerby I, 1825)が適用されていた。オオヘビガイ *Serpulorbis imbricatus* (Dunker, 1860)は BISMaL と一致したが、この学名は WoRMS では junior homonym (subjective synonym)とされ、属名と種小名が異なる *Thylacodes adamsii* (Mörch, 1859)が適用されていた。

トゲコナルトボラ *Bursa (Colubrellina) lolituda wolfei* Beu は、*Bursa wolfei* で検索すると、WMSDB では *Bursa latitudo wolfei* T. A. Garrard, 1961 がヒットした(*lolituda* は *latitudo* の誤入力)。WoRMS では *Bursa (Bufonariella) latitudo wolfei* Beu, 1981 がシノニムで出て来て、*Bursa latitudo* Garrard, 1961 が有効学名であった。クチグロオキニシ *Bursa (Bursa) muehlhaeuseri* Parth, 1990 は、WoRMS 検索で *Bursa muehlhaeuseri* Parth, 1990 がシノニムとして出て来て(*muehlhaeuseri* は誤入力)、種小名が異なる *Bursa lamarckii* (Deshayes, 1853)が適用されていた。BISMaL では、この学名にはクロミオキニシの和名が与えられていた。*Bursa spinosa* と学名だけ入力されている種を WoRMS 検索すると、*Bursa spinosa* (Schumacher, 1817)がシノニムで出て来て、属名と種小名が異なる *Bufonaria echinata* (Link, 1807)が有効学名であった。BISMaL では、この学名にハリミヤコボラの和名が与えられて

いた。ヒメヤスリミヤコボラ *Bufonaria subgranosa* (Sowerby, 1836)は BISMAL に和名も学名もなく、WoRMS では *Bufonaria rana* (Linnaeus, 1758)のシノニムとして出て来た。BISMAL では、この学名にミヤコボラの和名が与えられていた。タテヒダミヤコボラ *Bufonaria marginata* Gmelin, 1991 と、この命名者名ではあり得ない命名年が入力されている種には、WoRMS では *Aspa marginata* (Gmelin, 1791)が適用されていた。オニウネボラ *Bursina nobilis* (Reeve, 1844)に、BISMAL では *Bufonaria nobilis* (Reeve, 1844)が適用されていたが、この学名は WoRMS ではシノニムとされ、元の学名が有効であった。

柄眼目 *Stylommatophora*、及び *Assimineea grayana* Fleming, 1828 と入力されている種には(採集地はベルギーの Antwerpen)、和名も科名も入力されていなかったが、属名でソートを掛けると目名の異なる盤足目 *Discopoda* / カワザンショウガイ科 *Assimineidae* の 1 種 3 点と 1 亜種 1 点が検出された(カワザンショウガイ *Assimineea japonica* v. Martens, 1877 とテシオカワザンソウ *Assimineea japonica septentrionalis* Habe, 1942)。BISMAL では学名と科名は同じだったが、どちらも目名が吸腔目 *Sorbeoconcha* になっていた。WoRMS や WMSDB では *Assimineea grayana* Fleming, 1828 が適用されていたが、前述の 1 種 1 亜種を含めた目名には疑義が出ていた(Order *Littorinimorpha*: BISMAL では、吸腔目の下目になっている)。和名は見当たらない。著者協議の結果、*Littorinimorpha* 目を適用した。トウガタカワザンショウ *Angustassimineea angusta* Pilsbry, 1901 は BISMAL に和名も学名もなく、WoRMS でも WMSDB でも検索できなかった。WoRMS で *Assimineea angusta* を検索すると、種小名が異なる *Assimineea angustata* Pilsbry, 1901 がシノニムとして出て来て、属名が異なる *Ansola angustata* (Pilsbry, 1901)が有効学名であった。WoRMS には属名が異なる *Barleeria angustata* (Pilsbry, 1901)がシノニムとして掲載されていて、BISMAL では、この学名にチャツ

ボの和名が与えられている。

オオカラミミズガイ *siliquaria pohderosa* は、WoRMS の曖昧検索で *Siliquaria ponderosa* (Mörch, 1861)というシノニムが出て来て、属名が異なり、種小名が語尾変化した *Tenagodus ponderosus* Morch, 1861 が適用されていた。パイプミジンツツ *Meioceras kajiyamai* (Habe, 1963)は、BISMAL では属名が異なる *Caecum kajiyamai* (Habe, 1963)が有効とされていたが、WoRMS や WMSDB では属名が元に戻り、原記載の *Meioceras kajiyamai* Habe, 1963 が有効学名であった。ヒシレイシ *Thais (Thais) mutabilis* (Link, 1806)は、BISMAL や WoRMS では記録がなかったが、WMSDB では命名年が異なる *Thais mutabilis* J. H. F. Link, 1807 がシノニムとして出て来て、属名と種小名が異なる *Indothais lacera* (I. von Born, 1778)が適用されていた。ウスイロアキ *Murex (Murex) scalopax* Pillmyu は、WoRMS の曖昧検索で、種小名と命名者名が異なる *Murex scolopax* Dillwyn, 1817 が出来た(命名者名の誤入力甚だしいケース。Google でウスイロアキを引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけで、加藤繁富コレクションなのに加藤目録にはなかった)。ヒラメヨウラクガイ *Murex (Eupleura) nitida* (Broderip, 1833)は、WoRMS では種小名が語尾変化した *Murex nitidus* Broderip, 1833 がシノニムになっていて、属名と種小名が異なる *Hexaplex radix* (Gmelin, 1791)が有効学名であった。

タイワンツブリ *Haustellum rectirostris* (Sowerby, 1841)の和名は BISMAL になかったが、学名検索で和名と属名が異なるヒメホネガイ *Vokesimurex rectirostris* (G. B. Sowerby II, 1841)が出て来た(この学名は WoRMS でも有効)。オトヒメガンゼキ *Chicoreus (Phyllonotus) laciniatus* (Sowerby, 1841)は、肥後・後藤 (1993)と一致した(正確な和名は、オトヒメガンゼキ)。同じ学名でオトヒメバショウ *Chicoreus (Chicomurex) laciniatus* (G. B. Sowerby, 1861)と入力されている種があり、どちらも加藤繁富コレクションなのに、加藤

目録にオトヒメバシヨウは見当たらなかった。WoRMS では *Chicoreus laciniatus* (G. B. Sowerby II, 1841) がシノニムとされ、属名が異なる *Chicomurex laciniatus* (G. B. Sowerby II, 1841) が適用されていた。このことからオトヒメガンゼキ *Chicomurex laciniatus* (G. B. Sowerby II, 1841) を有効な和名・学名と判断した。ムラサキガンゼキボラ *Marchia purpureus* (Azuma, 1976) は、BISMaL や WoRMS では和名も学名も検索できず、Google でムラサキガンゼキボラを引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。WMSDB で *Marchia purpureus* を検索すると、*Raphitoma purpurea* (G. Montagu, 1803) と *Orania purpurea* (J. T. Kuroda & T. Habe, 1961) の2つの学名が出て来たが、どちらもムラサキガンゼキボラとは異なると思われた。WMSDB に modified Genus *Marchia* to *Pterynotus* という記述があり、WoRMS では *Pterynotus purpureus* Azuma, 1976 がシノニムになっていて、種小名が異なる *Pterynotus barclayanus* (H. Adams, 1873) が有効学名であった。収蔵資料 DB には、他にベニガンゼキ *Marchia barclayana* (H. Adams, 1874) と入力されている種があり、WoRMS 検索すると、命名年が異なる *Marchia barclayana* (H. Adams, 1873) がシノニムで出て来て、属名が異なり、種小名が語尾変化した *Pterynotus barclayanus* (H. Adams, 1873) が有効学名であった(ムラサキガンゼキボラと学名は同じで、和名なし種に変更した)。

ハツキガイ *Siratu pliciferoides pliciferoides* (Kuroda, 1942) は、BISMaL に一致する分類群情報がなかったが、*Siratu pliciferoides* で検索すると、ハツキガイ *Siratu pliciferoides* (Kuroda, 1942) という和名・学名が出て来た(和名・属名・種小名の誤入力)。ミヨコバシヨウ *Marchia loebbeckei miyokoe* Kosuge, 1979 は、BISMaL や WoRMS では和名も学名もなかったが、WMSDB では *Babelomurex miyokoe* S. Kosuge, 1985 と *Timbellus miyokoe* (S. Kosuge, 1979) の2つの学名が出て来た。掲載されている画像と収蔵資料 DB に

ある画像を比較したところ、後者に相当することが分かった。WoRMS で *Timbellus miyokoe* を検索するとシノニムになっていて、属名が異なる *Chicoreus miyokoe* (Kosuge, 1979) が適用されていた。パナマアラレツブリボラ *Muricopsis armatus* Adams, 1854 は、WMSDB では属名が変更され、命名者名が明確化された *Murexsul armatus* (C. B. Adams, 1854) が有効学名であった。WoRMS では、命名者名が異なる *Murexsul armatus* (A. Adams, 1854) が適用されていた(原記載は *Murex armatus* A. Adams, 1854)。

ツヅレヨウラク *Favartia rosamiae* d'Attilio & Hyero, 1985 は、BISMaL では、和名と命名者名が異なるローザトゲヨウラク *Favartia (Murexiella) rosamiae* D'Attilio & Myers, 1985 がシノニムとされ、和名なし *Favartia rosamiae* D'Attilio & Myers, 1985 が適用されていた(Hyero は Myers の誤入力)。ドロシーヨウラク *Favartia (Murexiella) dorthyae* Emerson & d'Attilio, 1979 は、WoRMS の曖昧検索で *Favartia dorthyae* Emerson & D'Attilio, 1979 が出来て来て(*dorthyae* は *dorothyae* の誤入力)、種小名が異なる *Favartia salmonea* (Melvill & Standen, 1899) が有効学名であった。収蔵資料 DB では、この学名にニクイロヨウラクの和名があり、両種に和名なし *Favartia salmonea* (Melvill & Standen, 1899) を適用した。

ヨウラクガイ *Pteropurpura (Ocinebrellus) falcata* (Sowerby, 1840) に、BISMaL では亜種から種へと昇格し、命名者名が明確化されて命名年が異なる *Pteropurpura falcata* (G. B. Sowerby II, 1834) が適用されていた。この学名は WoRMS ではシノニムになっていて、属名が変更され、種小名が語尾変化した *Ocinebrellus falcatus* (G. B. Sowerby II, 1834) が有効学名であった。イセヨウラク *Pteropurpura (Ocinebrellus) adunca* (Sowerby, 1834) は、BISMaL では亜属が取れた学名が有効とされていたが、WoRMS ではシノニムとされ、種小名が異なる *Pteropurpura falcata* (G. B. Sowerby II, 1834) を経て、属名が変更され、種小名が

語尾変化した *Ocinebrellus falcatus* (G. B. Sowerby II, 1834)が適用されていた。この学名は BISMAL ではヨウラクガイに適用されているので、イセヨウラクの和名を無効とし、ヨウラクガイ *Ocinebrellus falcatus* (G. B. Sowerby II, 1834)を有効と判断した[BISMAL ではヨウラクガイ *Pteropurpura falcata* (G. B. Sowerby II, 1834)とイセヨウラク *Pteropurpura adunca* (Sowerby, 1834)は別々の種として記載されている]。

*Urosalpinx lurida* (Middendorff, 1848) forma *munda* (Carpenter, 1864)と入力されている品種は、命名者名と命名年が2ヶ所にあり、初めて見る学名の書き方であった。WMSDB では、属名が異なる *Ocenebra lurida munda* P. P. Carpenter, 1864 というシノニムが出て来て、属名が変更され、亜種から種へと昇格した *Ocenebrina lurida* (A. T. von Middendorff, 1848)が適用されていた。カゴメガイ *Bedeva birileffi* (Lischke, 1871)は BISMAL と同じだったが、WoRMS ではシノニムとされ、*Bedevina birileffi* (Lischke, 1871)が適用されていた。ヒメヨウラク *Ergalatax takugawai* Kuroda & Habe in Kuroda, Habe & Oyama, 1971 とトクガワヒメヨウラク *Ergalatax tokugawai* Kuroda & Habe, 1971 は、学名が同じと思われた(*takugawai* は誤入力)。BISMAL では、ヒメヨウラク *Ergalatax contractus* (Reeve, 1846)とトクガワヒメヨウラク *Ergalatax tokugawai* Kuroda & Habe in Kuroda, Habe & Oyama, 1971 は学名が異なっていた。WoRMS や WMSDB では、*Ergalatax contracta* (Reeve, 1846)と *Ergalatax tokugawai* Kuroda & Habe, 1971 が有効学名であった(BISMAL の *contractus* は、語尾変化間違い)。

チヂミボラ *Nucella heyseana* (Dunker, 1882)は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMAL と奥谷(2000)では種小名が異なる *Nucella lima* (Gmelin, 1791)が適用されていた。ホソスジチヂミボラ *Nucella lima* (Gmelin, 1791)も肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMAL と奥谷(2000)では、*Nucella heyseana* (Dunker, 1882)の学名にもホソスジチヂミボラの和名にも一

致する分類群情報はなかった。WoRMS や WMSDB では *Nucella heyseana* (Dunker, 1882)も *Nucella lima* (Gmelin, 1791)も生きていて、学名の変遷をたどると、どちらも独立して派生した種と思われた。肥後・後藤(1993)では、チヂミボラとホソスジチヂミボラの和名が入れ替わっている可能性が考えられた。収蔵資料 DB にあるチヂミボラ *Nucella heyseana* (Dunker, 1882)とホソスジチヂミボラ *Nucella lima* (Gmelin, 1791)は、貝殻の形状が2種とも WoRMS や WMSDB の画像と一致したことから、学名は正しく入力されていると結論付けた。奥谷(2000)、WoRMS、及び WMSDB で *Nucella lima* (Gmelin, 1791)の画像が一致したことから、学名を優先し、和名を変更したチヂミボラ *Nucella lima* (Gmelin, 1791)と和名なし *Nucella heyseana* (Dunker, 1882)を有効な和名・学名と判断した。コシタカチヂミボラ *Nucella freycineti elongata* Gorikov & Kussakin, 1962 は BISMAL に和名も学名もなかったが、WoRMS では *Nucella elongata* Golikov & Kussakin, 1974 がシノニムになっていて(*freycineti* と Gorikov は誤入力で、1962 は命名年間違い)、種小名が異なる *Nucella heyseana* (Dunker, 1882)が適用されていた(この学名はチヂミボラとして入力されていたもので、和名がホソスジチヂミボラに変更された後、和名なし種に落ち着いている)。

クビレスイフガイ *Bucconia cumingii* (A. Adams, 1862)には、BISMAL では属名が異なる *Scaphander cumingii cumingii* A. Adams, 1862 が適用されていたが、WoRMS では更に属名が異なる *Philine cumingii* (A. Adams, 1862)が適用されていた(スイフガイ科 Cylichnidae からキセワタガイ科 Philinidae へ変更)。テラマチスイフガイ *Nipponoscapander teramachii* (Habe, 1954)は、BISMAL や WoRMS では属名が異なる *Scaphander teramachii* (Habe, 1954)が有効学名であった(スイフガイ科 Cylichnidae から Scaphandridae 科へ変更)。ツマベニクダタマガイ *Eocylichna braunsi* (Yokoyama, 1920)には、BISMAL では属名が異なる

*Eocyclus braunsi* (Yokoyama, 1920)が適用されていたが、WoRMS の曖昧検索で *Eocyclus braunsi* (Yokoyama, 1920)が出て来て(*Eocyclus* は記述ミス)、属名と種小名が異なる *Cylichna biplicata* (A. Adams in Sowerby, 1850)が有効学名であった。セキヒツクダタマガイ *Eocyclus musashiensis* (Tokunga, 1906)には、BISMaL では属名が異なる *Eocyclus musashiensis* (Tokunaga, 1906)が適用されていたが(Tokunga は誤入力)、WoRMS では収蔵資料 DB と同じ属名になっていた。BISMaL に掲載されている *Eocyclus* 属 7 種は、軒並み *Eocyclus* の誤入力で、奥谷(2000)では *Eocyclus* になっている。

タマゴマメヒガイ *Rhizorus ovulinus* (A. Adams, 1862)は、WoRMS では属名と命名年が異なり、種小名が語尾変化した *Volvulella ovulina* (A. Adams, 1850)が有効学名であった(Adams は誤入力)。オオヤマコメツブガイ *Acteocina (Truncateocina) oyamai* Kuroda & Habe, 1954 は BISMaL では和名が異なるワタゾコメツブガイ *Truncateocina oyamai* (Kuroda & Habe in Habe, 1954)が適用されていたが、WoRMS では *Truncateocina oyamai* (Kuroda & Habe, 1954)がシノニで、*Truncateocina arata* (R. B. Watson, 1883)が適用されていた。マツシマコメツブガイ *Retusa (Decolifer) matsusima* (Nomura, 1940)には *Decorifer matsusimanus* (Nomura, 1939)が適用されていた(収蔵資料 DB の *Decolifer* と *matsusima* は誤入力で、1940 は間違い)。

クチュムラサキサンゴヤドリ *Coralliophila neritoidea* (Lamarck, 1816)に、BISMaL では命名者名と命名年が異なる和名なし *Coralliophila neritoidea* (Gmelin, 1791)が適用されていた。この学名は WoRMS で「Invalid: basionym is a junior homonym of *Murex neritoideus* Linnaeus, 1767」とされ、種小名が異なる *Coralliophila violacea* (Kiener, 1836)が有効学名であった。ウスベニサンゴヤドリ *Coralliophila amirantium* Smith, 1884 は、BISMaL では命名年が 1994 と 100 年も異なっていたが、WoRMS では *Coralliophila amirantium* E. A. Smith,

1884 が有効学名であった。スギモトサンゴヤドリ *Coralliophila clathrata* (A. Adams, 1854)は、BISMaL では命名者名が滅茶苦茶で、*Coralliophila clathrata* (Adams, 1854 in H. A. Adams, 1983–58)になっていたが、WoRMS では収蔵資料 DB と同じ学名であった。クマドリカセン *Latiaxis castaneotinctus* Kosuge, 1980 は、WoRMS では *Latiaxis castaneotinctus* Kosuge, 1980 がシノニムで出て来て(*castaneotinctus* は誤入力)、*Babelomurex princeps* (Melvill, 1912)が現在の有効学名であった。ヒメエゾボラ *Neptunea (Barbitonia) arthritica* (Bernardi, 1857)は、亜属の取れた学名が BISMaL と一致したが、WoRMS では命名者名と命名年が異なり、*Neptunea arthritica* (Valenciennes, 1858)になっていた(原記載は *Fusus arthriticus* Valenciennes, 1858)。シワキキョウ *Latiaxis finchii* は、BISMaL の曖昧検索でシロキキョウニシ *Babelomurex finchii* (Fulton, 1930)と出て来て、収蔵資料 DB に同じ和名・学名を持つ種が存在した(ロをワと読み違えた?)。

タカカブラ *Rapa bubiformis* Sowerby G. B. III, 1870 は奥谷(2000)と一致したが、BISMaL では種小名が異なり、命名者名が簡略化された *Rapa bulbiformis* Sowerby, 1870 が適用されていた(*bubiformis* は誤入力)。WoRMS では、命名者名が明確化された *Rapa bulbiformis* G. B. Sowerby II, 1870 が有効学名であった(二世と三世の違い)。ムロガイ *Magilus striatus* (Rüppell, 1835)は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS では *Magilus striatus* (Rüppell, 1835)がシノニムになって(Rüppell は誤入力)、属名が異なる *Leptoconchus striatus* Rüppell, 1835 というシノニムを経て、種小名が異なる *Leptoconchus peronii* (Lamarck, 1818)が現在の有効学名であった。カギヨウラク *P. lumaria* (Yokoyama, 1926)は、BISMaL でも WoRMS でも検索不能で、WMSDB の種小名検索に *lumaria* を入れたところ、*Ocenebra lumaria* M. Yokoyama, 1926 がヒットした。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、*Ocenebrellus lumarius* (Yokoyama, 1926)が有効学名で



あった。アワビモドキ *Concholepas perwiana* Lamarck, 1801 は種小名の(uv を w と読み間違えた)誤入力で、WoRMS では *Concholepas peruviana* Lamarck, 1801 というシノニムが出て来て、*Concholepas concholepas* (Bruguère, 1789)が有効学名であった。

ナガラメ *Haliotis (Sulculus) diversicolor gruneri* Phippi, 1848 の4点は、BISMaL になかった。WoRMS で亜種小名 *gruneri* を持つ種のシノニム状況、及び Google の引用符検索でナガラメという和名を検討した結果、亜種小名を変更し、BISMaL で有効なフクトコブシ *Haliotis diversicolor diversicolor* Reeve, 1846 への変更をおこなった。フクトコブシ *Sulculus diversicolor diversicolor* (Reeve, 1846)は他に4点あったが、これらは *Haliotis* の属名を持つ原記載の亜種への変更をおこなった。ハナヤカカンス *Bolma (Galeoastraea) erectospinosa* (Habe & Okutani, 1980)は、肥後・後藤(1993)の参考種に準拠していると思われたが、BISMaL では和名も学名も検索できなかった。WoRMS では、*Galeoastraea erectospinosa* Habe & Okutani, 1980 がシノニムとされ、*Bolma persica* (Dall, 1907)が有効学名であった。これはテンジクカンス *Bolma (Galeoastraea) percica* Dall, 1907 と同じもので、この種の和名・学名も肥後・後藤(1993)に準拠していると思われた。ここで入力されている *percica* という種小名は *persica* の誤記で、BISMaL ではテンジクカンス *Bolma persica* (Dall, 1907)と記載されている(これが現在の有効学名)。テンジクカンスとハナヤカカンスは、肥後・後藤(1993)では2つの種という認識で、その後の学名の変遷でハナヤカカンスという和名が抹消されたと考えられる。

マドモチヒメカタベ *Liotina peronii* (Kiener, 1839)は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL では、この学名を持つ種の和名はリュウキュウヒメカタベに変更されている。この変更で、リュウキュウヒメカタベ *Liotina (Liotinaria) ryukyuensis* Habe, 1991 の学名をシノニムと見なし、*Liotina peronii* (Kiener, 1839)を適

用した。WoRMS では、この学名もシノニムで、亜属から属へと変更された *Liotinaria peronii* (Kiener, 1838)が適用されていた [WoRMS では、*Liotina (Liotinaria) ryukyuensis* Habe, 1991 はシノニムに記載されていない]。ヒラマキヒメカタベ *Cyclostrema japonicum* Sakurai & Habe, 1977 は肥後・後藤(1993)や奥谷(2000)と一致し、WoRMS では有効であったが、BISMaL では命名者名の Sakurai が Sasaki になっていた。肥後・後藤(1993)に桜井・波部とあり、Sakurai が有効な命名者名であることを確認した。

キナノカタベ *Angaria sphaerula* (Kiener, 1839)は、肥後・後藤(1993)と一致した。BISMaL では和名が検索できなかったが、*Angaria sphaerula* (Kiener, 1873) という学名は生きていて、キタノカタベという和名が記載されていた(命名年が 1839 ではなく 1873 になっていた)。BISMaL の学名と命名年は奥谷(2000)と一致したが、奥谷(2000)では和名がキナノカタベになっていた(この文献は BISMaL の引用元なので、キタノカタベは誤入力)。WoRMS では、この学名の命名年は 1838 になっていた。WoRMS にある原記載から 1838 を適用し、肥後・後藤(1993)に「喜納静氏(沖縄)に献名」と記載されていることから、和名をキナノカタベに統一した。

*Margarites lenticula* Gould, 1861 と学名だけ入力されている種は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL や WoRMS では該当する種が見つからなかった(採集地は、鹿児島県奄美群島大島笠利土浜)。WoRMS に表示される *Margarites* 属 98 種の中に、*lenticula* という種小名は見つからなかった。Google で属名と種小名の引用符検索を掛けると、収蔵資料 DB 以外に、OBIS Indo-Pacific Molluscan Database (2018a)で同じ学名の種が出て来た。この DB に掲載されている学名の有効性には疑問が残るところから、WMSDB 検索すると、種小名が語尾変化した *Margarites lenticulus* A.A. Gould, 1861 が出て来た。著者協議の結果、*Margarites lenticulus* Gould, 1861 を有

効学名と判断した。ダイオウテンガイ *Lucapina* (*Megathura*) *cremlata* (Sowerby)は、まるでパズルのようであった。WoRMS では、*Lucapina* 属に該当する種は見つからなかった。亜属の *Megathura* で検索すると、*Megathura crenulata* (Sowerby I, 1825)という学名が見つかった。亜属から属への変更と種小名の誤入力重なったせいで(*nu* を *m* と読み違えた?)、DB では検索不能な間違いになってしまっている。コシバテンガイ *Diodora* (*Diodora*) *yokoyamai koshibensis* Otuka, 1937 は、BISMaL では和名検索できなかったが、同じ種と思われるヨコヤマテンガイ *Diodora yokoyamai* Okutani, 1937 が存在した。WoRMS では命名者名が異なる *Diodora yokoyamai* Otuka, 1937 が適用されており、ヨコヤマテンガイ *Diodora yokoyamai* Otuka, 1937 を有効な和名・学名と判断した。オオツカテンガイ *Diodora* (*Diodora*) *suprapunicea* Otuka, 1937 は、BISMaL では *Diodora suprapunicea* Okutani, 1937 と命名者名が異なっているのに対し、WoRMS では命名者名が *Diodora suprapunicea* Otuka, 1937 になっていて、これを有効学名と判断した。

チリメンニナには、BISMaL でも WoRMS でも *Cirsotrema varicosum* (Lamarck, 1822)が適用されていたが、同じ学名にセブチリメンイトカケの和名が入力されていた。この和名は BISMaL になく、Google の引用符検索でヒットするのは収蔵資料 DB だけという、お粗末な結果であった。セブチリメンイトカケの採集地がフィリピンなので、WMSDB で *Cirsotrema varicosum* (Lamarck, 1822)の分布域を見ると、日本からフィリピンまで広域分布する種であることが判明した(WMSDB の種小名 *varicosa* は、原記載からの間違い)。このことから、どちらも同じ種と判断し、セブチリメンイトカケをチリメンニナに変更した。ハタエイトカケ *Spiniscalca vigintifoliata* Masahito, Kuroda & Habe, 1971 に、WoRMS では属名と種小名が異なる *Epitonium castum* (A. Adams, 1873) が適用されていた。オケゾコイトカケ *Viciniscalca*

*okezoko* Azuma, 1962 は、WoRMS では「Secondary homonym of *Cycloscala okezoko* Habe, 1961」になっていて、新種記載された *Epitonium profundum* Nakayama, 2000 が適用されていた。フタオビハブタエイトカケ *Fragilopalma bitaeniata* Masahito & Habe, 1976 には、BISMaL では属名が変更された *Amaea bitaeniata* (Masahito & Habe, 1976)が適用されていた。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、種小名が異なる *Amaea nebulodermata* (Azuma, 1972)が適用されていた。クレハガイ *Papyriscalca latifasciata* (Sowerby, 1878) は、BISMaL では属名と種小名が異なる *Epitonium clementinum* (Grateloup, 1940)が有効とされていたが、WoRMS では命名年が 1840 になっていた(原記載は *Scalaria clementina* Grateloup, 1840)。マダラキリオレ *Viriola* (*Viriola*) *flammulata* (Pease, 1860)は、BISMaL や WoRMS では属名と種小名が異なる *Euthymella elegans* (Hinds, 1843)が有効学名であった。カスリキリオレ *Viriola* (*Orbitophora*) *elegans* (Hinds, 1843)は BISMaL に和名も学名もなかったが、WoRMS では *Viriola elegans* (Hinds, 1843)がシノニムとされ、マダラキリオレの学名 *Euthymella elegans* (Hinds, 1843)が適用されていた。BISMaL ではアラレキリオレ *Inella japonica* Kuroda & Kosuge, 1963 に原記載が適用されなかったが[*Inella japonica* (Kuroda & Kosuge, 1963)], WoRMS と WMSDB では命名者名が異なる *Inella japonica* Kuroda & Habe, 1963 が適用されていた。

ケシマツムシ *Zafra sinensis* (Sowerby, 1894)は BISMaL と一致したが WoRMS になく、WMSDB では命名者名が明確化されていても古い属名の *Anachis sinensis* (G. B. II Sowerby, 1894)が出て来た。微小貝データベース(2019b)に「ハハジマノミニナに合併」という記述があり、ハハジマノミニナ *Zafra hahajimana* (Pilsbry, 1904)も BISMaL と収蔵資料 DB (*hahajimama* と誤入力)に出て来た(WoRMS で有効)。BISMaL では有効でも WoRMS では消えていることから、ケシマツムシ *Zafra sinensis* (Sowerby, 1894)を

ハハジマノミニナ *Zafra hahajimana* (Pilsbry, 1904)に変更した。ホソシワノミニナ *Zafra nanisca* (Hervier, 1899)には、BISMaL では種小名が異なる *Zafra peasei* (Martens & Langkavel, 1871)が適用されていたが、WoRMS では属名も異なる *Seminella peasei* (Martens & Langkavel, 1871)が有効学名であった。ウネナシノミニナ *Zafra dautzenbergi* (Hervier, 1899)には、BISMaL では種小名が異なる、原記載のウネナシノイニア *Zafra polita* G. Nevill & H. Nevill, 1875 が適用されていたが(ウネナシノイニアは、ウネナシノミニナの誤入力)、WoRMS では属名も異なる *Ascalista polita* (G. Nevill & H. Nevill, 1875)が有効学名であった。

サメハダムギガイ *Zafra lifuana* (Hervier, 1899)は BISMaL と一致したが、WoRMS に掲載情報がなく、WMSDB の曖昧検索で原記載の *Columbella lifuana* R. P. J. Hervier, 1899 がシノニムで出て来て(*lifuana* は誤入力)、*Zafra striatula* (R. W. Dunker, 1871)が適用されていた(この学名は WoRMS でも有効)。アラレガイ *Niotha variegata* (A. Adams, 1852)は BISMaL や WoRMS に和名も学名もなかったが、WMSDB では属名が異なる *Nassa variegata* A. Adams, 1852 がシノニムで出て来て、属名も種小名も異なる *Nassarius conoidalis* (G. P. Deshayes, 1832)が現在の有効学名であった(この学名は WoRMS や BISMaL でも有効)。リュウキュウムシロ *Zeuxis margaritifera* (Dunker, 1847)は BISMaL ではシノニムとされ、属名と種小名の語尾が異なる *Nassarius margaritifera* (Dunker, 1847)が適用されていた。この学名は WoRMS ではシノニムになっていて、種小名の語尾が異なる *Nassarius margaritifera* (Dunker, 1847)が有効学名であった。ホソムシロ *Allonassa eximius* (H. Adams, 1872)は、WoRMS の曖昧検索で *Allanassa eximia* (H. Adams, 1872)がシノニムで出て来て(*Allonassa* と *Adamus* は誤入力で、*eximius* は語尾変化の間違い)、属名が異なり、種小名が語尾変化した *Nassarius eximius* (H. Adams, 1872)が有効学名であった。

隣り合わせで入っているカミオボラ *Volutopsius middendorffi* (Dall, 1891)とチャイロカミオボラ *Volutopsion castaneus* (Mörch, 1858)は、属名の語尾が異なっていた。BISMaL や WoRMS で前者は有効であったが、BISMaL では後者に属名の語尾が異なる *Volutopsius castaneus* (Mörch, 1858)が適用されていた。この属名は WoRMS ではシノニムになっていて、属名はそのままで種小名の語尾が異なる *Volutopsion castaneum* (Mörch, 1858)が適用されていた。タテゴトナシボラ *Pyrolofus deformis harpa* (Mörch, 1858)は、BISMaL や WoRMS では検索できず、WMSDB の曖昧検索で *Pyrolofus deformis harpa* O. A. L. Mörch, 1857 がシノニムとして出て来た(*Pyrolofus* と *Morch* は誤入力)。WMSDB では亜種から種へと昇格した *Pyrolofus harpa* (O. A. L. Mörch, 1857)が適用されていたが、WoRMS では命名年が 1858 になっていた。チビイトマキツムバイ *Colus (Aulacofusus) sp.*の和名を Google 検索すると、新種記載された *Calagrassor analogus* Fraussen, Chino & Stahlshmidt, 2017 が出来た(微小貝データベース, 2019c: WoRMS でも有効)。サフランツムバイ *Plicifusus croceus* (Dall, 1907)の和名は BISMaL になく、Google の引用符検索でヒットするのは収蔵資料 DB だけであった。学名で検索すると、BISMaL ではサフランシワバイの和名が与えられていた。加藤目録にサフランツムバイの記述が見られるので、ここでの記述ミスと断言できる。ミドリツムバイ *Habevoltopsius verkruzeni* (Kobelt, 1876)は BISMaL や WoRMS では検索できず、WMSDB の曖昧検索で *Buccinum verkruzeni* W. Kobelt, 1882 が出来たが、貝殻の形状が異なっていた。奥谷(2000)にミドリツムバイ *Fusivoltopsius verkruzeni* (Kobelt, 1876)とあり、この学名で検索可能な DB はなかったが、Google 検索で Hasegawa (2009)がヒットし、Midori-tsumu-bai は *Plicifusus aurantius* (Dall, 1907)に変更されていた。この学名に BISMaL ではニクイロツムバイの和名が付いていたが、BISMaL や

WoRMS ではシノニムになっていて、種小名が異なる *Plicifusus rhyssus* (Dall, 1907)が適用されていた(WMSDB でも有効)。BISMaL では、この学名にネジケシワバイの和名が与えられているが、ミドリツムバイはシノニムに掲載されておらず、今回が初めての指摘になる可能性が高い。

ロヂウムバイ *Buccinum elatia rhodium* Dall, 1919 は BISMaL では和名検索できず、学名検索でロヂウムバイ *Buccinum rhodium* Dall, 1919 が出て来た。WoRMS では、種小名が異なる *Buccinum scalariforme* Møller, 1842 が有効学名であった。収蔵資料 DB にはチヂワエゾバイ *Buccinum elatior elatior* (Middendorff, 1849)とチリメンエゾバイ *Buccinum scalariformis* Beck in Müller, 1842 が存在し、両者の学名にも *Buccinum scalariforme* Møller, 1842 が適用されていた。チヂワエゾバイもチリメンエゾバイも BISMaL になく、ロヂウムバイ *Buccinum scalariforme* Møller, 1842 を有効な和名・学名と判断した。アデヤイカエゾバイ *Buccinum concinnum* Tiba, 1980 は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS で「Invalid: junior homonym of *Buccinum concinnum* Dillwyn, 1817, and *B. concinnum* C. B. Adams, 1848; *Buccinum boucheti* is a replacement name」と出て来て、*Buccinum kashimanum* Okutani, 1964 が有効学名であった(BISMaL では、カシマナダバイの和名が与えられていた)。ツバイ *Buccinum tsubai* Kuroda in Teramachi, 1933 は BISMaL と一致したが、WoRMS と WMSDB では命名者名が異なっていた(*Buccinum tsubai* Kuroda & Kikuchi, 1933)。ヒメシライトマキ *Buccinum nipponense* Dall, 1907 は種小名の誤入力で、BISMaL や WoRMS では *nipponense* が正しい綴りであった。

エゾイソニナ *Searlesia fuscolabiata* (Smith, 1874)は BISMaL では和名が追加され、種小名が異なるトバソイソニナ/エゾイソニナ *Searlesia modesta* (Gould, 1860)が有効とされていた。この学名は WoRMS になく、WMSDB ではシノニムとされ、属名も種小名も

異なる *Lirabuccinum fuscolabiatum* (E. A. Smith, 1875)が有効とされていた(WoRMS でも有効)。クマモスソガイ *Volutharpa ainos* Kuroda & Kinoshita, 1956 は BISMaL と一致したが、この学名は WoRMS ではシノニムとされ、種から亜種へと降格した *Volutharpa perryi ainos* Kuroda & Kinoshita, 1956 が適用されていた。オニニシ *Hemifusus crassicaudus* (Philippi, 1848)は、BISMaL では *Hemifusus crassicaudus* (Philippi, 1848)がシノニムで(*crassicaudus* は *crassicaudus* の誤入力)、種小名が異なる *Hemifusus crassicauda* (Philippi, 1848)が適用されていた。WoRMS では *Hemifusus crassicaudus* [sic] (misspelling)と表示され、種小名の語尾と命名年が異なる *Hemifusus crassicauda* (Philippi, 1849)が有効学名であった(BISMaL の *crassicauda* も誤入力?)。

コウシフタマンジ *Turritomella candida* (Yokoyama, 1926)は肥後・後藤(1993)と一致した。奥谷(2000)と BISMaL では、属名が変更された *Oenopota candida* (Yokoyama, 1926)の学名にサドフタマンジの和名が記載され、コウシフタマンジの和名に *Propebela exquisita* Bartsch, 1941 の学名が記載されていた(両種の学名は WoRMS でも有効)。収蔵資料 DB にサドフタマンジの和名はなく、コウシフタマンジ *Propebela exquisita* Bartsch, 1941 を有効な和名・学名と判断した。ニクイロマンジ(学名未入力)は BISMaL になく、鹿間(1964)にニクイロマンジ *Obesostoma schantarica* Middendorff の記述があった。WoRMS では *Obesotoma schantarica* (Middendorff, 1849)がシノニムになっていて(*Obesostoma* は *Obesotoma* の誤入力)、*Oenopota schantaricum* (Middendorff, 1849)が適用されていた。収蔵されている標本で再同定をおこなったところ、殻の形状と縦肋の細かさ、及び千葉県銚子市という採集地情報から、ヌノメフタマンジ *Curtitoma violacea* (Mighels & C. B. Adams, 1842)という種が、標本に一番近いと判断した(和名は BISMaL に、命名者名 C. B. Adams を含む学名は WoRMS に従った)。

オニアサリ *Protothaca (Notochione) jodoensis*

(Lischke, 1874)の学名と同じと思われる、ヌノメアサリ *Protothaca jodoensis* (Lischke, 1874)が入力されていた。BISMaL では、オニアサリには*Protothaca jodoensis* (Lischke, 1874)が適用され(ヌノメアサリと入力されている種と同じ学名)、ヌノメアサリには別の学名 *Protothaca euglypta* (Sowerby, 1914)が適用されていた[標本の形状が異なるので、ヌノメアサリ *Protothaca jodoensis* (Lischke, 1874)は学名の誤入力と判断した]。WoRMS では、更に属名が異なる *Leukoma jodoensis* (Lischke, 1874)と、命名者名が明確化された *Leukoma euglypta* (G. B. Sowerby III, 1914)が、それぞれ適用されていた。*Zeuxis olivaceus* (Bruguère, 1789)と入力されている学名 2 点には、クリイロムシロ 1 点とクリイロヨウバイ 1 点の 2 つの和名が入力されていた。後者の和名は、一般的にクリイロヨウバイが使用されている。前者は肥後・後藤(1993)と奥谷(2000)で使用され、後者は菱田(2000)で使用されていた。BISMaL では属名が異なる *Nassarius olivaceus* (Bruguère, 1789)が有効で、クリイロムシロ/クリイロヨウバイの 2 つの和名が併記されていた(命名者名に Bruguère と Bruguère の違いはあるが、S-Net/GBIF への登録では Bruguère)。

*Lienardia roseotincta* (Montrouzier, 1872)と *Lienardia* (*Lienardia*) *roseotincta* (Montrouzier, 1872)は、命名者名の綴りは微妙に違うが同じ学名で、それぞれバライロアラボリクチキレツブとバライロフタナシヤジクの和名が入力されていた。BISMaL や WoRMS では、バライロフタナシヤジク *Lienardia roseotincta* (Montrouzier in Souverbie & Montrouzier, 1872)が適用されていた(BISMaL にバライロアラボリクチキレツブの和名はなかったが、Google の引用符検索を掛けると多数ヒットし、この和名はバライロフタナシヤジクの別名であった)。WMSDB に従い、バライロフタナシヤジク *Lienardia roseotincta* (Montrouzier, 1872)を有効な和名・学名と判断した。

*Dosinorbis* (*Phacosoma*) *pubescens* (Philippi, 1847)と

いう学名を持つ種 2 点には、ヒメカガミとタマカガミの 2 つの和名が入力されていた。BISMaL では、ヒメカガミという和名は存在しなかったが(採集地は愛知県安楽沖)、タマカガミ *Dosinia subalata* E. A. Smith, 1916 は存在した。WoRMS によると、*Dosinorbis* から *Dosinia* への属名変更がなされていて、この属に *Dosinia pubescens* (Philippi, 1847)という学名を見つけた。この学名は WMSDB にも存在し、ヒメカガミと同じ愛知県が分布域になっていた。*Dosinia pubescens* で Google の引用符検索をかけると、ヒメカガミがヒットした(微小貝データベース, 2018a)。収蔵資料 DB ではヒメカガミの学名でタマカガミの和名が入力されていたことになり、ヒメカガミ *Dosinia pubescens* (Philippi, 1847)とタマカガミ *Dosinia subalata* E. A. Smith, 1916 を有効な和名・学名と判断した。

オオアシヤガイ *Granata sulcifera* Lamarck, 1820 の学名は、BISMaL では原記載の *Granata sulcifera* Lamarck, 1822 が出て来て、単なる命名年の間違いかと思われたが、WoRMS では *Granata sulcifera* (Lamarck, 1822)となっていた。WoRMS では原記載が *Stomatella sulcifera* Lamarck, 1822 になっていて、属名が *Stomatella* から *Granata* へと移行していることから、*Granata sulcifera* (Lamarck, 1822)を有効学名と判断した。ヒラコマ *Calliostoma haliarchus* (Melvill, 1889)は BISMaL と同じだったが、WoRMS では属名が異なる *Tristichotrochus haliarchus* (Melvill, 1889)が適用されていた。キキョウウラウズガイ *Astraea* (*Bellastraea*) *kesteveni* (Iredale, 1924)は、WoRMS に *Bellastraea kesteveni* Iredale, 1924 というシノニムが見つかり、現在は種小名も変更された *Bellastraea squamifera* (Koch, 1844)が有効学名とされている。マツムシガイ *Pyrene* (*Testudinaria*) *tylerae* (Griffith & Pigeon, 1834)は、BISMaL では亜属として入力されている *Testudinaria* が種小名になっていて、属名が異なり、亜種から種へと昇格した、和名なし *Pardalinops testudinaria* (Link, 1807)が現在の有効学名であった。

変わった間違いとしては、ヒトハサンゴヤドリという和名が入力されている種の命名年が複数年に股がって記載されていることで[*Quoyula madreporara* (Sowerby, 1820–24)], これは肥後・後藤(1993)と一致した。BISMaL や WoRMS では、種小名が語尾変化した *Quoyula madreporarum* (Sowerby, 1832)がシノニムとされ、属名も種小名も変更された *Coralliophila monodonta* (Blainville, 1832)が有効学名であった。いずれにしても、収蔵資料 DB の学名は種小名の語尾が女性形になっていて、しかも命名年が分類学では余り見ない書き方であった。奥谷(2000)では、ヒトハサンゴヤドリの学名が *Coralliophila madreporaria* (Sowerby, 1820–24)になっていた。マルフトコロ *Euplica turturina* Duclos, 1835 には、BISMaL では命名者名と命名年が異なる *Euplica turturina* (Lamarck, 1822 in 1815–22)が適用されていたが、WoRMS では *Euplica turturina* (Lamarck, 1822)になっていた(原記載は *Colombella turturina* Lamarck, 1822)。ムシエビ *Pyrene flava* (Bruguière, 1789 in 1789–1816)も BISMaL と一致し、WoRMS では「in 1789–1816」が除外されていた(原記載は *Buccinum flavum* Bruguière, 1789)。カムロガイ *Sundamitrella impolita* (Sowerby, G. B. III, 1844 in 1842–87)は、WMSDB では属名と命名者名が異なる *Mitrella impolita* (G. B. II Sowerby, 1844)が適用されていたが、WoRMS では *Mitrella impolita* (G. B. Sowerby I, 1844)が有効学名であった(原記載は *Columbella impolita* G. B. Sowerby I, 1844 で、二世でも三世でもなかった)。

カンムリエビス *Turbo coronatus* Gmelin, 1791 の和名は BISMaL になく、BISMaL や WoRMS の学名検索で *Lunella coronata* (Gmelin, 1791)のシノニムとして出て来た(BISMaL ではカンギクの和名が与えられている)。収蔵資料 DB に、カンギク *Lunella coronata granurata* (Gmelin, 1791)と入力されている亜種が見つかった。そのため、著者らは当初、原記載のカンムリエビス *Turbo coronatus* Gmelin, 1791 から和名と

属名が変更され、種小名の語尾が変化して、カンギク *Lunella coronata* (Gmelin, 1791)になったと考えた。しかし、カンギクの採集地が奄美大島・沖縄になっているのに対し、カンムリエビスの採集地は Masirah Is., Oman になっていて、そのため日本近海産を対象とする BISMaL に和名がないのだろうとも考えた。収蔵資料 DB では、外国産カンムリエビスの和名にカンギクの学名 *Lunella coronata* (Gmelin, 1791)を付けていて、そもそもの学名が間違っている可能性が残されていた。WMSDB で *Lunella coronata* の分布域を見ると、ヨーロッパからアフリカ・中東を経てアジアまで広範囲に生息していた(Japan も Oman も DB に記録あり)。以上の結果から、カンムリエビス *Turbo coronatus* Gmelin, 1791 と入力されている種は和名も学名も消え、現在はカンギク *Lunella coronata* (Gmelin, 1791)が有効な種であると結論付けた。

フクレギンエビス *Ginebis convexiuscula tosana* Shikama, 1962 は肥後・後藤(1993)と一致したが、BISMaL では種小名と亜種小名が変更され、*Ginebis argenteonitens convexiuscula* (Yokoyama, 1920)になっていた。WoRMS で *Ginebis* 属の種や亜種を調べると、*Ginebis convexiuscula* (Yokoyama, 1920)がシノニムとして出て来て、現在は *Ginebis argenteonitens* (Lischke, 1872)が有効学名であった。この学名のシノニムとして *Lischkeia convexiuscula tosana* Shikama, 1962 が存在し、これは収蔵資料 DB の学名から属名だけ変更されたものであった。肥後・後藤(1993)では学名の整理をしている形跡が見られることから、本来なら原記載の *Lischkeia convexiuscula tosana* Shikama, 1962 とすべきところを、属名だけ *Ginebis* に変更してしまったのだろうと推測される。ヒラセギンエビス *Ginebis argenteonitens hirasei* Is. Taki & Otsuka, 1943 も、肥後・後藤(1993)と一致した。BISMaL では和名も学名も有効だったが、WoRMS 検索ではヒットせず、*Ginebis argenteonitens* (Lischke, 1872)のシノニムとして *Turcicula argenteonitens hirasei* Taki & Otsuka, 1943

が見つかった。これも肥後・後藤(1993)が、原記載の属名 *Turcicula* を *Ginebis* に変え、ヒラセギンエビス *Ginebis argenteonitens hirasei* Is. Taki & Otsuka, 1943 と原記載偽装したものと推測される。ギンエビス *Ginebis argenteonitens argenteonitens* (Lischke, 1872)、フクレギンエビス *Ginebis convexiuscula tosana* Shikama, 1962、及びヒラセギンエビス *Ginebis argenteonitens hirasei* Is. Taki & Otsuka, 1943 と入力されている亜種を、独立種のギンエビス *Ginebis argenteonitens* (Lischke, 1872)に変更した。

*Bolma guttata caledonicus* と入力されている亜種の学名や和名ニューカレドニアカンスが Google の引用符検索でヒットするのは、収蔵資料 DB と加藤目録の2件だけであった(この2つは、基本的に同じものである)。BISMaL では、キンウチカンス *Bolma guttata* (A. Adams, 1864)という種が、カンスガイ類のオリジナルとされている(WoRMS の原記載では、命名年が1863)。WoRMS では、この種の亜種がシノニムになった2つの独立種の学名[*Bolma bathyraphis* (E. A. Smith, 1899); *Bolma millegranosa* (Kuroda & Habe in Habe, 1958)]が他に挙げられている。BISMaL では前者に和名はなく、後者はカンスガイになっていた(命名者名を Kuroda & Habe, 1958 に明確化)。*Bolma bathyraphis* で Google 検索を掛けると、ナンヨウカンス(仮称) *Bolma guttata bathyraphis* E. A. Smith, 1899 と記載されている亜種が見つかった(微小貝データベース, 2018b)。この亜種はニューカレドニア原産で、カンスガイのニューカレドニア型と考えられることから、ナンヨウカンス(仮称) *Bolma bathyraphis* (E. A. Smith, 1899)を有効な和名・学名と判断した。

ヤセリンボウ *Guildfordia yokadelicata* Habe & Okutani, 1983 は、BISMaL でも WoRMS でも学名が検索できなかった。WoRMS で表示される *Guildfordia* 属に、この学名に近い学名 *Guildfordia delicata* Habe & Okutani, 1983 がシノニムとして見つかり、有効学名は *Guildfordia yoka* Jousseume, 1899 になっていた。

この学名には *Guildfordia yoka delicata* Habe & Okutani, 1983 という、シノニムとしての亜種が存在していた。収蔵資料 DB では、種小名 *yoka* と亜種小名 *delicata* が連続して入力されているため、ひとつの種小名 *yokadelicata* として取り扱われていたことが、検索に引っ掛からない原因であった。*Guildfordia yoka* Jousseume, 1899 という学名は BISMaL にも存在し、ハリナガリンボウという和名が与えられている(BISMaL では、この種の命名年は1888になっているが、WoRMS の原記載によると、1899 が正しい命名年である)。以上の結果から、ヤセリンボウ *Guildfordia yokadelicata* Habe & Okutani, 1983 と入力されている種(実際は亜種)をハリナガリンボウ *Guildfordia yoka* Jousseume, 1899 に変更した。

アカマダロサンショウガイモドキ *Tallorbis roseolus* G & H. Nevill, 1868 は、BISMaL に和名も学名も見当たらず、WoRMS に *Tallorbis roseola* G. Nevill & H. Nevill, 1869 が見つかった。アカマダロサンショウガイモドキを Google の引用符検索に掛けると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけという、お決まりのパターンであった。アカマダロという響きに違和感を覚え、アカマダラサンショウガイモドキを Google の引用符検索に掛けると、加藤目録だけがヒットした。この目録は基本的に収蔵資料DBと同じものなので、アカマダロサンショウガイモドキは担当者による誤入力であることが確定した。他に和名は見当たらず、アカマダロサンショウガイモドキ *Tallorbis roseolus* G & H. Nevill, 1868 を、和名なし *Tallorbis roseola* G. Nevill & H. Nevill, 1869 に変更した。

ベニバイ *Eotricolia megastoma* (Pilsbry, 1895)を BISMaL で和名検索すると、*Tricolia variabilis* (Pease, 1860)という別の学名が出て来た。前者は肥後・後藤(1993)と、後者は奥谷(2000)と一致した。著者らは当初、属名も種小名も変更されたと考えたが、BISMaL では和名のない *Tricolia megastoma* (Pilsbry, 1895)が生きていた。和名優先なら前者の学名が正しく、学

名優先なら後者の学名が正しいことになる。WoRMS 検索を掛けると、*Tricolia variabilis* (Pease, 1861)が、現在の有効学名 *Hiloa variabilis* (Pease, 1861)のシノニムとして出て来た(原記載の命名年は 1860 ではなく 1861)。WoRMS では *Tricolia* 属(87 matching records)に *Tricolia megastoma* (Pilsbry, 1895)という学名はなく、*Eotricolia* という属名もなかった。以上の結果から、ベニバイ *Eotricolia megastoma* (Pilsbry, 1895)の学名を変更し、ベニバイ *Hiloa variabilis* (Pease, 1861)を有効な和名・学名と結論付けた。コシタカベニバイ *Eotricolia oligomphala* (Pilsbry, 1895)を BISMAL で検索したが、和名も学名も見つからなかった。この学名は WoRMS にもなかったが、*Tricolia oligomphala* (Pilsbry, 1895)が *Tricolia variabilis* (Pease, 1861)のシノニムとして出て来た。現在はベニバイと同じ学名 *Hiloa variabilis* (Pease, 1861)がコシタカベニバイに与えられ、コシタカベニバイの和名が消えていることになる[奥谷(2000)では「ベニバイとコシタカベニバイは同じ種で、前者がオス、後者がメスの性的二型の関係にある」と説明されている]。

ホタルガイ *Olivella japonica* Pilsbry, 1895 は BISMAL と一致したが、WoRMS では *Olivella japonica* Pilsbry, 1910 がシノニムとされ(原記載は *Olivella fortunei* var. *japonica* Pilsbry, 1910)、種小名が異なる *Olivella mandarina* (Duclos, 1835)が適用されていた。ハナアヤメ *Olivella signata* Lischke, 1869 (マクラガイ科 *Olividae*)に関しては、BISMAL でハナアヤメを検索すると和名も学名もヒットせず、別の科のハナアヤメケボリ *Crenavolva striatula* (Sowerby I, 1828) (ウミウサギガイ科 *Ovulidae*)が出て来てしまう[肥後・後藤(1993)には両方ある]。WoRMS や WMSDB では、*Olivella signata* (Lischke, 1869)も *Crenavolva striatula* (G. B. Sowerby I, 1828)も有効学名であった。標本に当たって調べたところ、マクラガイ科の貝殻で、このことから和名なし(旧ハナアヤメ) *Olivella signata* (Lischke, 1869)を有効な和名・学名と結論付けた。ホ

ザキリュウグウボタル *Ancillus apicalis* Kira, 1959 には、BISMAL では命名者名と命名年が異なる原記載 *Ancillus apicalis* Ninomiya, 1988 が適用されていた。WoRMS では、属名が変更された *Turrancilla apicalis* (Ninomiya, 1988)が有効学名であった。

ルリグチマクラ *Oliva (Neocylindrus) tessellata* Lamarck, 1811 は BISMAL ではルチグリマクラ *Oliva tessellate* Lamarck, 1811 と記載され(*tessellata* とルチグリマクラは誤入力)、WoRMS では種小名が異なる *Oliva guttata* Fischer von Waldheim, 1808 が適用されていた。学名が同じと思われる、サツマビナ *Oliva annulata* Gmelin, 1798、及びニクイロマクラガイ *Oliva (Neocylindrus) annulata* (Gmelin, 1791)と入力されている種がある[ニクイロマクラの和名は肥後・後藤(1993)にある]。奥谷(2000)と BISMAL ではサツマビナ *Oliva annulata* Gmelin, 1789 が適用されていたが、WoRMS では命名年が異なる *Oliva annulata* (Gmelin, 1791)が有効学名であった(原記載は *Voluta annulata* Gmelin, 1791)。収蔵資料 DB にサワビナ *Oliva (Annulatoliva) annulata* forma *carnicolor* Dau t zenberg, 1927 と入力されている品種があり(Dau t zenberg は t が全角入力)、これも肥後・後藤(1993)と一致することから、サツマビナ *Oliva annulata* Gmelin, 1789 を適用した。オオヒナマクラ *Oliva (Galeola) carneola iricfoma* Dautzenberg, 1927 はパズルのようで、*Oliva carneola iricfoma* では、どの DB でも検索不能であった(Google 検索では収蔵資料 DB のみヒットした)。WMSDB で、属名 *Oliva* と命名者名 Dautzenberg を入れて検索すると、一番近い亜種小名を持つのは *Oliva carneola trichroma* P. Dautzenberg, 1927 であった(*iricfoma* は加藤目録の誤入力。*trichroma* と比較すると、t が i に、h が f に変わっただけの誤入力で、まるで異なる単語に変わっていた)。収蔵資料 DB の画像と比較した結果は、*Oliva carneola trichroma* Dautzenberg, 1927 と同じ物であった。サラサマクラ *Oliva (Acutoliva) duclosi lentiginosa* Reeve, 1850 は、



BISMaL や WoRMS では検索不能で、WMSDB では種小名が異なる *Oliva jaspidea lentiginosa* L. A. Reeve, 1850 が出て来た。WoRMS では *Oliva jaspidea* Duclos, 1835 も *Oliva lentiginosa* Reeve, 1850 もシノニムになっていて、*Oliva esiodina* Duclos, 1844 が有効学名であった(前者のシノニムには「invalid: junior secondary homonym of *Voluta jaspidea* Gmelin, 1791; *Oliva duclosi* is a replacement name」とある)。

*Mitra (Subcancilla) subcata* Swainson & Sowerby, 1825 と学名だけ入力されている種は種小名と命名者名の誤入力で、WoRMS では *Mitra sulcata* Swainson, 1825 がシノニムとされ、亜属から属に格上げされた *Subcancilla sulcata* (Swainson, 1825) が有効学名であった。シロフヤタテ *Phaeomitra fasciolaris* (Deshayes in Laborde & Linat, 1834) には、BISMaL では属名が異なる原記載 *Mitra fasciolaris* Deshayes in Laborde & Linat, 1834 が適用されていたが、WoRMS では属名が変更され、命名者名が明確化された *Strigatella fasciolaris* (Deshayes, 1834) が有効学名であった。クリイロフデガイ *Phaeomitra coffea* (Schbert & Wagner, 1829) には、奥谷(2000)と BISMaL ではクリイロフデ *Mitra coffea* Schbert & Wagner, 1829 が適用されていたが(Schbert は Schubert の誤入力)、WoRMS では属名が変更され、命名者名が明確化された *Strigatella coffea* (Schubert & J. A. Wagner, 1829) が有効学名であった。チュウカフデ *Vicimitra chinensis* Griffith & Pidgeon, 1834 には、BISMaL では *Mitra chinensis* Griffith & Pidgeon, 1834 が適用されていたが、WoRMS では属名と命名者名が異なる *Isara chinensis* (Gray, 1834) が有効学名であった(原記載は *Mitra chinensis* Gray in Griffith & Pidgeon, 1834)。ベッコウフデ *Nebularia ferruginea* (Lamarck, 1811) は BISMaL ではシノニムになっていて、属名が異なる原記載 *Mitra ferruginea* Lamarck, 1811 が適用されていたが、WoRMS では収蔵資料 DB と有効学名が同じであった(BISMaL の原記載をシノニムにしている)。キイロフデ *Strigatella impressa*

(Antor, 1939) は、WMSDB では *Strigatella impressa* H. E. Anton, 1839 がシノニムで(Antor は誤入力)、種小名が異なる *Strigatella pellisserpentis* L. A. Reeve, 1844 が適用されていた。WoRMS では *Strigatella pellisserpentis* (Reeve, 1844) がシノニムで、属名が異なる *Nebularia pellisserpentis* (Reeve, 1844) が有効学名であった。

ズングリチョウチンフデ *Imbricaria dactyloidea* Anton, 1834 は、BISMaL や WoRMS では和名も学名も検索できず、WMSDB で命名年が異なる *Imbricaria dactyloidea* H. E. Anton, 1838 がシノニムで出て来て、*Imbricaria olivaeformis* W. J. Swainson, 1821 が適用されていた。収蔵資料 DB にマクラフデ *Imbricaria olivaeformis* (Swainson, 1821) があり、これは BISMaL と一致した。WoRMS では、この学名がシノニムとされ、属名が異なる *Scabricola olivaeformis* (Swainson, 1821) が有効学名であった。これら2つの種をマクラフデ *Scabricola olivaeformis* (Swainson, 1821) に変更した。ヤグラフデ *Scabricola yagurai* (Kira, 1959) には、BISMaL では種小名が異なる *Scabricola interlirata* (Reeve, 1844) が適用されていたが、WoRMS では属名も異なる *Imbricaria interlirata* (Reeve, 1844) が適用されていた。コガラシフデ *Subcancilla annulata* (Reeve, 1844) は WoRMS ではシノニムとされ、属名が異なる *Imbricaria annulata* (Reeve, 1844) が有効学名であった(BISMaL では、コガラシフデが有効和名)。

ベニオトメフデガイの採集地は伊豆大島だったが、和名は BISMaL になく、*Mitropifex* 属から変更された *Vexillum* 属にも *subguablratus* の種小名はなかった(Google で *Mitropifex subguablratus* を引用符検索すると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけであった)。WoRMS でも *Vexillum* 属に含まれる 816 matching records に *subguablratus* の種小名は見つからず、最も似ている種小名の学名は *Vexillum subquadratum* (G. B. Sowerby II, 1874) であった。*Vexillum subquadratum* で Google の引用符検索を掛けたが、和名は見当たらなかった。この種の分布域は「紅海から熱帯インド太

平洋を経てポリネシアとハワイまで(from the Red Sea through the tropical Indo-Pacific to Polynesia and Hawaii)」という記述があり(Cernohorsky, 1965)、採集地の伊豆大島が分布域に含まれるのかどうか定かではなかったが、WMSDBにJapanの記録が存在した。これらの結果から、ベニオトメフデガイ *Mitropifex subguabrafus* の学名を *Vexillum subquadratum* (G. B. Sowerby II, 1874)に変更した。

カノミノムシガイ *Vexillum sanguisugum* やカノコシボリミノムシ *Vexillum sanguisuga* (Linnaeus, 1758)の和名はBISMaLになかったが、後者と同じ学名で、カノミノムシの和名を持つ種が存在した。カノミノムシ *Vexillum sanguisuga* (Linnaeus, 1758)を有効な和名・学名と判断した(*Vexillum sanguisugum* は、種小名の語尾変化間違い)。同じ学名で、命名者名と命名年が異なる *Vexillum plicarium* (Linnaeus, 1758)にはオオミノムシが、*Vexillum plicarium* (Sowerby, 1874)にはオオミノムシガイが適用されていた。BISMaLでオオミノムシを検索すると、前者と同じ学名が出て来た。WoRMSで*Vexillum plicarium*を検索しても前者と同じ学名で、シノニムの変遷にSowerby, 1874はなかった。

コビトマメオトメ *Pusia hanleyi* (Dohrn, 1861)は、BISMaLやWoRMSでは和名も学名も検索できず、WMSDBでは属名と命名年が異なる *Vexillum hanleyi* W. L. H. Dohrn, 1862がシノニムになっていて、更に属名と種小名が異なる *Atlantilux exigua* (C. B. Adams, 1845)が有効学名であった(この学名はWoRMSでも有効)。イトマキヒタチオビ *Fulgoraria* (*Fulgoraria*) *rupestris hamillei* (Crosse, 1869)には、BISMaLでは亜属が取れた学名が適用されていたが、WoRMSにはなかった。WMSDBで検索すると、亜種から種へと格上げされた *Fulgoraria hamillei* (J. C. H. Crosse, 1869)が出て来て、この学名はWoRMSでも有効であった。ホンヒタチオビ *Nipponomelon prevostiana* (Crosse, 1878)には、BISMaLでは属名が異なる、和名

なし *Fulgoraria prevostiana* (Cross, 1878)が適用されていたが、この学名はWoRMSではシノニムになっていて、種から亜種へと降格した *Fulgoraria megaspira prevostiana* (Crosse, 1878)が有効学名であった。ツヤヒタチオビ *Musashia clara* (Smith, 1938)には、BISMaLでは属名と命名者名・命名年が異なる、和名なし *Fulgoraria clara* (Sowerby, 1844)が適用されていたが、WoRMSでは命名者名が明確化され、更に命名年が異なる *Fulgoraria clara* (G. B. Sowerby III, 1914)が有効学名であった。*undulata angasi* と、学名だけ入力されている種は、どのDBでも検索不能であったが、Googleのsuggestion機能で *amoria undulata angasi* が示唆された。属名が抜けていると考え、*undulata angasi* は種小名と亜種小名の可能性が高い。WMSDBでは *Amoria undulata angasii* (G. B. II Sowerby, 1864)が適用されていたが、WoRMSでは原記載の *Voluta angasii* G. B. Sowerby II, 1864がシノニムになっていて、*Amoria undulata* (Lamarck, 1804)が有効学名であった。収蔵資料DBでは、この学名にモクメボラの和名が入っていたが、この和名はBISMaLになかった。和名なし(旧モクメボラ) *Amoria undulata* (Lamarck, 1804)を有効な和名・学名と結論付けた。

ウネシヨクコウラ *Harpa ventricosa* Lamarck, 1816は、WoRMSでは「invalid: junior homonym of *Harpa ventricosa* Lamarck, 1801」になっていて、種小名が異なる原記載 *Harpa cabriti* P. Fischer, 1860が有効学名であった(*Harpa ventricosa* Lamarck, 1801はシノニムで、*Harpa major* Röding, 1798が有効学名であった。BISMaLでは、この学名にシヨクコウラの和名が与えられている)。ウネクチキレ *Brachytoma varicosa* (Reeve, 1843)はBISMaLやWoRMSでは検索できず、WMSDBの曖昧検索で *Inquisitor varicosa* (L. A. Reeve, 1843)が出て来た。WoRMSでは、種小名が語尾変化した *Inquisitor varicosus* (Reeve, 1843)が適用されていた。*Kuroshioturris tigurinaeformis* (Nomura, 1936)と学名だけ入力されている種は、BISMaLやWoRMSで

は検索できず、WMSDB の expanding search と Double Metaphone algorithm で *Turris tigrinaeformis* S. Nomura, 1936 が出て来た(*tigrinaeformis* は誤入力)。メルビルクダマキ *Gemmula (Gemmula) congener cosmoi* (Sykes, 1930)には、BISMaL では亜種から種へと昇格し、命名年が 100 年も異なる *Gemmula cosmoi* (Sykes, 1830) が適用されていたが、WoRMS では命名年が 1930 になっていた(原記載は *Turris cosmoi* Sykes, 1930)。カマクライグチ *Comitas kamakurana* (Pilsbry, 1875)は BISMaL と一致したが、WoRMS では命名年が 1895 になっていた(原記載は *Pleurotoma kamakurana* Pilsbry, 1895)。テンジククダマキ *Cochlespira pulchella pulcherrissima* (Kuroda, 1959)と入力されている亜種は、BISMaL や WoRMS では和名も学名も検索できなかったが、WMSDB では命名者名と命名年が異なる *Cochlespira pulchella pulcherrissima* (T. Kira, 1955) がシノニムになっていて、亜種から種へと昇格した *Cochlespira pulcherrissima* (T. Kira, 1955)が適用されていた(この学名は WoRMS でも有効)。

ヤゲンイグチ *Aforia circinata* (Dall, 1973)は命名年の間違いで、BISMaL では和名なし *Aforia circinata* (Dall, 1873)が適用されていた(この学名は WoRMS でも有効)。オホーツクイグチ *Aforia sakhalinensis* Bartsch, 1945 は BISMaL になく、WoRMS ではシノニムになっていて、*Aforia circinata* (Dall, 1873)が適用されていた。ヒメヤゲンイグチ *Aforia hondoana* Dall, 1925 も BISMaL になく、WoRMS では *Aforia hondoana* (Dall, 1925)がシノニムとされ(原記載は *Turricula hondoana* Dall, 1925)、*Aforia circinata* (Dall, 1873)が適用されていた。サビヤゲンイグチ *Aforia insignis* (Jeffreys, 1873)は BISMaL と一致したが、WoRMS では命名年が異なる *Aforia insignis* (Jeffreys, 1883)がシノニムとされ、*Aforia circinata* (Dall, 1873)が適用されていた[BISMaL ではサビヤゲンイグチ *Aforia insignis* (Jeffreys, 1873)と和名なし *Aforia circinata* (Dall, 1873)は、別種として並列されている]。以上を総合的に判

断し、これら 4 種の有効な和名・学名をサビヤゲンイグチ *Aforia circinata* (Dall, 1873)と結論付けた。

入力されている 2 つの属名の綴りが似ている場合、それらが 2 属なのか、どちらかが誤入力なのか、はっきりしない。モミジボラ 5 点・ミガキモミジボラ 2 点の和名が入力されているケースでは *Inquisitor* が、チャイロモミジボラ 2 点・ハシナガモミジボラ 1 点・タケノコシャジク 2 点・アラレタケノコシャジク 1 点・スミツキシヤジクガイ 1 点の和名が入力されているケースでは *Inquister* が使用されていた。WoRMS で *Inquisitor* Hedley, 1918 が正しい綴りであることを確認した。*Inquister* Hedley, 1918 の属名は、肥後・後藤(1993)に記載されている(明らかな記載ミスで、この属の総ての種に *Inquister* が使われている)。モミジボラ *Inquisitor jeffreysii* (Smith, 1875)は BISMaL と一致したが、WoRMS では属名が異なる *Funa jeffreysii* (E. A. Smith, 1875)が適用されていた。チャイロモミジボラ *Inquister chocolatus* (E. A. Smith, 1875)の和名と(属名を *Inquisitor* に訂正した)学名は、BISMaL になかった。WoRMS では、種小名の語尾が変化した *Inquisitor chocolata* (E. A. Smith, 1875)が有効とされていた。タケノコシャジク *Inquister flavidula* (Lamarck, 1822)の和名と(属名を *Inquisitor* に訂正した)学名は BISMaL になかったが、WoRMS 検索を掛けると *Inquisitor flavidula* [sic]がヒットした。これは種小名の語尾が不正確(incorrect gender ending)ということで、*Inquisitor flavidulus* (Lamarck, 1822)に変更されていたが、これもシノニムで、現在は *Clathrodrillia flavidula* (Lamarck, 1822)が有効学名であった[*Inquister flavidula* (Lamarck, 1822)は肥後・後藤(1993)と、*Inquisitor flavidula* (Lamarck, 1822)は奥谷(2000)と一致した]。イナズマカノコ *Neritina (Provittoida) coramanderiana* Sowerby, 1832 は肥後・後藤(1993)と一致したが(種小名は *coramanderiana* の誤入力)、奥谷(2000)と BISMaL では、種小名が異なる *Neritina parallela* Roeding, 1798 が適用されていた。WoRMS では *Neritina* 属に

*coromanderiana* も *parallela* もなかったが、WMSDB では *Vittina coromandeliana* (G. B. II Sowerby, 1832)が 出て来た。WoRMS では命名者名と命名年が異なる *Vittina coromandeliana* (G. B. Sowerby I, 1836)がヒットした。奥谷(2000)と BISMAL では原記載の *Neritina parallela* Roeding, 1798 を有効としているが、イナズマカノコ *Vittina coromandeliana* (G. B. Sowerby I, 1836)を現時点での有効な和名・学名と判断した。

カドバリナガニシ *Fusinus spectrum* (Reeve, 1847)は BISMAL と一致したが、WoRMS では属名が異なる *Goniofusinus spectrum* (A. Adams & Reeve, 1848)が有効学名であった(原記載は *Fusus spectrum* A. Adams & Reeve, 1848)。Parent は *Goniofusinus* Vermeij & Snyder, 2018 で、最近の属名変更であった。チゴフデ *Isara typha* (Reeve, 1845)は、WMSDB では *Strigatella typha* L. A. Reeve, 1845 が出来たが、WoRMS では *Strigatella typha* (Reeve, 1845)がシノニムとされ、属名が異なる *Carinomitra typha* (Reeve, 1845)が有効学名であった。Parent は *Carinomitra* Fedosov, Herrmann, Kantor & Bouchet, 2018 で、最近の属名変更であった。ツノイロチョウチンフデ *Imbricaria punctata* (Swainson, 1821)は BISMAL と一致したが、WoRMS では属名が変更され、*Imbricariopsis punctata* (Swainson, 1821)が有効学名であった(Parent は *Imbricariopsis* Fedosov, Herrmann, Kantor & Bouchet, 2018)。

セイロンイモ *Virroconus sponsalis ceylannensis* (Hwass, 1792)に関しては、属名・種小名・亜種小名のどの組み合わせでも検索可能な DB はなく、手始めに *Virroconus* を *Conus* にしてみた。次に、セイロンイモという和名から *ceylannensis* を誤入力と考え、*ceylonensis* にしてみた。WMSDB で *Conus ceylonensis* を検索すると、*Conus ceylonensis* C. H. Hwass in J. G. Bruguière, 1792 がシノニムで出て来て、属名と種小名が異なる *Harmoniconus musicus* (C. H. Hwass in J. G. Bruguière, 1792)が適用されていた。WoRMS では、この学名はシノニムとされ、*Conus musicus* Hwass in

Bruguière, 1792 が有効学名であった[収蔵資料DBに、ガクフイモ *Virroconus musicus* (Hwass, 1792)がある]。サミダレシマミナシ *Stephanoconus princeps lineolatus* (Valenciennes, 1832)は、BISMAL や WoRMS では検索できず、WMSDB では *Conus lineolatus* A. Valenciennes, 1832 がシノニムで出て来て、*Ductoconus princeps* (C. Linnaeus, 1758)が適用されていた。WoRMS では、原記載の *Conus princeps* Linnaeus, 1758 が適用されていた。シシウミナシ *Leptoconus thalassiarculus* (Sowerby, 1834)は、どの DB でも検索できず、*thalassiarculus* を *thalassiarculus* に変えて検索すると、WMSDB で *Virgiconus thalassiarculus* (G. B. II Sowerby, 1834)が出て来た。WoRMS では、命名者名が異なる *Virgiconus thalassiarculus* (G. B. Sowerby I, 1834)がシノニムとされ、*Conus thalassiarculus* G. B. Sowerby I, 1834 が有効学名であった。ユキゲイモ *Daucionus striatellus* (Link, 1807)も、どの DB でも検索できず、*Daucionus* に何らかの入力ミスがあるものと思われた。WMSDB で種小名 *striatellus* と命名者名 Link を入れて検索すると、*Vituliconus striatellus* (J. H. F. Link, 1807)が出て来た。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、*Conus striatellus* Link, 1807 が有効学名であった(*Daucionus* Cotton, 1945 が *Conus* 属のシノニムで、*Daucionus* は *c* が抜けたために検索不能になっていた)。

ユウヤケイモ *Rhizoconus sazanka yoshioi* Azuma, 1973は BISMAL や WoRMS では検索できず、WMSDB では *Kioconus sazanka* (T. Shikama, 1970)が出て来た。この学名は WoRMS ではシノニムで、*Conus martensi* E. A. Smith, 1884 が有効学名であった。オカモトイモ *Rhizoconus okamotoi* (Kuroda & Ito, 1961)も BISMAL や WoRMS では検索できず、WMSDB では属名と種小名が異なる *Calamiconus lischkeanus* (H. C. Weinkauff, 1875)が出て来た。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、*Conus lischkeanus* Weinkauff, 1875 が有効学名であった。スソムラサキイモ *Hermes scabriuscula* (Dillwyn, 1817)も、BISMAL や WoRMS では検索でき

ず、WMSDB では属名と種小名が異なる *Leporiconus coffeae* (J. F. Gmelin, 1791)が出て来た。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、*Conus coffeae* Gmelin, 1791 が適用されていた。ナガシマミナシ *Virgiconus muriculatus* (Sowerby, 1933) (var)は、明らかな命名年の間違いで、BISMaL や WoRMS では検索できず、WMSDB では属名が異なる *Lividoconus muriculatus* (G. B. I Sowerby, 1833)がヒットした。この学名は WoRMS ではシノニムとされ、*Conus muriculatus* G. B. Sowerby I, 1833 が適用されていた。ヒメホウオウイモ *Asprella insculpta* (Kiener, 1845)は、WoRMS の曖昧検索では、種小名の綴りが2つ違うだけで(*ul* と *ri*)、命名者名と命名年が異なる *Asprella inscripta* (Reeve, 1843)がシノニムで出て来た(*Conus inscriptus* Reeve, 1843 が有効学名)。違和感を覚えたので、WMSDB で検索すると、属名と命名年が異なる *Conasprella insculpta* (L. C. Kiener, 1847)が出て来た(この学名は WoRMS でも有効)。ホウライイモ *Endemoconus bayai* (Jousseume, 1872)は BISMaL や WoRMS では検索できず、WMSDB では *Dauciconus boui* (A. J. Da Motta, 1988)が出て来た。種小名は似ているが、他の部分の違いが気になり、*Conus bayai* で検索したが、WMSDB では同じ学名が出て来てしまった。この属名と種小名で WoRMS 検索すると、*Conus bayani* Jousseume, 1872 がヒットした(*bayai* は *bayani* の誤入力)。

コゲチャタケ *Pristiterebra tsuboiana* (Yokoyama, 1922)は、BISMaL や WoRMS では検索できず、WMSDB では Fossil only と表示される。Google でコゲチャタケを検索すると、京都大学総合博物館(2019)の標本備考に「*Terebra* (*Fusoterebra*) *bifrons* Hinds コゲチャダケ」と記載されていた。WMSDB で検索すると、*Pristiterebra bifrons* (R. B. Hinds, 1844)が出て来て(この学名は WoRMS でも有効)、BISMaL ではオオコゲチャタケの和名が与えられていた。ヒモカケセコバイ *Colubraria cumingi* (Dohrn, 1861)は、BISMaL では種小名と命名者名の綴りが異なる *Colubraria*

*cumingii* (Dohn, 1861)が適用されていたが、WoRMS では収蔵資料 DB の学名と同じであった。

同じ学名に見える2つの学名には、コグルマガイ *Psilaxis radiatus* (Röding, 1798)とゴショグルマ *Philippia* (*Psilaxis*) *radiata* (Röding, 1798)の2つの和名が入力されていた。種小名の違いは、属名に引きずられて、男性形と女性形に語尾が変化したものと考えられる。BISMaL では、現在の和名はコグルマで、前者が有効学名であった(この学名は WoRMS でも有効)。コシタカグルマ *Philippia* (*Psilaxis*) *layardi* A. Adams, 1855 も WoRMS では *Psilaxis radiatus* (Röding, 1798)が適用されていて、和名をコグルマに変更した。カゴサンショウガイモドキ *Euchelus* (*Vaceuchelus*) *instrictus* (Gould, 1860)に、BISMaL では *Herpetopoma instricta* (Gould, 1849)が適用され、属名の変更と種小名の語尾変化、及び年号間違いと思われたが、WoRMS では有効学名が *Herpetopoma instrictum* (Gould, 1849)になっていた。BISMaL では、属名変更に伴う種小名の語尾変化が不正確だったことになる(男性形から中性形に変化すべきところを女性形に変化させてしまった)。イボサンショウガイモドキ *Euchelus* (*Vaceuchelus*) *pauperculus* (Lischke, 1872)も、BISMaL では *Herpetopoma pauperculus* (Lischke, 1872)になっていて(種小名の語尾が男性形のまま)、単なる属名変更と思われたが、WoRMS では *Herpetopoma pauperculum* (Lischke, 1872)が適用されていた(種小名の語尾が中性形に変化)。

ヤキイモ *Pionoconus magus* (Linnaeus, 1758)は BISMaL に和名も学名もなく、WoRMS では属名が異なる *Conus magus* Linnaeus, 1758 が有効学名になっていた。この種3点の他に、同じ属名と種小名の7品種(和名なし)が1点ずつ入力されていて、*Pionoconus magus* forma *carinatus* Swainson, 1822 の1品種とは別に、同一種と思われるカリガネヤキイモ *Pionoconus carinatus* (Swainson, 1822)の1点が入力されていた。この種の採集地はフィリピンで、BISMaL や WoRMS

では学名を検索することが出来なかったが、WMSDBでは*Conus carinatus* Swainson, 1822 (シノニム)と*Pionoconus magus* (Linnaeus, 1758) (有効学名)が出て来た。カリガネヤキイモ *Pionoconus carinatus* (Swainson, 1822)は、ヤキイモ *Pionoconus magus* (Linnaeus, 1758)に吸収されてしまったことになるのだが、この学名も WoRMS では無効とされている(*Pionoconus* Mörch, 1852 は、WoRMS では *Conus* Linnaeus, 1758 のシノニムとされ、この属には検索時に 2,967 matching records が表示されていた)。品種が種へと昇格しているケースも少なくないが、前述の和名なし7品種は、WMSDB では *Pionoconus magus* (Linnaeus, 1758)に吸収されている。以上を総合的に判断すると、*Conus magus* Linnaeus, 1758 が現在の有効学名と考えられる。

クリイロカメガイ *Cavolinia uncinata* (Rang, 1829) は BISMAL と一致したが、WoRMS では命名者名と命名年が異なっていて、*Cavolinia uncinata* (d'Orbigny, 1835)が適用されていた(原記載は *Hyalaea uncinata* d'Orbigny, 1835)。この学名のシノニムとして *Hyalea uncinata* Rang, 1829 が記載されていて、*Hyalea* [sic] (incorrect subsequent spelling of *Hyalaea* Lamarck, 1799) が命名者名と命名年が異なる理由であった。ツボウキヅツ *Cuvierina columnella* forma *urceolaris* (Moerch, 1852)は、BISMAL では品種から亜種へと昇格し、命名年が異なる *Cuvierina columnella urceolaris* (Mörch, 1850)が適用されていた。この学名は WoRMS になく、WMSDB では、亜種から種へと昇格した *Cuvierina urceolaris* (O. A. L. Mörch, 1850)が出て来た(この学名は WoRMS でも有効)。

ヤマボタルガイ *Cochlicopa lubrica* (Müller, 1774)の2点(採集地は、松前町離島小島と伊豆諸島八丈島)と、科名も和名も入力されていない学名 *Cochlicopa lubrica* (Müller, 1774)だけの種1点(採集地は、イギリス・ノーフォーク州)は、ヤマボタルガイ科 Cionellidae に分類されていた。これに対し、ヤマボタル

*Cochlicopa lubrica* (Miller, 1774)の1点は、ヤマボタル科 Cochlicopidae に分類されていた(採集地は稚内市宗谷で、Miller は Müller の誤入力)。淡水産貝類と判断し、WMSDB 検索を掛けると、*Cochlicopa lubrica* (O. F. Müller, 1774)と *Cochlicopa lubrica hachijoensis* H. A. Pilsbry, 1902 の1種1亜種が出て来た。前者は欧米に広く分布し、日本での記録も存在した。後者は伊豆諸島新居島での記録であった。Google で *Cochlicopa lubrica hachijoensis* の引用符検索を掛けると、ハチジョウヤマボタルの和名が出て来た。上島(2003)ではヤマボタル科 Cionellidae が使われていたが、WMSDB に modified Family Cionellidae to Cochlicopidae という記述があった。ヤマボタル科 Cochlicopidae を有効科名と判断し、伊豆諸島八丈島採集の亜種1点をハチジョウヤマボタル *Cochlicopa lubrica hachijoensis* Pilsbry, 1902、残りの種3点をヤマボタル *Cochlicopa lubrica* (Müller, 1774)と結論付けた。

トビシママメマイマイ *Trishoplita conulina* (Martens, 1867)の9点以外に、この和名が括弧付きで入力されている種2点[エンスイマイマイ(トビシママメマイマイ) *Trishoplita conospira* (Pfeiffer, 1851)]と、亜種31点[マメマイマイ(トビシママメマイマイ) *Trishoplita commoda commoda* (A. Adams, 1868)]が存在した(1点はマメマイマイとだけ入力)。亀田(2018)では、トビシママメマイマイ、エンスイマイマイ、マメマイマイの和名は有効とされている。WMSDB では、これら3種の属名は *Trishoplita* から *Aegista* へと変更され、エンスイマイマイでは種小名も変更されていた [*Aegista izuensis* (Pilsbry & Hirase, 1904)]。エンスイマイマイの種小名 *conospira* はカタママメマイマイの誤査定と考えられ、肥後・後藤(1993)では、この学名のシノニム(*Trishoplita izuensis* Pilsbry & Hirase, 1904)がイズママメマイマイの別和名で記載されている。

リングマイマイ *Hedleyella falconari* (Reeve)には、アカマイマイ科 Acavidae とオニグチギセル科 Odontostomidae の2つの科名が入力されていた。こ

これらの謎をひもとくためには、第一に、リングマイマイの分布域はヨーロッパに限られるのに対し、採集地はオーストラリアのクイーンズランド州になっていた(オーストラリアにリングマイマイが移入種として生息していることが、和名間違いに繋がっている)。入力されている学名には種小名の誤入力と命名年の欠落が見られ、WoRMS や WMSDB では命名者名も異なる *Hedleyella falconeri* (Grey, 1834)が適用されていた(科名はアカマイマイ科でもオニグチギセル科でもなく、Caryodidae 科)。この学名を持つ種はオーストラリア固有種で(Murphy, 2002)、和名はないようであった(英名は giant panda snail)。この種はリングマイマイではなかったことになる。リングマイマイはエスカルゴとも呼ばれ、WMSDB では *Helix pomatia* Linnaeus, 1758 が有効学名であった(マイマイ科 Helicidae)。収蔵資料 DB ではエスカルゴ *Helix (Helix) pomatia* Linne と入力されていたが、チリロウバイ科 Nuculanidae と誤入力されていた。

カブトウラシマ *Echinophoria kurodai* Abbott, 1968 の1点は、BISMaL や WMSDB ではシノニムとされ、和名と種小名が異なるナンバンカブトウラシマ *Echinophoria wyvillei* (R. B. Watson, 1886)が適用されていた。WoRMS では、*Echinophoria kurodai* (Abbott, 1968)もまた生きていた(原記載は *Phalium kurodai* Abbott, 1968)。著者らは WoRMS を優れた DB と判断し、基本的に WoRMS には充分な敬意を払っているが、*Echinophoria wyvillei* (R. B. Watson, 1886)の分類群で *Echinophoria wyvillei* (f) *kurodai* の image を採用していることから、*Echinophoria kurodai* (Abbott, 1968)を有効学名とすることには疑義がある。収蔵資料 DB にナンバンカブトウラシマ *Echinophoria wyvillei* (Watson, 1886)が2点、ダイオウカブトウラシマガイ *Echinophoria coronadoi wyvillei* (Watson, 1886)が1点、イボカブトウラシマガイ *Galeodea rugosa* (Linnaeus, 1758)が1点ある。加藤目録で確かめると、それぞれイボカブトウラシマガイ *Galeodea echinophora*

(Linnaeus, 1758)、ダイオウカブトウラシマガイ *Galeodea rugosa* (Linnaeus, 1758)、ナンバンカブトウラシマ *Echinophoria coronadoi wyvillei* (Watson, 1886)と記述されていた。カブトウラシマ *Echinophoria kurodai* Abbott, 1968、及びナンバンカブトウラシマ *Echinophoria wyvillei* (Watson, 1886)には、ナンバンカブトウラシマ *Echinophoria wyvillei* (R. B. Watson, 1886)を適用すべきと判断した。ダイオウカブトウラシマガイ *Echinophoria coronadoi wyvillei* (Watson, 1886)には、WoRMS の *Galeodea rugosa* (Linnaeus, 1758)を適用した。イボカブトウラシマガイ *Galeodea rugosa* (Linnaeus, 1758)には、加藤目録や WoRMS と同じ、*Galeodea echinophora* (Linnaeus, 1758)を適用した(この学名は収蔵資料 DB に存在しない)。

モカボと和名だけ入力されている種(目名、科名、学名、採集地、採集年月日、採集者名なし)は、頭足綱 Cephalopoda と入力されているにもかかわらず、腹足綱 Gastropoda を表す Ga に分類されていた(YAMA3Ga007504)。モカボで Google の引用符検索を掛けると、ヒットするのは収蔵資料 DB だけで、動物部門が所有する図鑑類にも存在しない正体不明種であった。標本状態が「貝殻」と入力されているので、オウムガイやタコブネの仲間と推測し、標本に当たって調べたところ、殻高 1.5 mm の小さな巻貝であった。頭足綱というのは間違いで、腹足綱であることだけは確かであったが、実体顕微鏡で観察しても同定不能であった。キュウシュウナミノコと和名だけ入力されている種(YAMA3Ga007592)には、BISMaL では和名なし *Donax kiusiuensis* Pilsbry, 1901 が適用されていた(この学名は WoRMS でも有効)。問題は、この種に腹足綱 Gastropoda / 新腹足目 Neogastropoda / イモガイ科 Conidae と入力されていることで、BISMaL と WoRMS を比較検討した結果、二枚貝綱 Bivalvia / Cardiida 目 / フジノハナガイ科 Donacidae に変更した。

*Volachlamys hirasei* (Bavay, 1904)には、アワジチヒ

ロ3点とヤミノニシキ1点の2つの和名が入力されていた。アワジチヒロ1点の和名には「外口種」という、見たことのない用語が入力されていた。BISMaLによると、この種の学名は正確に入力されていて(オリジナルラベルには *Pecten* という属名が書いてあるので、当時の担当者が新しい学名を入力したものと考えられる)、和名はヤミノニシキ/アワジチヒロとなっていた。Googleの引用符検索では、外口種との一致はなかった。この種は二枚貝の仲間なので、貝の口が外に開く可能性は低いとしても、奇形種の可能性は高いと思われた。標本に当たって調べたところ、何の変哲もない二枚貝であった。オリジナルラベルにも「外口種」と書いてあったが、口と読める文字に癖があって、国という漢字の省略形と判断した(つまり、外国種と書いてある)。

同じと思われる学名には、ヒョウモンイカ *Sepia (Doratosepion) pardex* Sasaki, 1913 とヒョウモンコウイカ *Sepin (Doratosepion) pardex* Sasaki, 1913 の2つの和名が入力されていたが、属名が微妙に異なっていた(*Sepia* と *Sepin*)。コウイカ科 *Sepiidae* の他の5種の属名に *Sepia* と入力されているので、*Sepin* は単純な誤入力と思われた。BISMaLでヒョウモンイカという和名を検索すると、該当する分類群が見つかりませんでした」と表示されるのに対し、ヒョウモンコウイカ *Sepia (Doratosepion) pardex* Sasaki, 1913 は存在した。この学名は、WoRMSでは alternate representation として扱われていたので、ヒョウモンコウイカ *Sepia pardex* Sasaki, 1913 を有効な和名・学名とした。この種の目名として入力されているコウイカ目 *Sepioidea* は、BISMaLでは同じ *Sepioidea* Naef, 1916 が適用されているのに対し、WoRMSとWMSDBでは *Sepiida* Zittel, 1895 が適用されていた(BISMaLの *Sepioidea* はWoRMSでもWMSDBでも検索できず、目名のシノニムにも出て来ない)。

ヒダトリサザエ *Marmorostoma squamosum* は、WoRMSで *Marmorostoma* を曖昧検索すると、*Turbo*

(*Marmorostoma*) Swainson, 1829 が出て来た(属名の誤入力)。Googleでヒダトリサザエを検索すると、*Turbo squamosus* Gray, 1847 が出て来た(微小貝データベース, 2018c)。以上の結果から「収蔵資料DBの学名は、属名 *Marmorostoma* と種小名 *squamosum* の誤入力ではないか」と考えた。WoRMSで *Turbo squamosus* を検索すると、この学名もシノニムで、有効学名は *Turbo laminiferus* Reeve, 1848 であった。以上の結果から、ヒダトリサザエ *Marmorostoma squamosum* の学名を *Turbo laminiferus* Reeve, 1848 に変更した(鈴木稔コレクションでラベルの学名を調べたところ、学名の誤入力は元々のラベルの記入ミスであった)。

サザエ *Turbo (Batillus) cornutus* Lightfoot, 1786 と入力されている種は、BISMaL検索した時点で亜属を除いた学名 *Turbo cornutus* Lightfoot, 1786 の Alternate Representation になっていた。最近の研究で、日本のサザエには最初から学名がなかったことが明らかになり、*Turbo sazae* Fukuda, 2017 という学名が与えられた(Fukuda, 2017)。この学名は、既にWoRMSでは有効とされている。*Turbo cornutus* Lightfoot, 1786 がWoRMSで確認されているが、これはサザエとは別種の中国原産ナンカイサザエに対して与えられた学名であった。1995年にナンカイサザエの学名として記載された *Turbo chinensis* Ozawa & Tomida, 1995 は、現在は新参異名として取り扱われている。

ドブガイモドキ *Pletholophus discoidea* (Lea, 1834) の学名をWMSDBで検索すると、属名が異なる *Cristaria discoidea* (I. Lea, 1834) というシノニムがヒットし、入力された学名とは属名も種小名も異なる *Cristaria tenuis* (E. Griffith & E. Pidgeon, 1833) が出て来た。2018年5月25日、大阪教育大学名誉教授の近藤高貴さんが調査のため来館し、県博所蔵の鈴木稔貝類コレクションの中の1点が、ドブガイモドキ(滋賀県琵琶湖産, 1966)であることを確認した。この種は、東京都(Yeddo, 1874)で採集された標本を基に新種記載された淡水産二枚貝(イシガイ科/ドブガ



イモドキ属)で、沖縄県(石垣島, 2008)、福岡県(宗像市, 2012)に次ぐ、国内3例目の産地記録であった(近藤・本間, 2018)。この文献では、属名が *Cristaria* から *Pletholophus* に戻っていて、ドブガイイモドキの学名は *Pletholophus tenuis* (Gray in Griffith & Pidgeon, 1833)になっていた。2018年8月9日更新の MUSSELp では、*Pletholophus tenuis* (Griffith & Pidgeon, 1833)となっていて、詳述されているシノニムの変遷から、これを有効学名と判断した。

## 11 採集地

S-Net/GBIF への登録に際し、採集地の位置情報(緯度・経度)を記入することが求められている。そのため、出来るだけ正確な採集地情報が必要であったが、収蔵資料 DB では採集地情報に不正確なものが存在した(e.g., 奄美大島の所在地が、鹿児島県ではなく沖縄県になっている)。

カンムリウミスズメの採集地として入力されている静岡県下田町(現、下田市)「鵜(ウ)島」は、国土地理院の地図(1/25,000)に存在せず、どの検索でもヒットしなかった(採集年月日: 1947年4月10日)。オリジナルラベルの台帳では「鴉(カラス)の島」と書かれていて、県博のラベルでは「の」が抜けて鴉(カラス)島になっていた。この鴉(カラス)という字に黒ペンで○が付けられ、鵜(ウ)に訂正されていた。このことから、収蔵資料 DB に入力する段階で鵜(ウ)島になった、誤表記の可能性が高いと考えられる。昔、下田港に山城があり、この城を鵜(ウ)島城と呼んでいたことから、当時の担当者が「鵜(ウ)島」に書き換えたようである。ちなみに、鴉(カラス)島は、現在の地図上には存在しない。江戸時代の絵図で、下田湾内に鴉(カラス)シマという島があり、港湾整備後の地図上の位置と照合した結果、現在「毘沙子(ミサゴ)島」と呼ばれている島が、鴉(カラス)シマと考えて良いとのことである(武石, 私信)。

オーストラリア・ビクトリア州シドニー通りと入

力されているアワジチヒロ *Volachlamys hirasei* (Bavay, 1904)の採集地を標本に当たって調べたところ、採集地のメモに「Sanday St. Qld. Australia」と記述されていた。ビクトリア州ではなくクイーンズランド州であったが、シドニー通りという地名、及び Sanday St. (サンデイ通り?)が気になったので調べたところ、Sanday St. というメモも正確ではなく、Great Sandy Strait という海峡であった(メモの Sanday は記載ミスで、Google マップに Sanday St, Glen Waverley VIC 3150 Australia という住所が存在するので、おそらく入力担当者は、この住所からビクトリア州と誤って入力してしまったのだろうと推測される)。

## 12 終わりに

この原稿を執筆している時点で、県博が運営・公開している収蔵資料 DB はソフトのバージョンが古く、書き換え不能な状態が続いている。S-Net/GBIF への登録のために始めた動物資料の学名チェックではあったが、様々な学名の不具合は、図らずも DB システムの書き換え不能という県博全体の問題になってしまっている。また、これは県博に対する山形県の予算の割り当ての問題でもある(県からは優先順位が低いと見なされ、予算が下りて来ない)。動物資料以外の DB が機能的な役割を果たしているのかどうか定かではないが、収蔵資料 DB で学名の誤入力が多いことや学名が古いこと、学名の一部が全角入力されていることでインターネット検索に引っ掛からなければ、または学名が間違っていれば、貴重な資料もないと同然である。それだけなら未だしも、様々な学名の不具合は、県博全体の信頼性を失墜させてしまう危険性が高い。今後は、動物の収蔵資料 DB を外部からアクセス出来ない状態にしておいて、システムを更新するなり新しいソフトを入れるなりして、世界中の誰もが、県博が所有する動物資料の正確な学名を利用できるように、収蔵資料 DB を改善して行く必要がある。

以上、S-Net/GBIF への登録と連動し、ひとつの物語になりそうな項目を主体的に取り上げて文章を書いてみたが、他にも記録として文章を残しておきたい項目は山ほどあり、ページ数の制限でかなりの項目を割愛している。従って、ここに挙げてある項目は、著者らが間違いを正した中のほんの一部に過ぎないことをお断りしておく。また、文章全体の約 8 割を軟体動物門(特に腹足類)の記述に充てているの

## 引用文献

- 微小貝データベース (2018a) [http://bigai.world.coocan.jp/pic\\_book/data84/r008398.html](http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data84/r008398.html) (accessed on 20 Oct 2018)
- 微小貝データベース (2018b) [http://bigai.world.coocan.jp/pic\\_book/data65/r006470.html](http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data65/r006470.html) (accessed on 2 Nov 2018)
- 微小貝データベース (2018c) [http://bigai.world.coocan.jp/pic\\_book/data40/r003996.html](http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data40/r003996.html) (accessed on 7 Nov 2018)
- 微小貝データベース (2018d) [http://bigai.world.coocan.jp/pic\\_book/data79/r007812.html](http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data79/r007812.html) (accessed on 22 Nov 2018)
- 微小貝データベース (2018e) [http://bigai.world.coocan.jp/pic\\_book/data01/a0363.html](http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data01/a0363.html) (accessed on 30 Nov 2018)
- 微小貝データベース (2018f) [http://bigai.world.coocan.jp/pic\\_book/data36/r003515.html](http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data36/r003515.html) (accessed on 5 Dec 2018)
- 微小貝データベース (2018g) [http://bigai.world.coocan.jp/pic\\_book/data39/r003885.html](http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data39/r003885.html) (accessed on 7 Dec 2018)
- 微小貝データベース (2019a) [http://bigai.world.coocan.jp/pic\\_book/data26/r002561.html](http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data26/r002561.html) (accessed on 9 Jan 2019)
- 微小貝データベース (2019b) [http://bigai.world.coocan.jp/pic\\_book/data02/a2182.html](http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data02/a2182.html) (accessed on 5 Feb 2019)
- 微小貝データベース (2019c) [http://bigai.world.coocan.jp/pic\\_book/data49/r004869.html](http://bigai.world.coocan.jp/pic_book/data49/r004869.html) (accessed on 8 Feb 2019)
- Cernohorsky WO (1965) The Mitridae of Fiji. *Veliger* 8: 70–160
- Fukuda H (2017) Nomenclature of the horned turbans previously known as *Turbo cornutus* [Lightfoot], 1786 and *Turbo chinensis* Ozawa & Tomida, 1995 (Vetigastropoda: Trochoidea: Turbinidae) from China, Japan and Korea. *Molluscan Res* 37: 268–281
- Hasegawa K (2009) Upper bathyal gastropods of the Pacific coast of northern Honshu, Japan, chiefly collected by R/V Wakataka-maru. In: T Fujita (Ed), *Deep-sea fauna and pollutants off Pacific coast of northern Japan*. Natl Mus Nat Sci Monogr 39, pp 225–383
- 羽角正人 (2018) 博物館新任職員より. 動物部門 羽角正人. 山形県立博物館友の会会報 33: 3
- 肥後俊一・後藤芳央 (1993) 日本及び周辺地域産軟体動物総目録. エル貝類出版局, 大阪

は、この分類群に貝類コレクションのマニアが多く、学名の変遷が多岐にわたっているからに他ならない。

## 謝辞

鴉シマに関する情報を提供していただいた、北九州市立自然史博物館の武石全慈学芸員に深く感謝の意を表す。

- 菱田嘉一 (2000) 世界海産貝類コレクション大図鑑. 電気書院, 東京
- 亀田勇一 (2018) 陸・淡水産腹足類日本固有種目録(2018年3月版). [http://www.kahaku.go.jp/research/activities/project/hotspot\\_japan/endemic\\_list/](http://www.kahaku.go.jp/research/activities/project/hotspot_japan/endemic_list/)
- 川田伸一郎・岩佐真宏・福井大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽創・姉崎智子・横畑泰志 (2018) 世界哺乳類標準和名目録. 哺乳類科学第 58 巻別冊 京都大学総合博物館 (2019) 自然史収蔵資料. 貝類. <http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/collection/Shell/Shell00002139.htm> (accessed on 24 Feb 2019)
- 近藤高貴・本間正明 (2018) 琵琶湖で採集されたドブガイモドキ. *ちりぼたん* 49(1–2): 47–49
- Murphy MJ (2002) Observations on the behaviour of the Australian land snail *Hedleyella falconeri* (Gray, 1834) (Pulmonata: Caryodidae) using the spool-and-line tracking technique. *Molluscan Res* 22: 149–164
- OBIS Indo-Pacific Molluscan Database (2018a) <http://clade.ansp.org/obis/search.php/94225> (accessed on 8 Nov 2018)
- OBIS Indo-Pacific Molluscan Database (2018b) <http://clade.ansp.org/obis/search.php/86679> (accessed on 15 Nov 2018)
- 奥谷喬司(編著) (2000) 日本近海産貝類図鑑. 東海大学出版会, 東京
- 奥谷喬司(編著) (2017) 日本近海産貝類図鑑, 第二版. 東海大学出版会, 東京
- 佐々木猛智 (2002) 貝の博物誌(東京大学コレクション XV). 東京大学総合研究博物館, 東京
- 佐々木猛智 (2018) 軟体動物和名学名一覧表. <http://www.um.u-tokyo.ac.jp/hp/sasaki/02-malacology/01-list/wamei-gakumei.htm> (accessed on 8 Dec 2018)
- 鹿間時夫 (1964) 原色図鑑 続 世界の貝. 北隆館, 東京
- 上島勲 (2003) ヤマボタル科. In: 日本分類学会連合(編), 第 1 回日本産生物種数調査. <http://ujssb.org/biospnum/search.php>
- Yoshikawa N, Matsui M (2014) Two new salamanders of the genus *Onychodactylus* from eastern Honshu, Japan (Amphibia, Caudata, Hynobiidae). *Zootaxa* 3866: 53–78